

満洲スポーツ史話 (I)

高 嶋 航

はじめに

満洲のスポーツを知るにはどうすればよいか。同じ外地のスポーツであっても、朝鮮なら大島勝太郎の『朝鮮野球史』があり、また『大韓体育会史』もある¹。最近では小野容照『帝国日本と朝鮮野球：憧憬とナショナリズムの隘路』、金誠『近代日本・朝鮮とスポーツ：支配と抵抗、そして協力へ』などが出ている²。台湾なら湯川充雄の『台湾野球史』があり、謝仕淵『国球誕生前記：日治時期台湾棒球史』や林丁国『観念、組織与实践：日治時期台湾体育運動之發展』などがある³。たしかに満洲についても、満洲国建国以降であれば、十分とはいえないながらも研究はある。たとえば、『満洲国建国十年史』の簡潔な説明、入江克己の「日本近代における植民地体育政策の研究」や孫雅玲「満洲国体育活動發展之研究」などである⁴。しかし、満洲国建国以前となれば、『大連実業野球団二十年史』や西脇良朋『満州・関東州・華北中等学校野球史』など、野球の資料集しかない⁵。

¹ 大島勝太郎『朝鮮野球史』朝鮮野球史発行所、1932年；大韓体育会編『大韓体育会史』大韓体育会、1965年。

² 小野容照『帝国日本と朝鮮野球：憧憬とナショナリズムの隘路』中央公論新社、2017年；金誠『近代日本・朝鮮とスポーツ：支配と抵抗、そして協力へ』塙書房、2017年。

³ 湯川充雄『台湾野球史』台湾日日新報社運動具部、1932年；謝仕淵『国球誕生前記：日治時期台湾棒球史』国立台湾歴史博物館、2012年；林丁国『観念、組織与实践：日治時期台湾体育運動之發展』稲郷出版社、2012年。

⁴ 満洲帝国政府編『満洲国建国十年史』原書房、1969年、873-907頁；入江克己「日本近代における植民地体育政策の研究（第1-6報）」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』35巻2号-38巻2号、1993年12月-1996年12月；孫雅玲「満洲国体育活動發展之研究」修士論文、国立台東大学、2004年。

⁵ 宮崎愿一・安藤忍・立上武三編『大連実業野球団二十年史』安藤商店、1932年；西脇良朋『満州・関東州・華北中等学校野球史』西脇良朋、1999年；秦源治『わが国球界をリードした大連野球界』20世紀大連会議、2009年。小林完一編『満洲倶楽部野球史』満鉄会、1969年もあるが、資料的価値は低い。

いったい、満洲で各種のスポーツがいつどのように始まり、どのように発展したのか。この基本的な問いに対する答えはまだ明らかになっていない。なぜこれまで満洲のスポーツが注目されなかったかという、その重要性が認識されていなかったからである。満洲は帝国日本の辺境ではあるが、「運動王国の満洲」「日本のフィンランド」と呼ばれたように、スポーツの世界では先進地域であった⁶。

満洲（本稿では満洲国建国以前に限定する）のスポーツを知るための資料は、それこそ山のようにある。そのうち最も基本的な資料は『満洲日日新聞／満洲日報』（以下、『満日』）と『大連新聞』である。本稿はこの両紙を通覧するなかで作成したメモをもとに、満洲の各種スポーツの基本的な輪郭を示すものである。両紙は大連で刊行されたため、記述の中心は大連におかれるが（大連はスポーツの中心でもあった）、大連以外の地域にも目配りし、さらに内地や朝鮮などとの関係についても触れていきたい。こうした作業の先に、帝国日本全体を論じる視座が開けてくるであろう。

全体の量が多いため、今回は野球に関する8つのトピックを取り上げる。他のトピックはさらに2回に分けて掲載する予定である⁷。

本論に入る前に、注に関して説明しておく。すべての記述に対して注を付すのは、あまりに煩雑なため、おおむね下記の方針に拠った。

- ① 試合等に関する叙述で、『満日』『大連新聞』に拠る場合、注は付さない。ただし、試合の日と記事の掲載日が離れている場合は、注を付すこともある。
- ② 両紙の記事でも、直接引用をした場合は注を付す。
- ③ 両紙以外の資料は基本的に注を付す。

注に両紙以外の資料しか挙げていない場合でも、両紙を典拠として叙述していることがあるので注意されたい。

⁶ たとえば、佐藤政雄「南満に陸競大会を」『満日』1930年9月6日。当時のフィンランドは陸上競技と水上競技の大国だった。帝国日本のスポーツ界における外地の位置づけについては、高嶋航・金誠編『帝国日本と越境するアスリート』塙書房、2020年、プロローグを参照。

⁷ 現在準備しているトピックは以下の通りである。YMCA、ゴルフ、サッカー、スキー、スピードスケート、フィギュアスケート、アイスホッケー、テニス、バスケットボール、バレーボール、ボート、ラグビー、運動具店、海水浴場とプール、弓道、競技団体、射撃、柔道・剣道、水泳、卓球、馬術、保健浴場、満鉄と満鉄運動会、陸上競技、インターカレッジ、軍隊、中国人とスポーツ。

第1話 野球 I (大連)

1907年秋に京都帝大を卒業し、南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）調査部で働いていた平野正朝は、1908年正月に旧知の大連税関長黒沢礼吉にばったり出くわした。その次の日曜日に平野は黒沢の家を訪れ、野球の話で盛り上がった。それもそのはず、平野は水戸中学、一高の野球部選手で、学生野球の父飛田穂洲から「多くの先輩に先んじて野球武士道を鼓吹した人」と評される人物⁸、黒沢も東京で少年野球の世話をしていたほどの野球好き。「ドーダヤルカ」と黒沢。「ヤリタイデスガ満洲デハ夢デスネ」と平野がこぼすと、「ナニ道具ハアルヨ」と黒沢。なんと黒沢は大連赴任時にボールとミットを携えてきており、その後バットとベースを取り寄せて倉庫にしまっていたのだ。野球をやりたいが、相手がおらず困っていたところに平野に出会ったのである⁹。

まだ春にはほど遠い3月8日、設立まもない若葉会（平野が教えていた満鉄見習夜学校生徒の組織）と黒沢が率いる税関職員が虎公園（のち西公園）に会した。この日はノックが主体だったが、最後にちょっとした練習試合を行った。満洲で最初の野球試合だった。やがて満鉄少社社員や市内の有志なども野球を始め、秋には野球試合が5回行われた。

1909年4月、満鉄社内の野球好きが集まって大連野球団を組織した。発会式には満鉄の中村是公総裁の代理として沼田政二郎庶務課長（若葉会会長でもあった）が始球式を行い、見習と幼年組、見習と社員がそれぞれ対戦した。審判をつとめたのは光明洋行の平岡寅之助、日本で最初の社会人野球チーム新橋アスレチック倶楽部を結成した平岡熙の弟である。当日の写真を見ると、真新しいユニフォームに身を包み、なかなか本格的である¹⁰。

1909年秋に夏目漱石が来連したとき、漱石を招待した満鉄の中村総裁は野球の観戦中だった¹¹。中村が観戦していたのはアメリカ東洋艦隊と満鉄若葉会の試合（若葉会側

⁸ 飛田穂洲『野球人国記』誠文堂、1931年、68-76頁。

⁹ 「大連野球の石器時代：満洲野球の開祖」『大連日日新聞』1941年4月11日（上西隆男編『平野正朝先生還暦記念集』平野正朝先生還暦記念集刊行会、1941年、第二編、8-9頁）。

¹⁰ 上西隆男編『平野正朝先生還暦記念集』82-83頁間の写真（ページ数記載なし）。

¹¹ 夏目漱石「満韓とところどころ」『東京朝日新聞』1909年10月27日。

が申し込んだ)で、大連最初の対外試合であった。まだ野球は珍しかった時代である。『遼東新報』は「大陸的運動たる野球の適切なるに拘らず未だ^{ママ}盛視を見るに至らざりし……苟くも植民地発展に意を注いで対外関係を念とするの士は看過す可からざる機会」だとし、参観者は「毛唐」「碧眼」などと悪口雑言せず、野球団は「教導を乞ふの態度」で試合に臨むよう要請している¹²。ここに見える野球観、スポーツ観ゆえに、満鉄は早くに満鉄運動会を組織してスポーツを奨励したのである。その中心人物の一人が、ほかならぬ中村是公だった。

平野は一高に在籍していた一九〇一年、米艦ケンタッキー号チームと対戦したことがある。当時、伝説的大投手守山恒太郎を擁する一高で、平野はセカンドを守っていた。技では勝てないから、体当たりで挑んだという。盗塁のさい、わざと相手選手にぶつかり、球を落とさせるのである。一高は四対〇で米艦を破った¹³。しかし、今回は二戦とも大敗であった。

アメリカ軍の水兵は野球の観戦とともに、賭けも楽しんだ。翌日からは水兵同士の試合が始まり、2日間の滞在予定が5日間に延びた。その間、大連には5万円のお金が落ちたという。この話が満鉄重役の耳に入り、「毎年米艦を迎えるのは市の繁栄を図る上に非常に効果がある、其手段としては野球を奨励するが早道だ」ということになって野球場をつくり、野球選手を社員に採用するようになったと中川久明が1930年に述べている¹⁴。もっとも、この話は中川が1915年に満鉄に入社する以前のことなので、信憑性が高いとはいえない。

1910年には、埠頭倶楽部、旅順工科学堂、三井倶楽部と3つの野球チームが誕生した。若葉会はこの年の試合に全勝している。しかし、若葉の時代は長くは続かなかった。翌1911年、若葉会は旅順工科学堂に二連敗を喫した。この年、電気作業所、工務課、会計課など満鉄の課所単位のチームが生まれ、1912年には埠頭、電気、満鉄本社、混合、三井、若葉の6チームによる連合野球大会が開催された。ただし、連合野球大会といっても、3組の試合が行われただけで、優勝チームを決めるようなものではなかった。同

¹² 『遼東新報』1909年9月3日(宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』5-6頁)。

¹³ 兄玉親徳「平野の正ちゃん」上西隆男編『平野正朝先生還暦記念集』42頁。

¹⁴ 中川久明「野球見物十五年の思出」『満日』1930年1月1日。

年には関東都督府中学校（のちの旅順中学）でも野球チームが組織された¹⁵。1913年3月には在連5球団によるリーグ戦、翌年2月にも大連野球団の連合試合を挙げる計画を立てられるが、いずれも実現しなかった。前田俊介（のち前田叢司と改名）によれば、実業団の創立当初（1913年）は練習などせず試合ばかりしていた。どこかのチームに新人が入るとそのチームが試合を持ちかけてくる。というのも、新戦力を得たほうが勝つに決まっているからだった¹⁶。

創立間もない実業団を撃破して勢いに乗ったのが早大出身の井上芳雄率いる埠頭である。1915年には4月下旬から合宿し、6月末に営口、翌月初めに長春に遠征した。翌年は2月下旬から緑温泉附近に合宿し、東の空が白んだ頃にグラウンドに出かけ、球が見えなくなってから帰るといふ猛烈な練習を積み重ねた。その様子を聞いた大連駅も合宿を始めた¹⁷。当時、大連駅と埠頭は野球だけでなく、陸上競技やボートでも張りあっていた。

1916年6月4日、満日社主催の第1回関東州野球大会が大連で開かれた（表1-1）。この大会の発案者は満日社会部の山口源二（山口海旋風）だった。山口は満洲野球界きつてのルール通であった経済部の渡辺三角洲の同意を得て、村田誠治副社長に野球大会開催の許可を求めた。野球を単なる遊戯と侮蔑していた村田は諾否を明確にしなかったが、山口の再三の説得でようやく許可を与えた¹⁸。大会創設の背景には、用度課、地方課、満鉄従業員養成所、通信管理局、沙河口工場、BC倶楽部、大連商業学校、青年会など、次々と新しいチームが組織されていたことがあるだろう。もっとも、大会に参加したのは大連実業、南満工業、旅順工科学堂、大連駅、埠頭、満鉄本社といずれも歴史のあるチームで、創設間もないチームは参加を見送った。初戦に勝った実業、大連駅、埠頭の3チームで決勝戦が行われ、まず実業が埠頭に勝ち、埠頭が大連駅に勝つたことで、実業の優勝が決まった。

¹⁵ 都督府中学チームが旅順第一、第二小学校職員と対戦した記録がある（『野球試合の勝負』『満日』1912年10月28日）。

¹⁶ 「BM戦の昔を語る②」『満日』1936年5月31日。

¹⁷ 「運動季節来る」『満日』1916年3月20日。

¹⁸ 山口海旋風「YMCA 野球部の回顧」大連基督教青年会編『恩寵廿年』大連基督教青年会、1930年、302-309頁。

表 1-1 関東州野球大会

回	年	優勝	準優勝	出場チーム	チーム数
1	1916	大連実業	埠頭	大連駅、大連実業、南満工業、埠頭、満鉄本社、旅順工科学堂	6
2	1917	大連実業	埠頭	大連駅、大連商業、大連実業、南満工業、埠頭、満鉄沙河口工場、満鉄本社、満鉄用度課、旅順工科学堂	9
3	1918	満鉄本社	大連実業	青年会、大連駅、大連実業、大連商業、南満工業、満鉄沙河口工場、満鉄本社、満鉄用度課、満鉄若葉会、薬業団、旅順工科学堂	11
4	1919	満鉄本社	大連実業	海関、商友倶楽部、大正倶楽部、大連駅、大連実業、大連商業、電気作業所、南満工業、埠頭、満鉄沙河口工場、満鉄本社、満鉄用度課、満鉄若葉会、横浜倶楽部、旅順工科学堂	15
5	1920	満鉄本社	大連汽船	商友倶楽部、大正倶楽部、大連駅、大連汽船、大連銀行団、大連倶楽部、大連実業、大連商業、電気作業所、南満工業、伏水会、埠頭、満鉄沙河口工場、満鉄本社、満鉄若葉会、みどり会、旅順工科学堂、旅順中学	18
6	1921	三井物産	旅順中学	大連汽船、大連商業、電気作業所、南満工業、埠頭、満鉄沙河口工場、満鉄用度課、満鉄若葉会、三井物産、旅順中学	10
7	1922	三井物産	満鉄沙河口工場	銀行団、聖徳会、線路、大連汽船、通信倶楽部、電気作業所、満鉄沙河口工場、満鉄地方部、満鉄用度課、満鉄若葉会、南満工業、埠頭、三井物産、旅順工大、旅順中学	16
8	1923	満鉄沙河口工場	大連汽船	大広場、聖徳会、青年会、大連汽船、大連商業、通信倶楽部、電気作業所、南満工業、埠頭、法政学院、満鉄興業部、満鉄沙河口工場、消費組合、満鉄地方部、満鉄鉄道部、満鉄用度課、満鉄若葉会、三菱、旅順工大	17
9	1924	通信倶楽部	大連商業	大連汽船、大連商業、通信局、電気作業所、南満工専、埠頭、満鉄育成、満鉄経理部、満鉄興業部、満鉄沙河口工場、消費組合、満鉄地方部、満鉄鉄道部、満鉄用度課、三菱、旅順工大	16
10	1925	消費組合	南満工専	大連汽船、大連商業、通信、電気作業所、南満工専、埠頭、消費組合、満鉄興業部、満鉄鉄道部、満鉄用度課、満鉄若葉会、三菱、旅順工大	13
11	1926	大連汽船	満鉄若葉会	大連汽船、大連商業、鉄道倶楽部、電気作業所、南満工専、埠頭、満鉄興業部、消費組合、満鉄鉄道部、満鉄用度課、満鉄若葉会、旅順工大	12
12	1927	消費組合	満鉄用度課	国際運輸、大連汽船、大連商業、鉄道事務所、電気作業所、南満工専、日清、埠頭、満鉄興業部、満鉄沙河口工場、消費組合、満鉄用度課、満鉄若葉会、三菱	14
13	1928	消費組合	南満電気	国際運輸、大連汽船、大連商業、鉄道事務所、南満工専、満鉄育成学校、満鉄興業部、満鉄沙河口工場、消費組合、満鉄鉄道部、満鉄用度課、南満電気	12
14	1929	南満電気	国際運輸	国際運輸、大連商業、鉄道事務所、南満工専、満鉄沙河口工場、消費組合、満鉄鉄道部、満鉄用度課、南満電気、旅順工大	10
15	1930	消費組合	国際運輸	国際運輸、大連商業、鉄道事務所、満鉄沙河口工場、消費組合、満鉄鉄道部、南満洲電気	7
16	1931	国際運輸	満鉄鉄道部	国際運輸、大連OB、大連商業、広島倶楽部、南満工専、満鉄沙河口工場、消費組合、満鉄鉄道部、南満電気、旅順工大	10

『満日』は「大会後に於ける大連の野球熱は幾んど青少年の間に時代精神を為せるの観がある」として、夕方になるとあちこちの空き地や広場で青年や子供がキャッチボールをするようになり、浜町には少年野球団が2チームも組織され、古い歴史を有するチームも新しく組織されたチームも盛んに練習をはじめ、日曜日ごとの試合にはこれまでにないほど多くの観客が押し寄せていると記した¹⁹。大連実業団の前田主将が、満洲の野球は「関東州野球大会からはつきりして来た²⁰」というように、同大会は大連のみならず満洲の野球界にとって大きな画期となった。

第2回関東州野球大会、打倒大連実業を目指す満鉄本社は京都一商から和田正三投手を迎える。実業との試合、和田は奪三振16の好投を見せながら、エラー続出のため4対5で敗れた。その後、実業はふたたび決勝で埠頭を破り、二連覇を果たした。満鉄本社は実業の三連覇を阻止するために早大から岸一郎投手を呼び寄せ、第3回大会に臨んだ。結果は岸の活躍で満鉄本社は初優勝を飾った。勢いに乗る満鉄本社は第4回大会も優勝した。第5回大会は参加チーム数が18（うち初参加が6）と歴代大会最多となった。満鉄本社と実業は早くも2回戦で激突した。事実上の決勝戦である。観衆は3万。満鉄本社は岸、実業は石本秀一が先発、5回に先制した満鉄本社が5対2で実業を破った。満鉄本社は準決勝、決勝でエースの岸を温存したが、それでも三連覇を成し遂げた。

1921年6月に満日社主催の実満戦が開かれることになり（第3話参照）、これまで5月中旬から6月上旬に開かれていた関東州野球大会は、5月中に完了するように開催時期が変更された。今回参加チームが少なかったのはこの突然の変更と関係があるかもしれない。大連では気候の関係で4月に入ってから練習が始まるので、4月中旬の申込締切に編成が間に合わなかった可能性もある。今回から大連実業野球団（実業）と満洲倶楽部（満倶）は関東州野球大会に出場できないことになり、満倶の岸一郎、実業の前田俊介らは審判として参加した（ただし、満倶選手は満鉄各課所チームから、実業選手は職場チームから出場できた）。その結果、本大会は「関東州各中等学校を中心として挙行」されることになった（この点は、本年からライバルの遼東新報社主催

¹⁹ 「野球叢談」『満日』1916年7月4日。

²⁰ 「BM戦の昔を語る②」『満日』1936年5月31日。

で開かれることになった全国中等学校優勝野球大会満洲予選（第5話参照）を意識していたかもしれない）。実際、最初に発表された参加チーム11のうち5チームが学校関係のチームであった。これまで他チームを圧倒してきた実業と満鉄本社が抜けたことで、どのチームが優勝するか予想がつきにくくなった。そのなかで注目されたのは、主将の大門勝（明大出身）を筆頭に、網干益雄ら満俱選手が揃う満鉄用度課であった。準決勝まで勝ち進んだのは用度、旅順中学、大連汽船で、用度に敗れた三井物産が敗者復活の権利を獲得した。準決勝の組合せは旅順中学と大連汽船、用度と三井物産で、旅順中学と三井物産が決勝に進んだ。旅順中学のエースは児玉政雄、三井は石本秀一。結果は11対6で三井が優勝した。

第7回大会は16チームが参加した。開催期間は前年よりさらに1週間早まったが、各チームともすでに対応策を立てていたのだろう。あるいは前評判の高くなかった三井が勝ったことで、我こそはと息巻いたのかもしれない。市内各地で野球チームが次々と誕生していたことも参加数の増加を後押ししたであろう。前評判が高かったのは用度課、大連汽船、沙河口工場だった。用度と大連汽船は1回戦で激突、初戦は11対11で決着がつかず、第2戦も6対6で決着がつかなかった。両者とも2回戦進出の権利を与えようという意見もあったが、3度目の決戦が実施され、用度が14対3で大勝した。しかし、この激闘の代償は大きかった。2回戦で用度は沙河口工場と対戦し、3対4で惜敗した。決勝は沙河口工場と三井だった。前評判は沙河口が有利で、石本の魔球が沙河口を封じることができなが見所とされた。試合は3対3のまま延長戦に突入し、12回表に3点を入れた三井が二連覇を決めた。決勝の殊勲打を放ったのは趙という選手である。野球界で趙姓の選手といえば早大野球部の趙士倫が思い浮かぶ。1918年の『読売新聞』によれば、趙は三井の北京支店に勤務していたというので、三井の趙選手は趙士倫で間違いないだろう²¹。

第8回大会、参加は17チームと昨年より増えた。昨年の覇者三井はチーム解散の憂き目にあい、石本は広島県人会チームを結成したが、参加はならなかった。決勝に勝ち上がったのは大連汽船と沙河口工場だった。大連汽船は坂本一次主将を病気で欠いたこともあり、2対3で惜敗した。新聞評を読む限り、熱が乏しく決勝戦に相応しい

²¹ 「名選手の行方（十八）」『読売新聞』1918年5月10日。

試合ではなかったようである。

第9回大会は16チームが参加、通信倶楽部が前評判通りの強さを発揮して優勝した。この大会は2つの不祥事に悩まされた。第2回戦の用度対沙河口工場戦、14対12と用度リードで迎えた9回表、用度の攻撃は無得点に終わった。その裏、工場軍は最後の力を振り絞り、2点を返してなお満塁だった。勝利は目前だったが、日没のため球筋が見えなくなってしまった。審判はコールドゲームを宣告し、規定により8回裏までのスコアによって用度の勝ちとした。この決定に、工場の応援団は騒然とした。工場側の抗議を受けた審判団は権威者の意見を聞くこととしたが、その結果如何に関わらず、工場軍は棄権することを告げた。その翌々日の消費組合対旅順工科学堂戦、6対6で迎えた9回、消費が1点を加えてリードし、工大の最後の攻撃に入った。一死二、三塁で打者が三塁線に放った球の判定を巡って紛擾が起こり、応援団が乱入、審判は無勝負を宣告した。主催者は再試合と決定したが、消費は棄権する。さらに2チームが主催者の反省を促すべく棄権するに至った。

1925年は第10回目となる記念の大会で、大阪朝日、大阪毎日両新聞社から優勝旗が寄贈された。前回の不祥事を反省し、応援団への規制が強められたことはいうまでもない。特筆すべきは日程がさらに前倒しされたことで、4月中に全試合が実施され、遼東新報社の実業野球大会（後述）と日程がかぶることになった。新規参加チームがなかったのも初めてのことである。決勝は消費組合と南満工業で、8対7の接戦を消費組合が制した。三井物産が二連覇のあと解散して以来、沙河口工場と通信倶楽部が優勝の翌年に初戦敗退と、関東州野球大会は混沌とした状況にあったが、中沢不二雄（明大出身）主将率いる消費軍は1930年までの間に4度優勝と、安定した力を保ち続けることになる。

第11回大会は12チームの参加である。兵役で竹中二郎投手を失った消費組合は初戦こそ大勝したものの、2回戦で大連汽船に敗れた。大連汽船には児玉政雄投手が新加入していた。児玉は旅順中学で活躍後、早大野球部に進み、卒業して大連に戻ってきたのであった。その大連汽船が苦戦を強いられたのが今年の準優勝チーム南満工専である。9回裏に逆転し、10対9の僅差で勝利した大連汽船は若葉会と優勝を競うことになった。若葉会はくじ運の悪さもあって、初戦敗退が続いていたが、本年は爆発

的な攻撃力で勝ち上がってきた。3試合で60点をたたき出した若葉会打線だが、児玉投手の前に打線が沈黙、3対7で敗れた。児玉は大会を通じて打率6割2分5厘と投打にわたって活躍した。

第12回大会は14チームの参加、国際運輸と日清製油が初出場であった。決勝は用度と消費組合。用度の投手は円城寺満、昨年の甲子園の準優勝投手である。竹中二郎投手が兵役から戻り、昨年より戦力を充実させた消費組合が7対0で完勝し、2度目の優勝を決めた。

第13回大会は12チームが参加した。歴史ある埠頭倶楽部は前年末に埠頭事務所が解散したことを受けて²²、大会から姿を消した。1回戦の白眉は消費組合対国際運輸の試合、前者は満俱、後者は実業の選手を多数擁し、事実上の決勝戦とみられた。消費組合は10対7でこの戦いを制すると、あとは27対2、23対2と楽勝で決勝に進んだ。決勝の対戦相手は南満電気（南満洲電気株式会社）だったが、これも12対6で破って連覇を決めた。昨年準優勝の用度は円城寺が法大に進学したため戦力を殺がれ、準決勝で南満電気に敗れていた。

消費組合はなぜかくも強かったのか。主将の中沢不二雄に言わせれば、有力選手による真面目で長い練習、人の和、理解ある上司と同僚の応援である²³。もちろん、これらはいずれも大事なことだが、その前提として、有力選手が一つの職場に集まっていたことを挙げねばならない。関東州野球大会決勝戦の消費のメンバーはなんと全員が満俱の現役あるいは元選手である（表1-2）。意図的な人事としか思えない。

そもそも消費組合にはこうした人事を行う理由があった。なぜなら、1919年に消費組合が設立された当初より、小売業者を圧迫するとして大連など各地の商業会議所が反対運動（反消運動）に立ち上がり、1931年までに5回（1920年、1925年、1927年、1929年、1931年）の大規模な反消運動が起こっていたからである²⁴。消費組合にスター選手を集めることで、イメージアップを図ったのではないかと考えられる（中沢は消費組合で宣伝業務を担当していた）。もっとも、あまりに強すぎる消費軍に対して、他

²² 「歴史に富む埠頭倶楽部」『大連新聞』1927年11月20日。

²³ 中沢不二雄「関東州野球大会を顧みて（二）」『満日』1928年5月20日。

²⁴ 川森重男「満鉄社員消費組合の盛衰：在満日本人小売商との確執から見る消費組合」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』11号、2010年。

チームからは関東州野球大会を遠慮すべきではないかという声も出ていたのだが²⁵。

第14回大会は10チームの参加。第1回戦の南満電気対消費組合は事実上の決勝戦と目された。三連覇を目指す消費組合は南満電気の小松義男投手を打ち崩せず、8回まで6対0.9回にようやく2点を返したものの完敗だった。南満電気はこの勝利に勢いづき、初優勝を飾った。南満電気は小松義男と片岡秀雄のバッテリーに加えて、早大出身の井上正夫、芥田武夫（旧姓氷室）と4名の満俱の現役選手を擁していた²⁶。

第15回大会、参加者はついに7チームにまで減少した（9チームエントリーしたもの、2チームが棄権）。消費組合、南満電気、国際運輸が優勝候補であった。南満電気はエースの小松を松山高商に送り、昨年より戦力ダウンしていた。「一流選手展覧会²⁷」のようだと形容された消費組合だが、2回戦の大連商業戦で厳しい戦いを強いられた。0対1で迎えた9回裏、消費組合は2点を入れ、劇的な逆転サヨナラ勝ちをした。消費組合は決勝で国際運輸を4対1で下し、2年ぶりの優勝を果たした。

第16回は久々に新規チームの参加を見た。広島商業出身者を中心にした広島倶楽部、スポーツ界の現役とOBを網羅した大連OBの2チームである。大連OBのエースは岸一郎。中島謙、安藤忍、児玉政雄が控え投手であった（結局、安藤がマウンドに立った）。「顔と名前とで敵は手も足も出ないだらう」とは岡部平太主将の言葉だ²⁸。また、鉄道事務所の廃止により、旧鉄道事務所と鉄道部の合同チームが組織された。浜崎真二投手をはじめ²⁹、満俱の現役選手6名、元選手1名の豪華な顔触れである。消費組合は慶大のスター選手山下実を獲得したが、関東州野球大会には間に合わなかった。優勝候補は2年連続準優勝の国際運輸だった。国際運輸は9名のうち8名が大連実業団の現役、

表 1-2 消費組合選手

7	宗正要
6	中沢不二雄
8/2	神武*
2	木原慶次郎*
5	中井幸雄*
9/3	北川一士
1	青山金太郎*
4	斎藤静男
4	室井今朝吉*
3	永田栄次郎
9	竹中二郎*

*は1928年の実満戦出場選手

²⁵ 中沢不二雄「関東州野球大会を顧みて（四）」『満日』1928年5月22日。

²⁶ 満洲電業外史編さん委員会編『思い出の満洲電業』第2巻、満洲電業会、1982年、108-111頁。

²⁷ 「関東州野球大会を前に（2）」『満日』1930年4月19日。

²⁸ 「第十六回関東州野球大会（四）」『満日』1931年4月19日。

²⁹ 浜崎については、高嶋航・金誠編『帝国日本と越境するアスリート』を参照。

OB 選手だったから（表 1-3）、準決勝の消費組合戦、決勝の鉄道部戦は実満の前哨戦のごとき様相を呈した。国際運輸は両チームに大勝して初優勝を果たした。

遼東新報社が主催する大連実業野球大会は、実満戦、関東州野球大会と並ぶ大連の代表的野球大会だった。1926 年春、朝鮮銀行理事で元満鉄理事の片山義勝が大連を去るにあたって、片山優勝球 3 個を大連野球界に寄贈したが、その寄贈先が実満戦、関東州野球大会、大連実

業野球大会だったことから、大連実業野球大会の重要性が窺えよう。大連実業野球大会は、1918 年 7 月に「大連実業家野球大会」として始まった。遼東新報社は、市内の個人会社に野球チームを組織するものが増えてきたことに鑑みてこの大会を創設したのだが、ライバルの満日社が主催する関東州野球大会が成功を収めつつあったことも、創設の背景にあっただろう。

関東州野球大会の出場チームがおもに満鉄と学校関係のチームだったのに対して、実業家野球大会は実業系のチームで、その多くが大連実業団に選手を送り出していた（表 1-4）。このうち三井物産は 1921 年に関東州野球大会に初出場し初優勝を飾り、翌年二連覇を果たし、その後姿を消した。関東州野球大会だけを見ていると、突然現れ突然消えたかに思われるが、実業野球大会で三連覇という実績を挙げたうえで、関東州野球大会に参戦したことがわかる。1921 年の大会についての詳細は不明だが（『満日』、『大連新聞』では報じられなかった）、1922 年には 4 月開催に変更されている。その理由は定かではないが、1921 年より遼東新報社が 7 月に全国中等学校野球大会満洲予選を開催するようになったことと関係があるかもしれない。あるいは、遠征チームの応対に忙しい時期を避けたのかもしれない。ともかく、この変更によって、関東州野球大会と日程が近接することになった。

1925 年は関東州野球大会と日程が完全にかぶったが、さすがにそれはまずかったのか、1926 年は 6 月開催に変更されている。1927 年秋、遼東新報社が満日社と合併し実業野球大会は取り止めとなったが、1928 年 9 月に満日社のライバルである大連新聞社の主催、体育堂の後援で、第 1 回大連実業野球大会として復活した（表 1-5）。復活後

表 1-3 国際運輸選手

- | | |
|---|-------|
| 6 | 宮武英男* |
| 4 | 立石栄* |
| 8 | 高橋誠* |
| 1 | 木下博喜* |
| 9 | 石河 |
| 3 | 山田保男 |
| 5 | 北島貞男 |
| 2 | 藤浪光雄* |
| 7 | 因藤正喜* |

*は 1931 年の実満戦出場選手

表 1-4 大連実業野球大会 (遼東新報主催)

1	1918.7.28-8.5	正隆銀行、鈴木商店、大連汽船、福昌公司、三井物産*、油谷商店
2	1919.7.20-27	正隆銀行、鈴木商店、大連汽船、日清製油、増田洋行、三井物産*、矢中商店、油谷商店
3	1920.7.3-11	五品取引、白石洋行、正隆銀行、鈴木商店、大連汽船、大連銀行、大連被服、日清製油、増田貿易、三井物産*、油谷商店
4	1921	不明
5	1922.4.9-26	A:大連汽船、三井物産* B:鈴木商店、高田商会、日本売薬、原田組、満日、三菱*
6	1923.4.15-?	大連汽船*、東洋フェルム、日本売薬、三菱商事 (準決勝進出チーム)
7	1924.4.20-27	A:大連汽船*、通信、三井物産 B:貯金課、電信課*、日清製油、豆信、遼東新報
8	1925.4.19-30	朝鮮銀行、逋友倶楽部、電友*、日清製油 (他4チーム)
9	1926.6.21-?	正隆銀行、電友倶楽部*、NBK倶楽部、日清製油 (準決勝進出チーム)

*は優勝チーム

表 1-5 大連実業野球大会 (大連新聞主催)

1	1928.9.7-18	国際 (CK倶楽部)、沙河口工場、大連汽船*、商工団、電友、日清製油、豊年製油倶楽部、満鉄興業部、満日、用度倶楽部
2	1929.9.22-24	沙河口工場*、大連記者団、大連汽船、電友、日清製油、白鶴倶楽部、豊年製油倶楽部、用度倶楽部
3	1930.9.26-10.5	霞*、国際 (CK倶楽部)、大連記者団、電友、白鶴倶楽部、豊年製油倶楽部、南満電気、用度倶楽部

*は優勝チーム

の大会には満鉄系のチームも参加したが、実業と満俱の選手は参加できなかった。こうして、時期的にもレベル的にも関東州野球大会との差別化が図られた。さらに翌1929年、大連新聞社は大連実業野球大会の前週に全満選抜野球大会を開催する。遼東新報社と満日社の合併により、大連新聞界は『満日』、『大連新聞』、『遼東新報』の鼎立から、『満日』と『大連新聞』の対立へと変わった。この時期に大連新聞社が次々と新機軸を打ち立てたのも、この新聞界の変化と関係があるろう。

1920年代、大連にはどれくらいの数の野球チームがあったのだろうか。1920年8月の「別天地」と題する『満日』の記事は、大連が「さながら野球の市街と称しても決して誇張の言ではない」としたうえで、野球チームをざっと調べると「百を遙かに超ゆる」と記す³⁰。同年12月の記事で、大連汽船の主将上野靖は大連の野球チームが「五十

³⁰ 「別天地 (三) 近代競技の華野球選手」『満日』1920年8月9日。

を算す」と述べている³¹。1923年10月の記事は、「曰く何団、曰く何倶楽部と片端から列挙する時は実に百三四十を数へる事が出来る」と述べている³²。1924年5月、消費組合がユニフォーム1500着を注文したという記事は、当時の野球熱を窺うに足る。もっとも、消費組合はこれを全満に供給したので大連だけの数字ではない。これに対して、1926年2月の『大連新聞』は「ファンの多い大連は又野球チームも多く約三十に近い」と、かなり少ない見積もりだ³³。

1920年の関東州野球大会と大連実業野球大会の参加チームだけで約30チームあった。また、同年4月に開催された沙河口野球大会には沙河口工場内の8チームが参加している。この年の新聞報道には、遼東新報記者、遼東新報工場、満日記者、満日工場、満鉄重役、小野田セメント、大連弁護士団など上記のいずれの大会にも参加していないチームの試合記録が出ている。「五十を算す」と「百を超ゆる」の違いは大きいが、「五十を算す」は比較的しっかり組織されたチームで、「百を超ゆる」は試合の結果が新聞にも載らないようなチームも含めた数字と理解しておきたい。

関東州野球大会の出場チーム数を見てもわかるように、1920年代後半は野球チーム数が漸減傾向にあった（1920年代を通じて大連の日本人人口に大きな変化はない）。その最大の要因は、より手軽なスポンヂ野球の勃興である（第7話参照）。1925年に体育堂が開催したスポンヂ野球大会には52チームが参加した。もう一つの要因は娯楽、スポーツの多様化である。1920年代には、野球だけでなく、多種多様なスポーツが実践されるようになっていた。

第2話 野球Ⅱ（州外）

関東州外の満鉄附属地で野球が勃興するのは1911年のことである。最初の都市対抗戦は1911年8月1日に奉天で開かれた撫順対奉天戦で、4対4のまま日没引き分けに終わった。1912年には撫順対奉天戦のほか、奉天と遼陽、撫順と鉄嶺、営口と撫順が

³¹ 大連汽船主将上野靖「満洲野球界の発達を祝し満洲日々新聞社の努力を多謝す」『満日』1920年12月26日。

³² 「大連野球界、長棍の響」『満日』1923年10月11日。

³³ 「西公園に春は訪れ野球の季節迫る」『大連新聞』1926年2月20日。

対戦した。そして10月には満鉄運動会奉天支部野球部が大連、營口、大石橋、遼陽、千金寨（撫順）、鉄嶺、長春の野球部と合同して秋季野球大会を開催するとの報道がなされた³⁴。結局実現はしなかったようだが、少なくともこれらの都市で野球が行われていたことがわかる。なかでも平野正朝ひきいる撫順は、營口、奉天、鉄嶺、遼陽と州外軍を次々と屠っていたから、10月6日の撫順と大連の対戦は「満洲野球界の争覇戦」と見なされた³⁵。撫順は平野、大連は早大出身の大町政隆がマウンドに立ったが、試合は一方的で、16対0で大連軍の勝利に帰した。

1913年10月には撫順に大連（満俱）、撫順、長春の3チームが集い、三つ巴の戦いを繰り広げた。撫順軍は2週間前に長春軍プレシャコフ投手の「露西亜球に翻弄」されて一敗地に塗れたが、今回は三振10を喫しながらも、16対8で大勝した³⁶。続く撫順対大連は事実上の決勝戦だったが、5対2で大連が勝つ。大連はさらに長春を28対8で下して優勝した。翌年8月、同じ3チームがふたたび撫順でまみえ、撫順と長春がそれぞれ満俱と対戦したが、接戦のすえ敗れた。

この間、長春軍は岩永裕吉隊長が陣頭に立ってチームの強化を図っており、1915年7月、満を持して初の大連遠征を敢行した。長春は満俱、実業、埠頭と対戦して全勝した。満鉄の中村雄次郎総裁、国沢新兵衛副総裁らも観戦に訪れ、スタンドは5000人の観客で埋まった。「遊撃はどちらも獅子だね」「でも向ふの獅子は舶来のライオンで其獅子を打つ（内）んだもの、こちらの獅子は日本の猪で其上子だからなア」とは、長春の獅子内謹一郎と満俱の猪子一到（^{かづゆき}三高野球部出身）をもじった戯れ言である³⁷。

この年秋、奉天に新しいグラウンドが完成したのを記念し、奉天駅の小日山直登助役と南満医学堂の久保田晴光教授の提唱、満鉄運動会奉天支部の主催で満洲野球大会が開かれ³⁸、大連（満俱）、撫順、長春、奉天、遼陽、營口が参加した（表2-1）。このうち、奉天、遼陽、營口は「歴史も新しく且つ指導者に適当な人がなかつたから誰の目にも前三者の下であることが知れる」とされ³⁹、優勝は大連、撫順、長春のいずれかと

³⁴ 「雑俎」『満日』1912年10月4日。

³⁵ 「六日の野球仕合」『満日』1912年10月8日。

³⁶ 「野球部報」『撫順』13号、1913年11月18日。

³⁷ 「戦ひの跡」『満日』1915年7月28日。

³⁸ 猪子一到「球界の覇者となるまで」『協和』96号、1933年4月15日。

³⁹ 「野球大会（上）」『満日』1915年10月1日。

表 2-1 満洲野球大会一覧

回	年度	開催地	参加チーム
1	1915	奉天	営口、大連、長春*、撫順、奉天、遼陽
2	1916	奉天	安東、大連、長春*、撫順、奉天、遼陽
3	1917	大連	大連実業、大連満俱、長春、撫順*
4	1918	撫順	大連商業、大連満俱*、奉天、撫順
5	1919		中止
6	1920	奉天	鞍山、大連実業*、大連商業、大連満俱、長春、撫順、奉天、南満医学堂
7	1921	奉天	安東、鞍山、営口、大連満俱*、長春、撫順、奉天
8	1922	奉天	大連商業、大連満俱*、長春、撫順、奉天
9	1923		中止
10	1924	奉天	鞍山、大連満俱*、長春、撫順、奉天、奉天輔仁
11	1925	奉天	安東満俱、大連工業、大連満俱*、長春、撫順、奉天実業、奉天輔仁、奉天満俱
12	1926	奉天	鞍山、安東満俱、長春、奉天実業、奉天満俱*、撫順
13	1927	奉天	安東、長春*、撫順
14	1928	奉天	安東、長春、撫順*、奉天輔仁、奉天満俱
15	1929	撫順	鞍山、安東、長春、撫順*、奉天
16	1930	安東	鞍山、四平街、長春、撫順、奉天
17	1931	長春	安東、長春、撫順、奉天

*は優勝チーム

見られていた。この大会は満洲で最初の大規模な野球大会で、大阪毎日新聞社が優勝旗、福岡日日新聞社がメダル、遼東新報社と満日社が賞品を寄贈した。

当時の様子を奉天の田中幸英^{ゆきふさ}はのちにこう回想している。

大連満俱は育成学校の若葉応援団を殆ど総動員して赤地に白く W を染め抜いた大幡小旗を各自に所持させて隊伍整然と乗込めば長春は駅幹部が団長となり青年駅員を多数応援せしめ撫順の如きは四百名の応援団が四輦の客車を増結しドイツ帽を戴ける伴団長を先頭に音楽隊これに次白衣白鉢巻に身を堅めた応援団員が颯爽として入場、琴平町即ち三壘側に陣取つて何処の試合でも手当たり次第応援すると謂ふよりは弥次りまくると言つたやうな調子、従つて野球より弥次の方が面白いと言つて終日頑張るやうな観衆も現れるやうになつて奉天市民の野球熱が逐次大工さんや理髪屋さんと言つた方面にまで普及していつたものだ⁴⁰。

⁴⁰ 田中幸英「大正初期の頃」『満日』1941年1月29日。

試合は、長春が初戦の遼陽を 16 対 12 で破ると、營口を 23 対 4、撫順を 20 対 1 と圧倒して優勝した。遼陽は善戦したかにみえるが、長春がこれをなめてかかったのが原因である。長春はふだんセカンドを守っている岩永駅長をマウンドに立て、エースの獅子内は途中から補欠と交代して退いていた。9 回裏、岩永投手が四球を連発、これにエラーが加わり、遼陽は 3 点を返して 4 点差に迫った。なお無死満塁、長春は絶体絶命のピンチに見舞われた。ここで獅子内がマウンドに立つ。一度退いた選手が再度出場するのは当時の規則で禁じられていたが、あとのない長春はこの規則は投手には適用されないと強弁した。満場の誹謗を浴びながらも、獅子内は遼陽軍の反撃を封じて辛勝した。遼陽軍中谷宏一主将は、自分たちが長春に勝つことはありえず、花を持たせてもらったようなもので、少しは抗議したものの斯界の先輩に異議もいえないと謙虚な姿勢に終始したが、『満日』はこの「横暴」「騙詐」的行為に対して、「満洲運動界の神聖を保たんが為に特に筆誅を加えておかねばならない」と手厳しかった⁴¹。ちなみに、田中幸英によれば、この試合で獅子内は胸当てと脛当てを着用して捕手をつとめたが、これは満洲で初めてのことであったという⁴²。

1916 年 9 月、第 2 回満洲野球大会が奉天で開かれた。参加チームは大連（満俱）、長春、撫順、遼陽、安東、奉天の 6 チームである。満鉄の国沢新兵衛副総裁は満俱の選手とともに特別仕立ての三等車に乗って駆けつけた。奉天対遼陽、大連対安東はそれぞれ 25 対 3、22 対 2 という一方的な試合で、『満日』は遼陽、安東の両チームはまだ大会参加資格がないと断じ、この両チームに代えて大連実業団を加え、大連満俱、大連実業、長春、奉天の四強チームで覇を競わせたいが、「そもも事情が許さぬのは遺憾」と記している⁴³。長春と大連の優勝戦は白井林太郎（早実出身）と山田潤二（一高出身）が投げ合い、4 対 3 で長春が連覇を決めたが、最後まで緊張した試合だった。

1917 年 9 月の第 3 回満洲野球大会は大連で開催された。参加は大連満俱、大連実業、長春、撫順の 4 チームである。これまで満洲野球大会は 1 都市 1 代表で開催されてきたこともあり、大連実業の出場には異論もあったようだが、結局認められた。エースの白井を兵役で欠いた長春は元気がなく、撫順に 2 対 6 で敗れた。前回準優勝の大連

⁴¹ 「奉天野球大会評」『満日』1915 年 10 月 7 日；「スパイクの跡」『満日』1915 年 10 月 10 日。

⁴² 田中幸英「大正初期の頃」『満日』1941 年 1 月 29 日。

⁴³ 「野球大会余録」『満日』1916 年 9 月 28 日。

満俱も和田正三投手が打ち込まれ、大連実業に完敗した。大連実業と撫順の決勝戦は、6対6で迎えた9回表に大連実業が2点を得て勝負あったかに思われたが、勝利を目前にして山本芳蔵投手の制球が乱れ、撫順が3点を得て逆転した。

1918年9月の第4回満洲野球大会は新設撫順グラウンドで開かれた。長春、奉天、安東、撫順、大連満俱、營口、龍山、公主嶺、遼陽、大連商業が参加を表明した。ところが、シベリア出兵の影響で参加の取り止めが相次ぎ、結局奉天、撫順、大連商業、大連満俱の4チームの争いとなった。大連満俱が撫順を制して優勝した。

大会をどこで開催するかについては、2つの考えがあった。1つは主要チームの所在地（奉天、大連、撫順、長春）で順番に開催するというもの、もう1つは前回優勝チームの所在地で開催するというものである。第4回大会までは前者の方針だったと思われる。第5回大会開催にあたって、グラウンド新設を記念して鞍山で開催したいという申し出がなされた⁴⁴。しかし、第5回大会はコレラのため中止となった。1920年の第6回大会は奉天で開催されるが、これは交通の便が優先されたようである。大連満俱と大連実業が決勝に進出したが、この対戦は実満戦再開のシグナルとなった（第3話参照）。

内地から有力選手を招いて戦力を充実させていた大連のチームと州外のチームの間には、実力に大きな懸隔が生じていた。そのような状況を踏まえ、より多くの州外チームが参加できるような大会が創設された。1921年6月に開催された州外野球大会である（表2-2、表2-3）。大阪朝日新聞社が優勝旗を寄贈したというから満洲野球大会への対抗意識があったのだろう。参加チームは長春、四平街、奉天、安東、鉄嶺、營口、撫順、公主嶺、奉天輔仁（満洲医大）、鞍山の10チームにのぼったが、1回戦は大差の試合が目立った。撫順と奉天の決勝戦では紛擾が起きて、誕生したばかりの大会に暗雲を投げかけた。10対5でリードしていた撫順の9回表の攻撃、三塁走者がホームへ向かって走った。奉天の山本久治投手はこれを追い、タッチしたが、球審のアウトの声が聞こえず、もう一度タッチした。そのタッチの仕方がやや乱暴だったため、撫順側は審判がアウトを宣告したのに走者を殴打したとして、「山本を殴れ」とばかりダイヤモンドに選手が飛び出した。奉天の選手と観客も飛び出して撫順の選手を包囲し、

⁴⁴「満洲野球大会」『満日』1919年6月24日。

表 2-2 州外野球大会

回数	年度	A 組	B 組
1	1921	鞍山、安東、營口、公主嶺、四平街、 長春、鉄嶺、撫順、奉天、奉天輔仁	
2	1922	公主嶺、長春、撫順、奉天*	
3	1923	長春、撫順*、奉天、奉天輔仁	鞍山、安東*、開原、公主嶺、四平街、 大石橋、鉄嶺、奉天中学、遼陽
4	1924	鞍山実業、鞍山満俱、長春、哈爾濱 日露協会、撫順、奉天実業*、奉天 中学、奉天輔仁、奉天満俱	安東、營口、公主嶺*、四平街、大 石橋、鉄嶺、遼陽
5	1925	安東満俱、長春、撫順、奉天実業、 奉天満俱*	鞍山、公主嶺*、四平街、鉄道倶楽部、 鉄嶺、撫順 B
6	1926	安東満俱、長春、*撫順、奉天実業、 奉天満俱*	鞍山、橋頭、公主嶺、奉天中学、遼 陽*
7	1927	安東、奉天実業、奉天満俱*	鞍山、開原、教育専門、公主嶺、四 平街*、大石橋、鉄嶺、撫順、奉天 中学
8	1928		長春抜天、鉄嶺、鞍山、遼陽工場、 瓦房店、奉天輔仁*、奉天中学、四 平街

*は優勝チーム

表 2-3 州外各大会優勝チーム

年度	満洲野球大会	州外 A 組	州外連盟	州外 B 組 / 州外南部		
1915	長春					
1916	長春					
1917	撫順					
1918	大連満俱					
1919	<中止>					
1920	大連実業					
1921	大連満俱	<保留>				
1922	大連満俱	奉天				
1923	中止	撫順			安東	
1924	大連満俱	奉天実業			公主嶺	
1925	大連満俱	奉天実業			公主嶺	
1926	奉天満俱	撫順			遼陽	
1927	長春	奉天満俱			撫順	四平街
1928	撫順				撫順	?
1929	撫順				撫順	鞍山
1930	<保留>				奉天	鞍山
1931			奉天	營口		

30分にわたって両者が対峙した。審判は没収試合を宣告して奉天の勝ちとしたが、撫順側はこれに納得せず、「観衆が試合を妨害したときには主催者が15分以内に整理しないと外来チームの勝ちとなる」というルールを主張した。たまたま来満していた大阪毎日新聞社運動部長の木下東作が仲裁につとめたがうまくいかなかった。州外の他のチームは撫順を支持した。結局、同年8月に来満した大毎チームがとりなし、ノーゲームとすることで円満解決した。

同年の第6回満洲野球大会ではまたしても開催地の問題が生じた。前回の優勝チーム大連実業が大連開催でなければ参加しないと主張したからである。大連実業側の主張によれば、奉天で開催すると往復を含めて1週間を要することになるが、昨今の不況で各会社商店は人員淘汰、経費節減につとめているところであり、野球選手にだけ休暇を与えることは難しい。また遠征には1000円ほどの費用を要するので、旅費滞在費は主催者側で負担してほしいというものだった⁴⁵。大連実業の主張は通らず、大会は奉天で開催され、奉天、撫順、長春、安東、営口、大連満俱、大連商業が参加、大連満俱が長春を破って大連勢による三連覇を達成した。

1922年の第2回州外野球大会は紛擾の影響か、長春、奉天、撫順、公主嶺の4チームの参加にとどまった。

1923年の第3回州外野球大会は、参加チームのレベルにより、A組とB組に分けて開かれ、撫順がA組、安東がB組を制した。満洲野球大会のほうは関東大震災を受けて中止された。

1924年の第4回州外野球大会は奉天体育協会が主催し（従来の主催者奉天野球倶楽部は前年に解散）、A組に9チーム、B組に7チームが参加する。とくにA組の多さには目を見張る。前回B組で善戦した奉天中学がA組に挑戦したほか、ハルビンの日露協会学校が初参加でA組に入り、奉天と鞍山がそれぞれ実業と満俱の2チームでA組にエントリーした。しかし、長春、撫順、奉天実業、奉天満俱とそれ以外のチームでは実力差が大きかった。1925年から1928年まで、A組はおおむね安東満俱、奉天実業、奉天満俱、撫順、長春で争われることになる。

⁴⁵ 「球界掉尾の盛観たる満洲野球大会は二十三、四両日奉天で举行」『満日』1921年9月9日；「満洲野球大会には実業団は不参加か」『満日』1921年9月11日。

1926年の州外野球大会開催中、全長春野球倶楽部が州外野球連盟の結成を提案した。長春から全撫順野球倶楽部、奉天実業、奉天満俱、安東満俱の各チームに対して規約草案が送られ、翌年1月に規約が決定、全満19都市の代表に送付された。今後は大連満俱、大連実業に対抗して、内地の野球団を直接招聘するほか、州外野球連盟の大会を奉天、撫順、安東、長春の順でA、B両組に分けて開催すること、この大会は州外野球大会とはなんら関係を有さないことなどが定められた⁴⁶。州外野球大会と別に州外野球連盟大会が創設されねばならなかった背景ははっきりしないが、長春、撫順側と奉天側の間になんらかの確執があったようである。というのも、1927年6月に奉天で開かれた第7回州外野球大会A組に撫順、長春が参加しなかったからである（撫順はB組に参加したが二軍で、一軍は同日程で長春と試合をしていた）。奉天は対抗措置として、7月末に予定されていた第1回州外野球連盟大会への参加を取り消した。このため、州外野球連盟の第1回大会は撫順球場開きを兼ねて8月に開かれるが、参加は撫順、長春、安東の3チームだけだった。なお、満洲野球大会は今年度以降、大連チームの参加が見られなくなり、実質的に州外チームの大会となる。

第2回州外野球連盟大会は1928年6月に安東で開催される予定だったが、済南事件の影響で翌月に延期され、長春、奉天、撫順、安東が参加した。8月末から奉天で開催された第8回州外野球大会には8チームが参加したが、いずれもB組に相当するチームだった。従来のA組を州外野球連盟大会として、B組を州外野球大会として開いたことになる。

1929年7月、長春で第3回州外野球連盟大会が開催され、安東満俱、長春、撫順、奉天、四平街が参加した。大会が終わってまもなく、四平街体育協会野球部は8月末に全長春、奉天満俱、全撫順、全安東を招待して州外野球大会を開催すると発表した⁴⁶が、この大会は結局開催されず、州外野球大会は1928年が最後となった。8月中旬には満日鞍山支局主催で、第1回満洲南部野球大会が鞍山で開かれ、遼陽、大石橋、鞍山、営口、瓦房店が参加、開催地の鞍山が優勝した。

州内と州外のチームがともに参加する野球大会は、1926年以降開かれていなかった

⁴⁶ 中日文化協会編『満蒙年鑑』大正十六年版、中日文化協会、1926年、596頁；「州外野球連盟成る」『満日』1926年8月28日；「関東州外野球連盟規約草案愈々成り」『大連新聞』1927年1月23日。

が、この年になって2つの大会が創設された。1つは、9月6日から9日まで大連実業倶楽部の主催で開かれた全満洲野球大会で、安東、長春、奉天、鞍山、撫順が参加、開催地の撫順が優勝した。もう1つは、同月15日から17日まで大連新聞社の主催で開かれた全満選抜野球大会で、大連実業、奉天満俱、全撫順、全旅順、全長春、全四平街が参加（安東満俱は開会間際に棄権）、大連満俱が優勝した。

1930年シーズンは、6月末に鞍山で第2回州外南部野球大会、8月初めに奉天で第3回州外野球連盟大会、9月上旬に安東で満洲野球大会、9月末に大連で第2回全満選抜野球大会が開かれた（全満洲野球大会は開かれなかった）。1931年も満洲事変さえなければ、この4つの大会が開かれたであろう。

表2-4は満洲野球大会、州外野球大会、州外野球連盟大会、州外南部野球大会への各都市代表チームの参加状況を示したものである（総参加数3回以上の都市のみ。1都市で複数チームが参加する場合も1回として計算。黒塗りは優勝チーム）。参加回数や優勝回数を見る限り、撫順、奉天、長春が第1グループ、安東と鞍山が第2グループ、遼陽以下は第3グループを構成していることがわかる。しかし、安東と鞍山を比べると、安東が州外野球大会A組もしくは州外野球連盟大会に参加しているのに対して、鞍山は州外野球大会B組もしくは州外南部野球大会に参加していることがわかる。したがって、撫順、奉天、長春、安東を州外のAクラス、鞍山以下をBクラスと考えてよからう。以下では、安東を除くAクラスの3都市と、Bクラスの營口、四平街、公主嶺の各都市について、野球の歴史を簡単に紹介しよう。

<撫順> 大連、いな満洲に野球を持ち込んだ平野正朝が撫順炭鉱庶務課に転勤となったのは1909年12月である。平野は丸岡理右衛門や富岡信治らと事務の余暇にキャッチボールをはじめ、翌年春には2チームに分かれて試合ができるまでになった⁴⁷。1911年6月16日に野球部が設立され、8月に奉天チームを迎え、4対4で日没引き分けという記録がある⁴⁸。1917年夏に奉天に移るまで、平野は撫順で野球の振興につとめた。1914年秋に平野課長の部下となった渡辺勝美（のち京城普成学校教授）によ

⁴⁷ 「全満都市選抜野球大会前記」『大連新聞』1929年9月5日。

⁴⁸ 「運動会記事」『撫順』1号、1912年11月18日；河内生「過去五年」『撫順』42号、1916年4月18日。

表 2-4 州外各都市の大会参加状況

年度	撫順	奉天	長春	安東	鞍山	遼陽	營口	四平街	公主嶺	鉄嶺	大石橋	瓦房店
1915	○	○	●			○	○					
1916	○	○	●	○		○						
1917	●		○									
1918	○	○										
1919												
1920	○	○	○		○							
1921	○□	○□	○□	○□	○□		○□	□	□	□		
1922	○■	○■	○□						□			
1923	■	△	□	▲	△	△		△	△	△	△	
1924	○□	○■	○□	△	○□	△	△	△	▲	△	△	
1925	○□△	○■	○□	○□	△			△	▲	△		
1926	●■	○□△	○□	○□	○△	▲			△			
1927	○▽△	■△	●▽	○□▽	△			▲	△	△	△	
1928	○▽△	●▽△	○▽△	○▽	△	△		△		△		△
1929	○▽△	●▽	○▽	○▽	○▲	△	△	▽			△	△
1930	○▽	○▽	○▽	▽	○▲	△	△	○				△
1931	○▽	○▽	○▽	○▽	△	△	▲					
○満洲野球	15	13	14	8	6	2	2	1	0	0	0	0
□州外 A	6	6	6	3	2	0	1	1	2	1	0	0
▽州外連盟	5	4	5	5	0	0	0	1	0	0	0	0
△州外 B/南部	2	3	1	2	8	7	4	4	5	5	4	3
合計	28	26	26	18	16	9	7	7	7	6	4	3

黒塗りは優勝チーム

れば、平野は勤務時間中にも野球見物に行くことを許してくれたほか、課で野球チームを組織して、他の課と試合することを奨励したという⁴⁹。大正初めに撫順が沿線野球団の覇者となったのも、平野の奨励によるところが大きい。

撫順が強くなるのは、1913年8月に勝木勝吉投手と永木栄一遊撃手が加入してからで、1915年の満洲野球大会でようやく大連戦初勝利をおさめた。撫順チーム最初の5年間の成績は12勝10敗で中止が3回、うち大連に1勝5敗、長春に2勝4敗と負け越している。

1915年には礦内野球大会が開催され8チームが参加、同大会は翌年10月に第2回撫順野球大会として開かれ、12チームが参加した⁵⁰。州外では最初の都市野球大会だろ

⁴⁹ 渡邊勝美「平野課長の思出」上西隆男編『平野正朝先生還暦記念集』102頁。

⁵⁰ 室石生「野球部報」『撫順』36・37号、1915年11月18日；河内生「過去五年」『撫順』42号、

う。この年、撫順野球団に加入した小林諦亮は早大野球部の出身、押川清主将のもとで外野手をつとめ、満洲倶楽部の創設メンバーの一人であった。小林は主将に選ばれるが、翌年のメンバーにその名は見えない。代わりに同じく早大野球部出身の高木正次が加入した。撫順野球団は満洲野球大会を制し、全満の覇者となった。その高木も1918年のメンバーには見えない（撫順炭鉱には在職）。1918年以降、早大エースの岸一郎ら有力選手が続々と大連チームに加入すると、州外チームは大連戦で白星を挙げることが難しくなった。

1920年代を通じて、撫順と奉天が州外の最強チームだった。1920年代前半に撫順チームを牽引したのは前田栄三郎捕手である。前田は撫順高等小学校の出身、南満工業学校野球部では主将をつとめた。

1920年代後半の撫順の活躍は法大出身者によるところが大きい。法大を卒業し、大連満俱でプレーした岩田晴男は、1926年のシーズンより撫順チームに加入、主将としてチームを率いただけでなく、多くの後輩を撫順チームにもたらしした。岩田を迎えた撫順は1926年6月の州外野球大会に優勝、その翌月に青島遠征を敢行し、全青島軍に2勝して凱旋した。

撫順が州外で圧倒的な存在感を示すのは1928、29年である。その立役者は森内投手である。森内は呉海軍工廠の技手時代に頭角をあらわし、神戸鉄道、全大邱を経て、1928年春に撫順にやってきた。州外野球連盟大会、満洲野球大会を優勝で飾った撫順は、この年10月に北平、天津に遠征、6勝1敗の成績を収めた。1930年8月の州外野球連盟大会、1回戦で長春と対戦した撫順は延長12回の末惜敗する。その数日後、森内投手は交通事故で亡くなった。

撫順野球界はもっぱら満鉄（撫順炭鉱）関係者によって支えられてきたが、1922年に至って、ようやく市中（非満鉄関係者）側の野球団が結成された。選手は新聞社、銀行、商店の社員や店員、そして浄土寺の僧侶から成っていた。しかし、経済不況の影響で活動は停滞する。1925年に復活がなり、後援組織として撫順実業野球倶楽部が設立された。同年秋の撫順野球大会B組で優勝するなど徐々に力をつけ、1928年には独自のグラウンドを設置したが、その後の消息は不明である。

1916年4月18日。

＜長春＞ 長春で野球を首唱したのは長春駅長の岩永裕吉（のち同盟通信社初代社長）と吉長鉄道会計監督の内垣実衛であった。岩永が長春に赴任したのが1913年9月、その翌月に長春チームは撫順と試合をしている。長春駅には当時200人くらいの日本人駅員がいたが、その多くは学校を出たばかりの若者だった。長春駅は満鉄の最北端に位置し、日本の第一線を守るという気概から、「梁山泊的気分」が充満していた。岩永駅長は清新な楽しみを与えて粗放な空気を一掃するべく、運動競技、なかでも野球、庭球、柔道、剣道を奨励した。岩永は正則中学時代に野球に親しみ、一高では寮の投手もつとめたが、学校の選手にはなれず、もっぱら応援に回っていた（実兄の長与又郎は選手だった）。岩永はこの一高式の猛訓練で駅員の気風を鍛え直した。内村鑑三門下の厳格なクリスチャンだった岩永は野球の祝勝会にも酒を出させなかった。長春駅の繁忙期は9月下旬から4月までで、野球のシーズンは閑散期にあたった。この間、毎日昼食を済ませるとグラウンドに飛び出し、暗くなるまで練習に励んだ。前日に酒を飲んだり遊びに行ったりしたものがいると、続けざまにノックを浴びせたという。このような姿勢で野球に臨んだから、長春野球団は大連を含む他の野球チームの模範的存在となった⁵¹。

内垣実衛は同じく天狗倶楽部に所属していた元早大野球部の獅子内謹一郎を長春に招いた。1913年11月のことである。獅子内の肩書きは長春駅貨物方見習であった。獅子内は長春チームの大黒柱として八面六臂の活躍をする。1914年夏には満鉄と吉長鉄道の賛助により憲兵分隊前にグラウンドが設置された。岩永は1915年末に長春を去るが、後任の小日山直登も野球好きだった。満洲野球大会を連覇した1915年から16年にかけてが長春野球の黄金時代だった。エースの臼井林太郎は第1回全国中等学校優勝野球大会に岡田源三郎（のち明大、金鯨監督）とバッテリーを組んで出場、神戸二中を完封、準決勝で秋田中学に敗れた経歴を持つ。1918年には実業野球団も組織される。

⁵¹ 「長春軍愈来」『満日』1915年7月14日；下津春五郎「満洲球界回顧」『満日』1920年12月19日；「全満都市選抜野球大会前記（四）」『大連新聞』1929年9月6日；野田俊作「長春野球事始め」『満日』1941年1月13-19日；田中幸英「大正初期の頃」『満日』1941年1月28-31日；野田俊作「長春駅長岩永裕吉君」古野伊之助編『岩永祐吉君』岩永祐吉君伝記編纂委員会、1941年。

1919年2月に獅子内が懲戒免職で長春を去るのと前後して⁵²、他の有力選手も次々と長春を離れ、1922年には好選手不足を嘆かねばならなくなった⁵³。長春野球界に注目が集まったのは1927年で、満洲野球大会に優勝、州外野球連盟の設立を主導した。

〈奉天〉 電信修技生の田中幸英が満鉄に就職したのは1907年のことである。1909年の秋、田中は仲間らと、1本のバット、数個のボール、掴袋（グローブ）を準備して「毬投の遊戯」を始めた。近くでも同好者が毬投をやっていた。普段の練習は小学校の校庭でやったが、狭かったので、まとまった練習をする時は練兵場に網を張った。ここは広いが太陽光の具合がよくなく困っていると、守備隊に野球愛好家の准尉がいて、営庭で練習させてくれた⁵⁴。

試合が始まるのは1911年からで、翌年にかけて撫順と3回戦ったが、1勝1敗中止1回と互角の戦いを演じていた。1914年11月、奉天駅に小日山直登が赴任し、彼が中心となって立派なグラウンドが新設された。それを記念して、満鉄運動会奉天支部野球部が満洲野球大会を創設したのは先述の通りである。奉天の実力は数年前とは比べものにならず、同年6月には長春に1対37、8月には撫順に1対33で大敗した。当時の奉天はむしろ弥次団で有名であった。

1920年春、奉天実業野球団が結成された。同じころ、全奉天チーム組織のため在奉野球チームの紅白戦が行われていた。奉天野球界をたばねる奉天野球倶楽部が誕生したのはこの前後と思われる。顧問には赤塚正助（在奉天総領事）、川本静夫（奉天民会長）、内堀維文（奉天中学校長）、幹部に平野正朝らが就任した。さらに全奉天チームを財政的に支援すべく、奉天野球後援会が設立され、赤塚が会長、川本と島崎好直（奉天地方事務所長）が副会長、貴志弥次郎少将（奉天特務機関長）らが評議員に選ばれた⁵⁵。

1922年、奉天はついに州外野球大会で優勝した。同年秋の満洲野球大会も決勝に進出するが、大連満俱に0対6と完敗を喫した。両大会で活躍したエース俣野勇（長野中学出身）は早大からの勧誘を蹴って法大に入学することになり、奉天を離れた（の

⁵² 「各地通信・長春」『満日』1919年2月20日。

⁵³ 「全長春野球団」『大連新聞』1922年7月23日。

⁵⁴ 田中幸英「大正初期の頃」『満日』1941年1月28日。

⁵⁵ 「実業団初試合」『満日』1921年4月30日；「各地通信・奉天」『大連新聞』1921年6月9日。

ち法大主将をつとめる)。エースを失った全奉天は翌 1923 年 6 月の州外野球大会 A 組初戦で輔仁(満洲医大)に惜敗した。奉天で満鉄と実業の両チームを対峙させよとの議論は前年の秋より見られたが、州外野球大会でのまさかの敗北が引き金となり、7 月に全奉天チームは解散し、新たに奉天満鉄野球倶楽部が設立された⁵⁶。こうして奉天でも実満戦が始まった。

1924 年のシーズン、奉天野球界に強力なメンバーが加わった。永岡一と田部武雄である。永岡は和歌山中学から慶大に進み、捕手、一塁手として活躍、卒業後はプロ野球チーム天勝軍に在籍していた。営口から転じてきた田部については後述する。この年の州外野球大会で奉天実業チームは弱冠 19 歳の田部を投手に起用、決勝で奉天満俱を 6 対 1 で破り、2 度目の優勝を果たした。田部はわずか 1 シーズンで奉天を去り、大連実業に入団するが、奉天実業はその後も充実した戦力を維持し、1925 年の州外野球大会に優勝した。しかし、1928 年までに深刻な選手難に直面し、存続すら危ぶまれる事態に陥っていた⁵⁷。この年はなんとか選手をかき集めて実満戦開催にこぎ着けたが、その後ほどなくして解散したようである。1930 年 7 月になって、実業系の野球チームがなくなったことを遺憾として、青年実業団チームが結成された。

一方、奉天満俱は 1920 年代後半に戦力を充実させ、1927 年の州外野球大会に優勝した。しかし、撫順が黄金時代を迎えたことから、1928、29 年はタイトルから遠ざかった。1929 年夏、奉天鉄道事務所庶務長下津春五郎が大連に出張のさい、元早大選手で昨年まで大連満俱でプレーしていた水原義雄を奉天列車区に転勤させることに成功した⁵⁸。下津は黎明期の長春野球界で活躍した選手である。さらに奉天満俱は、この年 7 月で解散となった宝塚野球協会から 2 人の選手を迎えた。こうして奉天は 1930 年 6 月の州外野球連盟大会で優勝する。

1931 年 4 月、奉天の野球関係者による座談会で、全奉天を組織して全日本都市対抗野球大会(以下、都市対抗野球)に出場してはどうかという提案がなされた(次年度より州外からも代表を送れることになった)。満俱には 400 名、実業には三百数十名の

⁵⁶ 「満鉄野球団の後援会を組織」『満日』1923 年 7 月 18 日；「満俱後援会」『大連新聞』1923 年 7 月 21 日。

⁵⁷ 「選手難の実業野球団」『大連新聞』1928 年 5 月 30 日。

⁵⁸ 「満俱野球部陣容を整ふ」『満日』1929 年 7 月 20 日。

後援会員がいるので、もし合体すれば1000名に拡大することも可能で、そうなれば会費4円で4000円を集めることができる。これは、都市対抗野球出場に必要な500円を差し引いても、年間十数回の試合ができる金額である⁵⁹。さらに、同年5月に大連満俱を破ったさい、大連の選手から「奉天は都市対抗に出る当もなく強くなつてもつまらぬではないか」と言われ⁶⁰、いよいよ都市対抗野球出場の思いは強まった。しかし、満洲事変などもあり、奉天満俱の都市対抗野球出場は1935年を待たねばならなかった。

< 営口 > 営口では大正初めに満鉄、水道電気会社、東亜煙草会社の3つのチームが存在した。対外戦の最も古い記録は1912年8月の撫順戦である。営口は1915年の満洲野球大会に出場した5都市の1つとなった（ただし、次の出場は1921年である）。営口にはアメリカ人の野球チームもあり、税関長ノックスと領事館の館員某はプロ野球の経験者であったという⁶¹。とはいえ、1916年7月に「外人」と「邦人」の野球チームが対戦したさいには、7対22で「邦人」側が圧勝しており、チームとしては日本人の敵ではなかった。1917年には上記3チームのほか、朝鮮銀行、三井を中心に組織された実業団が加わり、1920年には営口の覇権を握った。実業団主将の田部真一は寄附金を集めて固定ネットを作るなど、グラウンド外でも活躍した。田部が所属する福来号の主人且睦良は山口高商の出身で、田部以外にも数人の選手を社員として雇用し、試合の前には自らシートノックをするほどの野球好きだった。実業団監督は朝鮮銀行の榎原支店長、ユニフォームを着て自らマウンドに立つこともあった。

1922年、営口で敵なしだった実業団に新戦力が加わる。田部真一の弟武雄である。その華麗な守備と俊足で日米のファンを湧かせることになる田部武雄は、野球の名門広陵中学を1年で退学し、長兄を頼って渡満した。菊池清磨によれば、退学の理由は複雑な家庭環境にあったらしい⁶²。なお、田部の次兄謙二は広島一中の出身で、1915年の第1回全国中等学校優勝野球大会に出場し、のち大毎の選手になったものの、若くして亡くなっている。田部武雄は来満後すぐに実業団の主力選手となり、7月の営口

⁵⁹ 「全奉天軍も都市対抗出場か」『満日』1931年4月25日。

⁶⁰ 「都市対抗への出場近く実現させたい」『満日』1931年6月5日。

⁶¹ 「プレーとしての野球」『満日』1916年6月30日。

⁶² 菊池清磨『天才野球人 田部武雄』彩流社、2013年、14頁。田部については高嶋航・金誠編『帝国日本と越境するアスリート』も参照。

野球大会では遊撃手として出場、「若冠ながら其の技倆は営口一流選手に互して遜色と認めない、モーションが軽くて捕球投球共に確實数度の試合にフアインプレーをやつて大向を唸らしてゐる、この上練習を積んだら大選手となるも容易であらう」と紹介されている⁶³。営口での活躍を期待された田部だったが、翌シーズンには奉天に移ってしまった。

1923年の営口は野球熱に沸いた。小学生から老年組まで雨後の筈の如くチームが誕生し、「野球を語らぬものは営口市民でない」といわれた⁶⁴。新たに組織された営口野球倶楽部が主催した秋季リーグ戦にはA組3チーム、B組5チームが参加、大阪毎日新聞社から優勝旗が寄贈された。しかし、この年に小学校から始まったスポンジ野球に人気が集まるようになり、硬式野球は勢いを失った。

<公主嶺> 公主嶺では1915年春に満鉄の野球チームが結成された。翌年には50円の経費と公園の使用を認められている⁶⁵。1918年には200円の寄附金を得て、実業野球団も組織された⁶⁶。実業団はさっそく満鉄、長春実業野球団、公主嶺小学校などと対戦している。チームの少ない公主嶺のような地では小学生も重要な戦力で、1922年の公主嶺野球リーグに出場した連合軍には2名の小学生が混じっていた。実業団は財界の不況のため1920、21年頃に活動停止に追い込まれたが、それに代わって公主嶺の満鉄側、市中側を包含する公陵倶楽部が生まれた。公主嶺のほとんど全部の人が後援したという同倶楽部は2000円の活動費を有し、1924、25年の州外野球大会B組で連覇を果たした。しかし、まもなく公陵倶楽部は解散した。1928年には実業野球団が復活するが、州外野球大会への出場は1927年が最後となった。

<四平街> 公主嶺の隣、四平街でも1915年に野球が始まった。この年、四平街駅長に赴任した斎藤織平が野球団を組織したが、「素手素面素足のいで立ち」だったという⁶⁷。しかし、このチームは長続きしなかった。翌年に森永嘉一(のち四平街銀行取締役)が寄附を募って野球道具を買い入れ、運動鼓吹につとめたものの、チーム編成に至ら

⁶³ 「実業野球団」『大連新聞』1922年7月27日。

⁶⁴ 「野球試合豪雨で流れる」『満日』1923年8月1日。

⁶⁵ 「公園内に野球場」『満日』1916年2月2日；「本年の野球界」『満日』1916年4月22日。

⁶⁶ 「野球団成立」『遼東新報』1918年6月7日。

⁶⁷ 「全満都市選抜野球大会前記」『大連新聞』1929年9月4日。

なかった。1917年に四鄭線の建設が始まると、藤根寿吉（のち満鉄理事）を総指揮として道具の購入とチームの編成がなされた。四鄭局には岩崎小鹿ら好選手もいて、1918年には公主嶺、鉄嶺を破り、「北方に覇を称へつゝある」と報じられた⁶⁸。1920年、元早大選手小林諦亮がやってくるまで野球全般の知識を授け、さらに実業家の援助を得て、翌年の州外野球大会に出場した。1922年には野球ブームが起き、全四平街、実業、満鉄、駅、老頭児、聖徳会、小学校教員と7チームが林立することになった。

公主嶺機関区が四平街に移転し、優秀選手が加わった1927年、四平街は州外野球大会B組で優勝を果たす。1929年には釜山商業、早大出身で大連実業で活躍した横道一郎が国際運輸四平街支店に転勤、さっそく主将に就任して州外野球連盟大会A組に挑戦したが、撫順に敗れた。横道は1930年1月に帰郷してしまい、この年の州外野球連盟大会はふたたびB組での出場となった。

各都市のおおよその状況を把握したところで、ふたたび全体の状況について触れておきたい。いったい全満で野球チームはどれくらいあったのだろうか。1920年の『満日』の記事は満洲の野球界について次のように述べる。

満洲野球界の発達、その盛なること他に比肩すべきものなく、大連を中心として旅順、鞍山、営口、撫順、奉天、長春、安東各沿線それぞれ強大なるチームを有し、恐らく二百を以て算すべし、然して今や技の進歩に於て実力に於て朝鮮、台湾、青島各植民地を凌ぐこと勿論、母国のそれよりも優にして秀、帝都の四大学が球の本場、米国に渡るまでもなく、満洲に遠征することがその実力を試すべき絶好天地とさへ居るに見て首肯するに足るべし⁶⁹。

この時期、大連には約50～100の野球チームが存在したというから（第1話参照）、満鉄沿線には100以上のチームが存在したことになる。大正十二年度版『満蒙年鑑』は1922年時点の全満各都市の主な野球チームを挙げている⁷⁰。チーム数の多い順に並べると以下の通りである（表2-5）。

この一覧には遺漏が多々ある。たとえば奉天は3チームしか挙げられていないが、同年5月の奉天野球大会に参加したチームは16ある。旅順も4チームしか挙げられて

⁶⁸ 「野球団」『遼東新報』1918年6月23日；「野球善戦」『遼東新報』1918年7月28日。

⁶⁹ 「満洲野球界発達史（一）」『満日』1920年11月28日。

⁷⁰ 満蒙文化協会編『満蒙年鑑』大正十二年版、満蒙文化協会、1923年、810頁。

表 2-5 全満の野球チーム (1922)

大連 (18)	実業倶楽部、満洲倶楽部、三井、大汽、線路、地方、埠頭、用度、工場、電気、若葉、三菱、通信、聖徳、工業、商業、銀行団、満日
長春 (11)	商業、地方、駅、吉長、機関区、郵便局、特産、ブラツウダイヤ、銀行、レッド、天狗
遼陽 (6)	全遼陽、駅、工場、機関区、実業団、鉄道倶楽部
ハルビン (6)	松浦商会、領鉄 (領事館 + 公所)、オールドスター、東北 (北満電気 + 東拓)、ダイヤモンド、日露協会
鞍山 (6)	工務、鞍山、工事、大成、製造団、実業団
営口 (5)	満鉄、東亜、銀行、満福、ミカド
旅順 (4)	関東庁、土地調査、工大、旅中
開原 (4)	駅、株友、エックス、実業
奉天 (3)	全奉天、輔仁会、工務
鉄嶺 (3)	全鉄嶺、満鉄、実業
安東 (3)	全安東、実業 (青年 + オールド)、満鉄 (駅 + 機関区 + 連合)
大石橋 (2)	機関区団、みどり倶楽部

表 2-6 全満野球チーム補遺 (1922)

旅順 (11)	関東庁、土地調査部、関東軍司令部スタークラブ、要港部修理工場、実業、戸口調査部、太陽倶楽部、旅順防備隊、在郷軍人、工科大学職員、六十連隊
ハルビン (9)	領鉄倶楽部、天狗クラブ、東北クラブ、熊沢クラブ、松浦商店、日露協会学校、若葉クラブ、軍隊
四平街 (6)	全四平街、実業、満鉄、老頭児、聖徳会、小学校教員
公主嶺 (5)	全公主嶺、車輛団、駅、連合、農事試験場
瓦房店 (1)	機関区

いないが、同年 10 月に開催された全旅野球大会には 11 チームが参加した。撫順については、やや古いのが 1919 年 9 月の撫順野球大会に 15 チーム参加したという記録がある。また、内訳が判明するものとして以下の都市がある (表 2-6)。

表 2-5 と表 2-6 に見える野球チームのうち、学校関係のチームは大連の若葉、商業、工業と旅順の旅中、工大、奉天の輔仁会のみで、社会人チームが圧倒的多数を占めている。これは、内地と比較して顕著な違いであろう。いずれの都市でも満鉄が圧倒的な存在感を示していたが、徐々に市中の人々が実業野球団を組織してこれに対抗するようになる。しかし、実業団は出身がバラバラなためまとまりがなく、チーム全員で練習できる時間も限られていた。さらに、恒常的に資金を確保することが困難だったため、その活動を長期にわたって維持するのは至難の業だった。実業団がある程度の存在感を見せた奉天も例外ではなかった。

州外の都市のなかで最も潤沢な資金を持っていたのは撫順である。1929年の撫順体育協会の予算2万円のうち、5200円が野球部に充てられている⁷¹。1927年の体育協会設立以前は、満鉄運動会と撫順野球後援会が経費を負担していた。後援会の会員は1922年時点で400人いた⁷²。一般に、後援会の会費は年間2～5円くらいであった。次に多いのは安東満俱で、その後援会は1928年に4800円の収入があった⁷³。長春は1920年代を通じて年間予算は約3000円であった⁷⁴。奉天はあまりデータがないが、1923年の奉天満俱後援会の予算が1700円となっている⁷⁵。Bクラスのチームで多いのは公主嶺で、野球と庭球を主たる活動としていた公陵俱樂部が2000円の活動費、満鉄運動会支部（野球、庭球、柔剣道、弓術、庭球、氷滑）も2000円の維持費を有していた⁷⁶。鞍山体育協会野球部は1930年に1200円⁷⁷、營口野球俱樂部が1923年に1120円を支出した⁷⁸。四平街は500～700円⁷⁹、満鉄運動会遼陽支部野球部は1925年に350円だったが、1929年に216円、満鉄工場撤廃後の1930年に80円へと激減した⁸⁰、全大石橋野球部は1924年に170円となっている⁸¹。このうち、内訳が判明するものを少し紹介してみよう。

長春野球倶楽部の1930年度予算は収入が会費1630円、補助金550円、入場料寄附金など845円で合計3025円、支出は事務費122円、旅費100円、被服費221円、器具購入544円、グラウンド費268円、遠征費480円、試合費1140円、雑費150円で合計3025円となっている⁸²。ちなみに、この年長春は20回試合を実施し、12勝8敗の成績を取っている。1923年度の營口野球倶楽部の収入は914円（うち会費200円）、支出は1119円だった。支出の内訳は、運動場新設費150円、運動場修繕費224円、運動器

⁷¹ 「体育協会予算」『満日』1929年3月10日。

⁷² 「野球後援金事業進捗す」『大連新聞』1922年7月2日。

⁷³ 「国境雑聞」『満日』1928年12月3日。

⁷⁴ 「野球倶楽部」『大連新聞』1922年4月22日；「野球団の予算」『満日』1930年5月5日。

⁷⁵ 「満鉄野球団の後援会を組織」『満日』1923年7月18日。

⁷⁶ 公主嶺地方区事務所編『公主嶺要覧』南満洲鉄道庶務部調査課、1925年、123-125頁。

⁷⁷ 「鞍山体育協会会則草案成る」『大連新聞』1930年7月1日。

⁷⁸ 『大連新聞』1923年12月17日。

⁷⁹ 「運動会予算の分配」『満日』1927年6月3日；「体育協会予算」『満日』1930年6月8日。

⁸⁰ 「運動会の予算」『満日』1925年6月11日；「運動部の予算会議」1929年6月28日；「運動会支部予算」1930年4月11日。

⁸¹ 「活動写真の収入を野球部の維持費に」『満日』1924年5月25日。

⁸² 「野球団の予算」『満日』1930年5月5日。

具及被服費 218 円、会員章 79 円 (300 個分)、運動場番人及苦力賃金 41 円⁸³、日露協会来征及大毎特派員外来チーム接待費 168 円となっている。赤字分は活動写真の上映などで補填した⁸⁴。

A クラスと B クラスの間には、予算規模に格段の違いがあり、予算と実力がほぼ対応していることが窺える。いうまでもなく、資金が潤沢であればあるほど、より優秀な選手を呼ぶことができる (1922 年の長春野球倶楽部予算には選手招聘費が計上されている⁸⁵)。表 2-7 は 1929 年の全満選抜野球大会に出場した各チームの選手の名前、年齢、出身校を一覧にしたものである。大学高専出身者を網掛けで示した。一見してわかるように、大連の 2 チームは大学高専出身者の比率が高い。大連以外では、撫順が 5 名、奉天満俱と四平街が各 2 名、安東満俱と旅順が各 1 名となっている。予算規模と大学高専出身者の多寡はほぼ比例していると考えてよい。

どのチームも優秀な選手の確保に苦勞した。満鉄チームの場合でも、人事異動に頼るだけでなく、関係者が直接候補者と交渉することも多かった。安東満俱は幹事が全国各中学校の卒業生に対して交渉をしたし⁸⁶、奉天満俱が大連の水原を交渉で移籍させたことは先述した。あるいは先輩が後輩に声をかけることもある。撫順では、法大野球部出身の岩田晴男が後輩の加藤豊司、萩原兼顕、岡田保をリクルートした。法大は 1918、20、22、27、30 年とたびたび満洲遠征をしており、岩田は 1918 年、岡田は 1927 年の遠征メンバーであった。ちなみに、加藤豊司の長弟富造は八幡製鉄野球部主将、次弟喜作は袋町小学校、広陵中学で田部と同期であり、当時慶大の遊撃手として活躍していた。喜作は慶大卒業後、満洲に来る話があったが、家庭が渡満に反対し八幡製鉄に入った。なお、豊司も来満前に八幡製鉄に在籍したことがある⁸⁷。

表 2-8 は全満選抜野球大会に出場した州外チーム選手の出身校 (1 校 2 名以上のもののみ) の一覧である。地元の大連商業と満鉄育成、そして法大が 5 人と最も多い。大

⁸³ 苦力の仕事については、第 8 話を参照。

⁸⁴ 「野球倶楽部」『大連新聞』1923 年 12 月 17 日。

⁸⁵ 「野球倶楽部」『大連新聞』1922 年 4 月 22 日。

⁸⁶ 「国境雑聞」『満日』1928 年 12 月 3 日。

⁸⁷ 日本製鉄株式会社八幡製鉄所野球部編『野球部史：昭和十二年四月』日本製鉄株式会社八幡製鉄所野球部、1937 年。

表 2-7 全滿選抜野球大会参加選手

	大連満俱	大連実業	全撫順	全長春	安東満俱	奉天満俱	全四平街	全旅順
投手	浜崎 29 慶大	岩瀬 29 早大	森内 27 呉大正中	川上 29 大連商業	瀬戸山 20 鹿児島商業	田村 23 満鉄育成	越前屋 25 四平街	頼原 23 京城中学
	山口 25 機械工業	山本 27 関大	隅野 27 日露協会	高橋 26 横浜商業	山岡 21 諏訪蚕糸	土持 23 福山中学		
	児玉 27 早大	田中 30 麻布中学		大藤 21 大連商業		川崎 19 熊本商業		
	青山 28 育英商業	木下 24 奉天中学						
	藤枝 21 松山高商							
	小松 22 大連商業							
捕手	片岡 27 大連	渡邊 20 釜山商業	森川 27 広島明中	中川 23 神通中学	吉岡 23 広陵中学	近藤 23 満鉄育成	島田 32 福島師範	千田 22 大連一中
	広津 22 南満工専	田辺 29 早大		山根 22 大社中学	千葉 34 早大	水田 19 大連商業		
一塁手	疋田 29 法大	平田 33 青山学院	今里 26 旅順一中	牧 31 福岡中学	石井 26 静岡中学	水原 26 早大	藤原 20 宇和島中学	池江 21 鹿児島一中
		山口 22 城西学院	岩田 33 法大		杉崎 23 新義州商業			
			吉富 22 鹿児島二中					
二塁手	永沢 24 明大	安藤 35 明大	今里 28 撫順	小野 24 長春	手塚 30 青島学院	室井 25 長野商業	伊藤 27 鉄道教習	古賀 21 大連二中
	南条 26 立大	橋本 20 京阪商業			上条 20 諏訪蚕糸	中野 23 満鉄育成		
	花満 21 京都一商	梶下 23 松山高商				樺山 29 鉄道養成		
三塁手	吉野 26 山口高商	高橋 25 明大	加藤 29 法大	藤戸 22 豊国商業	有馬 19 加治木中学	原田 25 長崎高商	多田 19 奉天中学	水野 23 呉一中
		安藤 28 青山学院				村上 21 舞鶴中学		伊藤 32 京城中学 伊藤 20 三豊中学
遊撃手	長沢 21 國學院大学	宮武 24 錦城中学	野原 23 満鉄育成	小幡 19 神通中学	時任 21 鹿児島商業	瀬戸口 29 福山中学	北村 25 熊本高工	有川 23 横浜高工
								野上 23 青島中学
外野	芥田 27 早大	中島 37 明大	尾崎 28 青山学院	久保田 25 東筑中学	服部 25 長府中学	香川 32 広陵中学	秋吉 21 満鉄育成	村上 23 奉天中学
	井上 28 前橋中学	石川 28 大阪高商	萩原 28 法大	浅香 20 福岡中学	筒瀬 24 広陵中学	肥塚 23 大連商業	大井 22 釜山商業	藤田 23 旅順中学
	宗正 26 大連商業	中川 26 松山高商	岡田 26 法大	清家 19 宮崎商業	山田 26 大連商業	青木 23 松本商業	横道 27 早大	有川 25 鹿児島二中
	緑川 27 早大	清田 30 大連商業	佐野 21 長崎	長谷川 20 長春商業		油谷 22 奉天	森坂 24 四平街	愛甲 20 京城中学
		松尾 26 熊本商業	大石 20 福岡商業				島井 20 鹿児島一中	
			古藤 20 福岡商業					

数字は年齢

表 2-8 州外チーム選手の出身校

	全撫順	全長春	安東満俱	奉天満俱	全四平街	旅順	合計
大連商業		2	1	2			5
満鉄育成	1			3	1		5
法大	4			1			5
早大			1	1	1		3
京城中学						3	3
広陵中学			2	1			3
奉天中学					1	1	2
鹿児島一中					1	1	2
鹿児島商業			2				2
鹿児島二中	1					1	2
神通中学		2					2
諏訪蚕糸			2				2
福岡商業	2						2
福岡中学		2					2
福山中学				2			2
旅順一中	1					1	2

連商業は甲子園の常連校である（第5話参照）。満鉄育成学校（若葉会）のうち4名が同年齢で、同校の黄金世代出身である。このうち野原五郎は慶応商工学校主将として全国少年野球大会に出場、のち満洲にわたり、1923年に満鉄育成学校に入った。野原の技術は田部と甲乙つけがたいと言われ、宝塚運動協会に憧れて加入していた⁸⁸。田村正夫も満鉄育成学校から宝塚運動協会に入った。その後、野原と田村は撫順を経て、奉天満俱でプレーした。近藤旭は大連商業を経て奉天満俱入りした。四平街の秋吉満は彼らより2学年下であった。野原とともに撫順に入った尾崎昇治郎も宝塚運動協会出身であった（尾崎はのちに撫順満俱を率いて都市対抗野球に出場する）。宝塚運動協会は毎夏満洲に遠征に来たから、多くの満洲出身選手が在籍した（第4話参照）。

以上3校について多いのが早大、京城中学、広陵中学である。京城中学出身者はいずれも旅順に所属している。そのうち穎原卓爾と愛甲繁は旅順工科大学の学生である。穎原は翌年に卒業し、南満電気に就職する。広陵中学からは田部武雄以外にも多くの選手が来満している。1921年卒の堀野清は兄が四平街にいた関係で来満、四平街野球界の花形となっていたが、1年もたたずに亡くなった⁸⁹。1923年卒の香川勇勝は宝塚運動協会を経て奉天満俱に入った。1925年卒の沖倉一は1923年の広陵中学満洲遠征メンバーで、1926年卒の筒瀬茂夫、1927年卒の吉岡末蔵が安東満俱に加入している。筒瀬の同期土肥常夫は南満工専、上原穰は大分高商を経て大連市役所に就職、大連実業のメンバーとなった。吉岡と同期の牧野明治は長春、田岡兵一は大連実業に所属した。大連実業には1931年卒の北島貞男もいた。

表2-7で、満洲の学校出身選手の比率は平均24%で、奉天の38%が最も高く、安東満俱の8%が最も低い。満洲野球界は約4分の3の選手を内地に依存していたということになる。ただ、せっかく内地から優秀な選手を招致しても、定着率は高くなかった。表2-9は歴年の全長春チームのオーダーと新選手である。例年5名前後の選手が加入しているが、その多くはレギュラーに名を連ねることはなく、たとえレギュラー入りしても1年で姿を消すものがほとんどだった。長春で特筆すべきは牧駿走で、1917年に全長春に加入、州外で最古参の選手であった。

⁸⁸ 石井一男「野球部始末記」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』佐藤真美、1982年、140頁；野原五郎「私が宝塚運動協会へ加入する迄」『野球界』15巻3号、1925年2月。

⁸⁹ 「追悼野球会」『大連新聞』1922年8月14日。

表 2-9 全長春代表選手の変遷

年	全長春メンバー（守備順）	新選手
1925	川上、牧、花山、山口、安永、柿沼、島崎、山田、西田	川上（大連商業）、永島（八幡商業）、花山（広島商業）、山口（早稲田実業）、山田（大連商業）
1926	川上、杉田、牧、柿沼、小野、高橋、吉原、山田、花山	高橋（横浜商業）、杉田（広島商業）、吉原（広島商業）、岸上（香川師範）、高野（横浜貿易）、片山（長春商業）、太田（長春商業）
1927	高橋、牧、三ヶ尻、長沢、藤戸、柿沼、川上、山田、永島	牧野（広陵中学）、富田、長沢、野村
1928	大橋、中川、牧、小野、藤戸、高橋、川上、増田、長沢	永森（神通中学）、大菅（神通中学）、片山（杵築中学）、酒本（鳥取一中）、増田（大連満俱）

第3話 野球Ⅲ（実満戦）

大連実業団（実業）の発足は1912年9月に遡る。光明洋行の島津秀太郎と前田俊介が伏見台を散策していたところ、日本塩業の唐沢一郎と小田井倍尾がノックをしているのを目にした。やがて4人は野球の真似事を開始し、大倉商事の上田直一郎、横浜商業出身の鈴木学三（東京製鋼会社）と山下隆太郎（増田屋）らが加わり、実業団の原形が出来上がった。1913年春、東京製鋼会社大連支店長多賀鋭吉の発議で大連実業団が正式に発足することになり、2月11日に発会式を挙げた。3月16日に実業のホームグラウンドである第三小学校校庭で三井と対戦したのがおそらく初戦であろう。実業は10対4で三井を下した。その後実業は相手を選ばずに挑戦して連戦連勝、5月18日には旅順工科学堂と対戦し、これを破った⁹⁰。

後年の満洲倶楽部（満俱）は「総満鉄といふべき対外時に当る抽出編成団」であったが⁹¹、その前身は青年会（YMCA）の関係者が1911年に組織したチームである。実業の前田俊介によれば、1912年に早稲田実業を卒業して光明洋行に就職した当時、「大連の運動の権利を握つてゐた」のがYMCAであった。前田らはYMCAに無断で実業団という野球チームを作ったために、YMCAの人たちは激怒したという⁹²。

⁹⁰ 「実業団略史」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』5-6頁；「大連野球界の今昔」『満日』1916年6月11日。

⁹¹ 「本社主催野球大会」『満日』1916年5月22日。

⁹² 「BM戦の昔を語る」『満日』1936年5月30日。

表 3-1 実満選手 (1913 年)

細川健彦 (早大)	上田真一郎 (暁星中学→大倉商事)
大町政隆 (早大)	前田叢司 (早実→光明洋行)
阿山隆介 (正金銀行)	吉富一馬 (静岡中学→山葉洋行)
山本寿彦 (シンガーミシン)	小田井倍尾 (神戸商業→大日本塩業)
小林諦亮 (早大→満鉄)	村尾 (不明)
塚原孫一 (慶應普通部→米井商店)	樫村賢二 (神戸商業→樫村洋行)
東郷静夫 (若葉会→満鉄)	中西 (金物)
上野靖 (青山学院普通部→満鉄)	山下隆太郎 (横浜商業→増田屋)
池谷 (不明)	西谷 (光明洋行)

後年、大連じゅうを熱狂に陥れることになる実満戦だが、1913年6月21日に開催されたその第1回戦(青年会对実業)は「実到大連野球史を飾る第一頁」と報じられたものの、新聞での扱いはきわめて簡単なものだった⁹³。実業団との初戦に8対9で惜敗した青年会チームは名を満洲倶楽部に改める。第2回戦(6月29日)は6対1で満俱が制した。第3回戦(8月10日)は、満俱が細川健彦、実業が鈴木学三、と両軍ともにエースを欠き、23対3という大差で満俱が実業を破った⁹⁴。5回戦で勝敗を決する予定だったが、この年は3回しか対戦しなかった。表3-1は第2回戦の両軍オーダーと出身校、所属会社をまとめたものである。満俱は青年会チームの細川、阿山、山本、塚原、東郷に加えて、早大出身の小林と大町(先輩の細川が引っ張り込んだのだろう)と上野靖によって構成されていた。なお、山下が働いていた増田屋は横浜の会社で、増田屋主人の三男稲三郎は早大野球部の選手で大町のチームメイトであった。

1914年3月22日、まだ春というには少し早い大連でこの年最初の野球試合が行われた。通算4回目となる実満戦である。実業はやはりエースの鈴木が出場せず、4対8で満俱に敗れた⁹⁵。その次の対戦は翌1915年9月5日、20対10で満俱が勝った⁹⁶。

1916年6月、実業は第1回関東州野球大会に参加し、埠頭倶楽部、大連駅、満鉄本

⁹³ 『遼東新報』記事(宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』4頁)。

⁹⁴ 宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』5頁に拠る。「実業野球団満洲倶楽部野球試合」『満日』1913年8月12日は24対3とする。

⁹⁵ 秦源治『わが国球界をリードした大連野球界』50頁には、1914年9月5日に満俱が17対10で実業に勝ったという記録を載せるが未詳。

⁹⁶ 宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』16頁に拠る。『満日』1915年9月6日は21対10とする。

社を撃破して優勝した。しかし、7月31日の実満戦では1対7で満俱に敗北を喫している。この試合で実業の上田真一郎が三塁に盗塁を試み高橋英男三塁手と衝突、上田は右手を挫き、高橋は歯を3本折った。上田の傷は予想外に悪く、尾見薫博士の診断では「野球は永久にやれなくなる」とのことで、実際の上田は選手生命を絶たれた⁹⁷。8月には撫順軍が2度大連に遠征し、1度目は満俱に7対4で勝ち、2度目は実業に4対7で敗れた。この勝利に自信をつけたのだろう、実業は今後毎年3回試合を実施することを満俱と取り決めた⁹⁸。

その第1戦は8月31日に開かれ、10対1で満俱が圧勝した。この「妙に気が乗らなかつた、即ち緊張してゐなかつた」試合が最後の実満戦となる。林田学は後年その経緯をこのように回想している。

何時の試合であつたか実業団の藤田〔御都〕三塁手（元三井社員）が満俱の走者誰れであつたか忘れたが三塁本塁間に挟撃された時二三回往復の後足の早い藤田君追ひ掛け乍ら「コン畜生」と云つてタッチして走者はアウトになつたが、其タッチが背後からやつたので恰も突き倒したやうに見え「殴るとは怪しからん」「コン畜生とは何んだ」と云ふ具合に文句が出て紛擾を来した事がある位で此の両軍の試合は何時も喧嘩見たいだつた。其後色んな関係で満俱実業はお互の申合せ試合は一切中断され唯満日の関東州野球大会で顔を合はせるだけだつた⁹⁹。

藤田は気性の荒い男だったようである。1917年、早大遠征軍との試合、実業は1点も取れないまま終盤に入った。その前の試合で満俱は早大に負けはしたが2点を取っていたので、実業としては1点も入れずに負けるわけにはいかない。三塁へ宙返りで飛び込んだ藤田は虎視眈々と本塁を狙っている。気の小さい早大の市岡忠男捕手は「あんな男に宙返られたんでは怪我をするし恐ろしいから、頼むから真直な球ばかり投げて一点やつて呉れ。若しホームへ走つて来たらおれは逃げるぞ」と岸一郎投手に1点を献上するよう勧めたという¹⁰⁰。

藤田のラフプレーがあつた後でも、実満戦は継続される予定だった。というのも、

⁹⁷ 「野球消息」『満日』1916年10月1日。

⁹⁸ 「実満野球戦新に三回戦を約す」『満日』1916年8月29日。

⁹⁹ 林田学「実満戦開始時の回顧」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』108頁。

¹⁰⁰ 岸一郎「野球王時代」『協和』97号、1933年5月1日。

10月1日の『満日』で、今期掉尾の快戦として実満戦が「狂球家に期待されて」いると報じられているからである¹⁰¹。しかし、実満戦は開かれず、「帝都に於ける早慶の如く聊かの感情上問題より打絶え」ることになった¹⁰²。

1920年9月、満洲野球大会決勝で満洲倶楽部と大連実業の対戦が実現した。じつに4年ぶりのことである（満鉄本社と実業は何度か関東州野球大会で対戦していた）。おそらくこの試合が契機となって、実満戦復活の気運がふたたび高まった。満日社の林田学は、満俱には岸一郎、実業には中島謙らが加入し、「東京の野球の空気をドシ／＼注入して居る頃で両軍の選手も昔の情実を捨て、大同に就かんとする空気が見えて居た」ことから、両軍の斡旋を画策しはじめた。選手のほうはすぐに諒解を得られたが、それぞれの後援会がなかなか承知しない。満俱側では片山義勝（満鉄理事）、実業側では水津弥吉（正金銀行大連支店長）を口説き落とすところまではよかったが、実業後援会幹事長の神崎常一（錢鈔信託支配人）がなかなか首を縦に振らない。12月25日によく神崎の説得に成功し、翌1921年1月20日の『満日』で実満戦の復活が報じられることになる¹⁰³。

1913年の最初の実満戦から、1921年に実満戦が復活するまでの間に、満俱と実業は大連の強豪チームから、満洲あるいは日本を代表するチームへと成長を遂げていた。その原動力となったのは、内地から加入した一流選手たちであった。

早大の井上芳雄が満鉄に入社したのは1913年8月のこと、勤務先は埠頭事務所だった。井上は辞令を受け取るよりも前に、満俱（青年会）の選手たちにグラウンドに連れて行かれた。井上は埠頭の選手からも勧誘されたため、毎日3時間、満俱と埠頭の両チームで練習をする羽目になった。8月10日の第3回実満戦が井上のデビュー戦となった¹⁰⁴。

京都帝大の猪子一到は大学卒業後、就職先を探していたときに、父の知り合いの大連医院長尾見薫博士に「満鉄に来ないか」と勧められた。猪子は「満洲では野球をやっていますか」と聞いて、会社でも野球がやれることを確認し、満鉄入社を決心した。

¹⁰¹「野球消息」『満日』1916年10月1日。

¹⁰²「満洲野球界の一大快報」『満日』1921年1月20日。

¹⁰³林田学「実満戦開始時の回顧」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』108-109頁。

¹⁰⁴井上芳雄「野球勃興時代」『協和』95号、1933年4月1日。

1914年8月に来連した猪子は、満俱の撫順遠征に誘われ、中学時代にコーチをしてもらった平野正朝を訪ねる目的でついていった。試合中、満俱の塚原選手が負傷した。平野から勧められて急遽猪子は試合に出場、翌年から正式にメンバーに加わった¹⁰⁵。

当時、満俱の予算は年間200円だったが、これではとうてい足りず、野球部長の上田恭輔がポケットマネーを出し、猪子も給料をすべて野球につき込んでいた。その年、洋行から戻ってきた山田潤二（元一高野球選手）と山西恒郎（元三高野球選手）の働きかけ、樺山資英理事の理解もあって、予算は400円になった¹⁰⁶。

全満に覇を称えていた長春軍が内地から有力選手を入れて強化を図っていたのに対抗して、満俱でも1917年に猪子が選手獲得のため内地に赴いた。猪子は京都一商の尾家文郎と和田正三を引っ張ってきた。この年に来連した早大との対戦ではなすすべもなく敗れたが、同志社、法大、明大には勝ち越した。これに刺激を受けた満俱は大学選手獲得にいっそう力を入れ、1918年には早大のエース岸一郎、京都一商の森田康太郎、九州帝大の真田金城、明大の大門勝、さらに京城軍投手長岡清を得て、「黄金時代」を築いた¹⁰⁷。1918年8月の一高戦のオーダーは下記のようなものだった（表3-2、カッコ内は出身校）。

表3-2 満俱オーダー（1918年）

大門勝（明大）
尾家文郎（京都一商）
猪子一到（三高、京都帝大）
岸一郎（早大）
高橋英男（不明）
井上芳雄（早大）
森田康太郎（京都一商）
人見止戈三（京都一商）
細山田三雄（満鉄鉄道教習所）

一方、大連実業団は1916、17年に関東州野球大会連覇を成し遂げた。エースの頼広健治は関西学院の出身で1916年に来連、少し遅れて頼広のチームメイト広瀬義雄も来連した。頼広と広瀬が就職した油谷商店は神戸の貿易商で、「野球選手の実社会的活動に於ても品行の点に於ても優秀な点を認め野球奨励の主義から自分の息子も実業の選手たらしめ」ていた¹⁰⁸。息子とは、大連の店を預かっていた油谷万治のことである。この年には、小学教師から三井物産に転身した藤田御都も実業に加入している。1917年

¹⁰⁵ 猪子一到「球界の覇者となるまで」『協和』96号、1933年4月15日。

¹⁰⁶ 猪子一到「球界の覇者となるまで」『協和』96号、1933年4月15日。

¹⁰⁷ 猪子一到「球界の覇者となるまで」『協和』96号、1933年4月15日。

¹⁰⁸ 「大連野球界の今昔」『満日』1916年6月11日。

には広島商業の山本芳蔵と柚花尋が実業団入りした。柚花（のち福山姓）は1929年に引退するまで12年間実業団で活躍することになる¹⁰⁹。1917年には、明大の中島謙が先輩相内重太郎（元満倶選手で、当時青年会チームに所属）の勧誘で来連、実業団に加わった。中島は1918年に大沢逸郎、1920年に安藤忍と明大の後輩を引っ張ってきた。このほか1919年には広島商業から石本秀一、翌年には早大OBで神戸の増田屋にいた加藤吉兵衛が大連に転勤、実業団に入った。大学の有力選手が続々と大連にやって来たのは、第1次世界大戦中から続く好景気が背景にある。

実業は1920年9月の満洲野球大会で久々に満倶を破り、全満の覇者となる。この年度の実業の選手は下記の通りである（表

表 3-3 実業選手（1920年）

石本秀一（広島商業→三井）
田中茂（麻布中学→鈴木商店）
小島春造（広島商業→鈴木商店）
長宗我部梓（大連商業→大連汽船）
安藤忍（明大→仁来銭荘）
加藤吉兵衛（早大→増田屋）
永島忠一（大連商業→増田屋）
中島謙（明大→小寺油房）
松尾光勝（神戸商業→増田屋）
田中勘吾（関西学院→油谷商店）

3-3、カッコ内は出身校と勤務先）。

1917年、早大遠征軍に完膚なきまでに叩きのめされた実満両チームは、その後数年間で大いに陣容を強化し、内地の有力大学チームと互角にわたりあえる実力をそなえるに至っていた。大連の野球ファンが両者の直接対決を望んだのも当然であった。

1921年1月27日、実満戦の協議会が開かれ、シーズン初めと終わりに両軍混合の紅白戦を行うこと、春秋二季にそれぞれ3回戦を実施すること、審判は両軍より各2人を推薦しイニングごとに主副を交代することなどが決まった。

4月17日、実満の前哨戦として吉例混合野球試合が開催された。この大会は実満両チームが「融合して相俱に戮力して満洲野球界を発達させる」ことを祈念して開かれ¹¹⁰、実満の枠を取り払って、紅白2チームに分かれて対戦した。紅軍は湯浅禎夫と田中勘吾の実業バッテリー、白軍は真田金城と網干益雄の満倶バッテリーで、実満ともエースの川上武治、岸一郎は温存した。後年、明大の投手として東都に名を轟かす湯浅だが、実業では補欠投手であった。この吉例混合野球試合は翌年以降、開催日が4

¹⁰⁹福山は1929年に満洲球界の功労者として表彰された（『満日』1929年6月9日）。

¹¹⁰「満洲倶楽部＝大連実業団吉例混合野球試合」『満日』1921年4月17日。

月3日に固定され、大連野球界の春を告げる年中行事として定着した。

6月5日、いよいよ実満戦が開かれた(表3-4)。審判は二宮商会の大伴重雄と満鉄の寺島富一郎がつとめた。毎回、主審と副審を交代して公平を期した。大伴はフィラデルフィア野球審判学校で審判術を学んだといわれ、メガホンを持って英語で審判した¹¹¹。実業の先発は大連汽船の川上武治である。大連汽船は満鉄と関係の深い会社で(1925年には満鉄の子会社となる)、主将の上野靖は満鉄の最初期のメンバーであったが、大連汽船を率いて実業側に投じていた。満鉄の先発は岸である。実業は1回裏に満鉄捕手の2度のエラー、2つの四球、1安打で4点を先取し、6対3で初戦に勝利した。1週間後の第2回戦も実業が勝ち、春季戦は実業の勝利に終わった。

秋季の第1回戦は湯浅投手の一人舞台で、満鉄をノーヒットノーラン、10奪三振に抑えた。9月23日の第2回戦は満鉄の山本松

男投手の出来がよく、満鉄が2対0で一矢を報いた。満鉄はこの日の晩の汽車で奉天に向かい、満洲野球大会に出場、優勝を飾った。実満最終戦は10月2日に開催され、2対1で実業が接戦を制し、初代覇者となった。

1922年は春と秋にそれぞれ1回ずつ実満戦が開かれ、いずれも実業が4対2で勝利した。昨年の正投手川上を失った実業は投手不足、練習不足で前評判は高くなかったが、1年の休養をへてマウンドに上がった岸を打ち崩し、投げては富岡壮三投手が健棒を

図3-4 実満戦得点一覧

年月日	実業	満鉄	優勝
1921.6.5	6	3	実業
1921.6.12	8	2	
1921.9.11	4	0	実業
1921.10.2	9	2	
1922.6.4	4	2	実業
1922.10.1	4	2	
1923.6.3	7	11	満鉄
1923.6.10	2	6	
1924.6.8	2	4	満鉄
1924.6.15	8	12	
1925.6.21	2	0	実業
1925.6.28	2	0	
1926.6.6	2	11	実業
1926.6.13	8	4	
1926.6.21	2	0	
1927.6.5	5	9	満鉄
1927.6.11	9	8	
1927.6.18	0	5	
1928.6.3	3	0	実業
1928.6.10	7	1	
1929.6.2	2	9	満鉄
1929.6.9	5	6	
1930.6.8	5	6	満鉄
1930.6.13	4	8	
1931.6.13	8	10	満鉄
1931.6.14	5	6	
1931.6.20	4	3	
1931.6.21	4	8	

¹¹¹「BM戦の昔を語る」『満日』1936年6月3日。

誇る満倶打線を2点に抑えた。秋の試合は9月3日の予定が延期につぐ延期で、10月1日ようやく開かれた。富岡投手を失った実業は石本秀一にマウンドを託した。石本はよく満倶を抑え、4対2で実業が連覇を決めた。

大連経済界の不況は大連実業団に深刻な影響を及ぼした。経費節減と人員淘汰のあおりで、ただでさえ不足していた選手がさらに不足することになった¹¹²。一方の満倶は2チーム編成できるほどの多士済々であった。1923年6月3日の第1回戦、大方の予想を裏切って、満倶は真田金城、実業は田中茂を先発に立てた。7対7で迎えた8回裏、満倶は一挙に4点を取り、試合を決めた。得点の多くはタイムリーエラーによるものだった。6月10日の第2回戦、満倶は真田、実業は川上が先発した。兵役帰りの川上は、かつての凄さは見られず、大荒れの投球内容だった。満倶が6対2で実業を破り、春季優勝を決めた。打撃に難のある満倶はこれまでの練習方法を変えて攻撃を重視したのが功を奏した。秋季戦は関東大震災のため実施されなかった。

1924年、満倶は新選手中沢不二雄を得た。新選手といっても33歳、挨拶に行った赤羽克己理事いわく「あんなに禿だ、爺さんにショートストップが出来るのかい?」。しかし、グラウンドへ出てみてびっくり、満倶の選手は真田の34歳を筆頭に30歳前後の選手が多く、平均年齢は28歳をこえていたというから中沢が安心したのも当然だろう¹¹³。第1回戦は岸が投げれば実業を2点に抑え、打ってはホームランと投打にわたる活躍を見せ、満倶が勝った。烈風のなか開かれた2回戦も満倶が打ち勝ち、二連覇を果たした。秋季戦を望む声もあったが、この年も開かれなかった。実業は9月13日から17日まで長春と撫順、19日から青島に遠征した。一方、満倶は9月21日から奉天で開かれた満洲野球大会に参加し優勝した。

1925年4月20日、翌月中旬にマニラで開かれる第7回極東選手権競技大会に日本代表として満倶を推薦するとの電報が届いた。満倶の選手は2週間にわたり猛練習をして、5月3日にマニラに向かった。中沢不二雄はマニラで開かれた第1回極東オリンピックに出場したことがあり、今回が2度目の出場であった。慣れない気候と芝生のグラウンド、そして練習不足のため、満倶はフィリピンに連敗した。上海に転勤が

¹¹²「満洲野球大会には実業団は不参加か」『満日』1921年9月11日。

¹¹³中沢不二雄「外国遠征の思出」『協和』101号、1933年7月1日。

決まっていた岸投手にとって、これが満俱選手としての最後の試合となった。満俱は6月7日に帰連、14日に実満第1回戦が予定されていたが雨で延期となり、21日に実満戦が行われた。これまで選手不足に悩んでいた実業は、早大からエース谷口五郎を迎え、さらに宝塚運動協会で活躍していた山本栄一郎投手、関西学院の将積一明捕手らを加えた。内地に戻っていた石本、田部らも戻り、猛練習を続けて満俱戦に臨んだ。

谷口を迎えるまでには若干の経緯があった。1920年に釜山商業を卒業した谷口は、満鉄の臨時傭員として働いていたが、「望みもない」ということで仁来銭荘で働くことになった。満鉄側は実業団が谷口投手を誘惑したとして抗議を申し込み、実業団の中心だった鈴木商店満洲総支配人の浜田正稲が満鉄に呼び出され、「そんな不都合なことをするのなら、以後鈴木は満鉄出入を差し止める」と脅された。結局、谷口を早大に入学させることで「妥協」した。早大卒業後、久留米連隊に入営した谷口は、1924年に除隊、大連に戻って実業に加わった¹¹⁴。

1925年の実満戦に話を戻そう。満俱は西村、実業は谷口が先発、両チームともわずか4安打の投手戦となり、実業が2対0で満俱から3年ぶりの勝利をもぎとった。第2回戦も満俱打線は谷口投手の前に2安打と沈黙し、三連覇を逸した。実業は8月下旬から9月中旬まで上海遠征を実施した。満俱は9月20日から開催の満洲野球大会に参加し、ふたたび優勝した。秋季大会は満俱が10月17日、実業が10月10日を希望したが、調整がつかず中止となり、実満戦を待望していたファンをがっかりさせた。

1926年、満俱の陣容は大きく変わった。竹中二郎、西村豊両投手を兵営に送り（西村は入営前に謎の死を遂げた¹¹⁵）、その穴を埋めるべく中沢が目を付けたのが早大の竹内愛一^{よしかず}だった。竹内は京都一商を出て、早大に入学、谷口が卒業したあと早大エースの地位を継いでいた。このほか、疋田捨三、片岡秀雄が兵営より戻り、上海から伊藤実、奉天から伊藤兼行、早大から緑川郁三と児玉政雄を迎えた（児玉は病気で実満戦には出場できなかった）。

この年の実満戦は、谷口と竹内、元早大エース同士の対決の場となった。第1回戦

¹¹⁴「谷口投手のこと」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』183頁。谷口については、高嶋航・金誠編『帝国日本と越境するアスリート』も参照。

¹¹⁵「満俱の西村投手鉄路の露と消ゆ」『大連新聞』1925年11月19日。

は11対2と満俱が谷口から大量点を奪った。第2回戦も谷口と竹内が先発、満俱は谷口を攻めて3回までに3点を取った。谷口を引きずりおろした満俱はもはや勝敗は決まったと大喜びしたが、リリーフに立った田部の球を打ちあぐねている隙に、実業は得点を重ねて逆転、8対4で実業が勝った。満俱は田部のアウトカブを警戒し、右投手を打つ練習をして第3回戦に臨むが、実業の先発谷口はこれまでと打って変わって好調で、田部の出番はなかった。谷口は8奪三振、3被安打、竹内は6奪三振、4被安打と互角のできだったが、満俱5、実業0という失策の差が勝敗を分け、2対0で実業が勝った。なかでも中沢のトンネルは致命的で「矢張り三十五歳」との声がスタンドから漏れた。実際、中沢は本年度で満俱の現役を引退した。満俱は充実した戦力を誇りながら、成績は今ひとつだった。秋季大会は開かれなかったが、9月の関東庁始政廿年記念運動会で満実模範試合が生まれ、実業が満俱を3対2で破った。

1927年は満俱、実業ともにチームが充実した。満俱は投手5人、捕手3人を擁し、例年選手不足に苦しんでいた実業も捕手は1人ながら、投手は3人を揃えた。今回初めての試みとして事前にメンバー交換を実施し、試合1週間前に大連に在勤するものでメンバーを編成することが決められた。満俱は、実業のメンバーのうち吉岡保と田部が大連に在勤していないと抗議をした。実業は、田部は5月28日に帰連し、東華銭荘に在勤するので認めてほしいと要請し、田部の出場は認められた¹¹⁶。当時、田部は明大進学の資格をえるため、広陵中学に復学していた。そればかりか、広陵中学のエースとして選抜野球大会に出場し、5月1日の決勝戦で小川正太郎を擁する和歌山中学に敗れていた。満俱が抗議したのも無理はない。

実満第1回戦、満俱は兎玉、実業は岩瀬（旧姓谷口）をマウンドに送った。試合は実業ペースで進んだが、4回表に将積捕手が負傷で退場したのは実業にとって痛手だった。3点ビハインドで迎えた8回に満俱は4点を入れて逆転、9回にさらに3点を加え、9対5で満俱の勝利に終わる。第2回戦も兎玉と岩瀬が先発、両軍それぞれ14安打を放つ乱打戦となった。8対7と満俱1点リードで迎えた9回表の実業の攻撃もツーアウトとなり、主催者は優勝旗授与の準備を始めた。このとき実業の反撃が始まり、同点に追いつき、さらに延長10回に1点を加えて逆転し、1勝をもぎ取った。注目の第

¹¹⁶「円満に解決田部選手出場」『満日』1927年6月5日。

3回戦はまたもや児玉と岩瀬が先発する。児玉の出来がよく、5対0で満俱が優勝した。実満戦に勝った満俱は第1回都市対抗野球の満洲代表となった。都市対抗野球は東京日日新聞社が創設した大会である。同社は目星をつけたチームに推薦状を送って参加を呼びかけていた。大連では満俱を推薦したが、満俱は実業に勝ったらという条件を自らに課した。こうして実満戦は都市対抗野球の満洲予選を兼ねることになった。

都市対抗野球出場のため内地へ向かう途次、満俱は京城で京城鉄道局と試合をするが完敗、出鼻を挫かれた。東京では元早大主将の水室武夫が合流した。水室は春に卒業後、早大野球部のアメリカ遠征に加わり、帰国して1週間も経っていなかった。都市対抗野球1回戦の相手は、なんと京城鉄道局であった。京城は木下博喜、満俱は児玉が先発、8回まで満俱が4対3でリードするが、8回表に京城が同点に追いついた。9回表、京城はさらに3点を取り、勝負あったかに思われたが、9回裏に満俱が4点を取り、劇的な逆転勝利を収めた。その後は、名古屋を6対1、札幌を16対2で下し、楽々と決勝に進出、全大阪を3対0で破り優勝した。決勝戦には満鉄副社長就任が決まったばかりの松岡洋右も駆けつけた。中沢監督は閉会式で「黒獅子旗、海を渡るとも悲しむなかれ……遼東半島の一角にへんぼんとひるがえる黒獅子旗を見て、わが同胞二十万は如何ばかり士気を鼓舞することか」と語り、優勝旗を大連へと持ち帰った¹¹⁷。

都市対抗野球出場を逃した実業は9月に内地に遠征した。早大に1勝1敗、慶大に勝ち、明大に負けたが、いずれも接戦だった。その後、大毎に2連敗、ダイヤモンド倶楽部に引き分けたものの、宝塚運動協会、関大を破り、朝鮮で4戦4勝して帰連した。田部は内地に止まり、翌春明大に進学した。

1928年5月2日の関係者による協議で、本年の実満戦は試合の2週間前に大連に居住し勤務するもののみ出場できることになった。言うまでもなく昨年の田部の件を受けての措置である。実業は田部を明大に、将積、田岡兵一を京城に送ったものの、内地遠征で津田四郎、宮武英男を得た。満鉄副総裁松岡洋右の始球式により開幕した第1回戦、岩瀬と児玉が先発し、実業が3対0でまず1勝した。誰もが3回戦までいく

¹¹⁷ 日本社会人野球協会・毎日新聞社編『都市対抗野球大会40年史』日本社会人野球協会・毎日新聞社、1969年、7頁。

と予想するなか、満俱は第2回戦も1対7で落とした。今回の実満戦からラジオ実況が始まり（昨年は市内5カ所で速報された）、大連商業監督二宮順が解説を担当した。第2回戦では満俱球場の電動スコアボードが初めて使用された¹¹⁸。

前年度優勝チームの満俱が敗れたことで、大連代表をどうするべきかという問題が生じた。東京日日新聞社はすでに大連代表として満俱を挙げており、やはり満俱が出るべきだという主張もあれば、実満戦の勝者である実業が出るべきだという声もあり、このさい全大連を組織せよとの意見もあった。結局、実満戦の覇者実業が黒獅子旗を持って出場することになった。準決勝の大阪戦は苦しい試合だった。中盤を終えて3対6とリードされていたが、8回に1点、9回に2点入れて同点に追いつき、延長10回裏に1点を加えて逆転勝ちした。決勝の東京戦は岩瀬五郎と新田恭一（元慶大選手）の投げ合いとなった。7回に岩瀬が決勝打を放ち、1対0で実業が優勝し、大連勢二連覇を果たした。

1929年、実業は強打者として重きをなした山本が京城に去り、武居正清、中川金三を兵営に送る一方、満洲育ちの木下博喜を京城から迎えた。満俱は慶大エースの浜崎真二をはじめ、明大の永沢武夫、國學院の長沢新平らを陣容に加えた。第1回戦は実業木下、満俱浜崎と新加入投手が先発、2回に7点を取った満俱が早々に試合を決めた。浜崎と岩瀬が先発した第2回戦は実業が押し気味に試合を進めたが、中盤で満俱が追いつき、延長戦を満俱が制した。

第3回都市対抗野球に出場した満俱は、東京へ行く途中、解散したばかりの宝塚運動協会の元エース山口茂次をメンバーに加えた。満俱はこの大会でも大阪に苦しめられる。満俱は4回までに7点をリードされる苦しい展開だったが、6回と7回に3点を取って1点差に迫った。すると今度は大阪が8回、9回に1点を取り、差を3点に広げた。今度こそ大阪に軍配が上がるかと思われたが、9回裏の攻撃で満俱は吉野、永沢、長沢の3連続二塁打で逆転サヨナラ勝ちした。この勝利で勢いづいた満俱は、準決勝で全京城を8対4、決勝で名古屋鉄道局を6対0と破って、大連勢三連覇を飾った。

この秋、大連新聞社が開いた全満選抜野球大会は、期待されながら開かれないままになっていた実満秋季戦に代わる秋の一大イベントになった。大連新聞社にとって、

¹¹⁸「電気装置で動かす満俱のスコアボード」『満日』1928年6月10日。

春の実満戦を主催する満日社に対抗するためにも、重要な大会だったと思われる。大連の野球ファンにとっても、このような形で実満戦が見られることは願ってもないことだった。実業と満俱は決勝戦で対決し、3対2で満俱が勝った。

1930年で実満戦はちょうど10回目を迎えた。これまで日曜日に開催し、最大3週間を要した実満戦だが、今回から日、土、日の最大8日間で勝敗を決することになった。第1回戦、実業は岩瀬、満俱は藤枝宏二郎を先発に起用した（エース浜崎は入営中）。試合は接戦だったが、満俱が6対5で実業を下した。第2回戦、実業は源川栄一郎、満俱は山口茂次とフレッシュな顔触れがマウンドに立った。打力に勝る満俱が8対4で勝った。2回戦で終わったため、日程は昨年より1日短縮されただけだった。満俱は大連勢四連覇をかけて都市対抗野球に出場し、準決勝まで進んだが、名古屋鉄道局に0対3で敗れた。優勝は東京倶楽部であった。

秋の全満選抜は奉天満俱、大連満俱、大連実業のリーグ戦形式で開催された。実満戦は熾烈な戦いとなり、4対4で延長戦に突入、延長11回を終えたところで日没となった。翌日の再試合は12回表の満俱の攻撃から始まり、延長13回裏に実業が1点を取ってサヨナラ勝ちした。

1931年、春の恒例行事だった紅白混合試合が廃止され、実満新人戦と銘打って、新人選手中心のチーム編成で実満が対決することになった。やはり実満が対抗するほうがファンには面白いからである。第1回の新人戦は13対5で実業が勝った。満俱の新人のなかで最も注目され期待されていた慶大出身のベーブこと山下実は新人戦には間に合わなかった。

実満戦は今回より主催者の提案で5回戦に改められた¹¹⁹。また、これまで模範試合として開催されてきたため入場料は徴収されなかったが、今回より入場料（20銭～50銭）が徴収されることになった。1回戦から3回戦までは接戦が続いた。1回戦は実業岩瀬、満俱山口が先発、打撃戦となったが、満俱が4回に7点を入れて勝負を決めた。この回、山下は本塁打を放ち、ファンの期待に応えた。2回戦は実業木下、満俱児玉の先発、6対5で満俱が王手をかけた。後がない3回戦、実業は4対3で一矢を報いた。しかし、4回戦では実業は4対8と大差をあげられ、満俱が史上初の実満戦三連覇を果たした。

¹¹⁹「実満戦は本年度より五回戦をもつて争覇」『満日』1931年5月12日。

5回戦制は選手層の厚い満俱にとって明らかに有利だった。都市対抗野球は初戦で八幡製鉄と対戦、1対2で敗れた。

表3-5は『都市対抗野球40年史』がまとめた「大会参加チーム出身校の分布」をもとに作成したもので、各チームで六大学、その他の大学、高専、中等学校、実業出身の選手が占める割合を示した。六大学出身選手の割合を見ると、本大会で連覇を成し遂げた東京倶楽部が100%、ついで全大阪が62.5%、大連は34.8%で3番目に多い。社会人野球界に占める都市大連の位置がよく示されている。

表3-6、3-7は実業と満俱の選手に関して、出身校の種別を年度別に示した。選手は実満戦の出場者に限定し、補欠は除いた。一見してわかるように、六大学出身者は満俱に多い。ただし、比率には変動があり、1926、29年が最も高く8割を越え、1927年がそれに次ぐ。1927、29年といえば、満俱が都市対抗野球で優勝し

表3-5 都市対抗野球参加チーム出身校分布 (%)

	六大学	他大学	高専	中等	実業
東京	100	0	0	0	0
大阪	62.5	4.2	8.3	25	0
大連	34.8	0	21.7	34.8	8.7
函館	23.5	0	23.5	52.9	0
八幡	18.8	0	0	56.3	25
神戸	17.6	11.8	29.4	41.2	0
横浜	16.7	8.3	37.5	25	12.5
仙台	11.8	11.8	5.9	70.6	0
高崎	11.1	5.6	0	83.3	0
台北	10.5	5.3	31.6	52.6	0
京城	6.7	13.3	46.7	33.3	0
京都	5.6	0	5.6	77.8	11.1
富山	0	0	37.5	50	12.5
名古屋	0	0	21.4	78.6	0
呉	0	0	0	0	100

数字は各都市における割合

表3-6 実業選手出身校分布

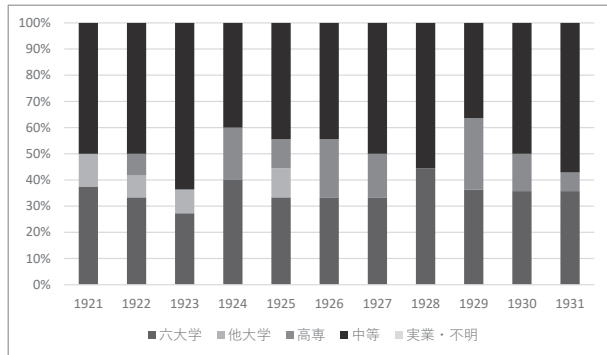
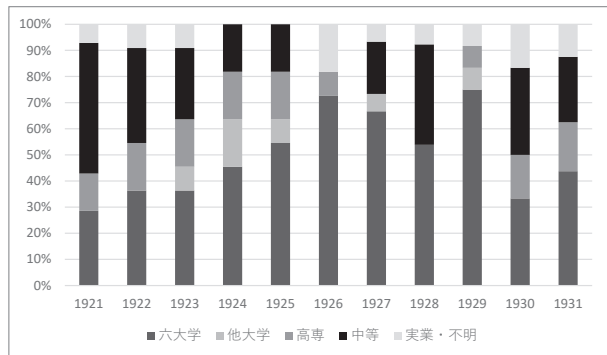


表3-7 満俱選手出身校分布



た年であり、この時期に充実した戦力を保持していたことがわかる。もちろん、六大学出身者だから優れた選手であるという保証はない。満俱の片岡秀雄捕手は満鉄電気作業所チームでプレーしていたのを認められて満俱入りしたが、彼はおそらく正規の中等教育を受けていない。それでも、満俱の正捕手として、また強打者として、1922年にデビューしてから1931年までほぼ毎年実満戦に出場していた。

出身校のより詳しい状況は後掲の表3-8、3-9をご覧ください。満俱の六大学出身者の内訳は早大6、法大6、明大5、立大4、慶大2、東京帝大1である。加入時期を見ると、1920年代前半は法大と明大がほとんどで、早大と立大は1920年代後半に偏っている。実業は明大6、早大3、法大2で、明大はやはり1920年代前半に偏っている。特定の年代に特定の大学出身者が集中するのは、たとえば明大の場合、中島謙のような影響力のある選手がその同輩や後輩を引っ張ってきたからである。大連は、六大学のなかでもとりわけ明大との関係が深く、明大から優秀な選手がやってくるだけでなく、大連の優秀な選手が明大に進学するケースもあった。米子中学出身の湯浅禎夫は実業から明大に進んだし、広陵中学を中退して来満した田部武雄も実業でプレーしたあと、明大に進学する。田部は巨人軍の一員として活躍後、1936年に大連に戻り、実業に復帰する。また、青島中学出身の高橋誠は実業で2年間プレーしてから明大に進学し、卒業後にまた実業に戻ってきた。

中等学校出身者では地元大連商業の存在感が大きい（実業に6人、満俱に3人）。そのほか、実業では広島商業（石本、福山、小島、武井）、満俱では京都一商（森田、沖、人見、尾家、竹内、花満）が目立つ。満俱の六大学出身者比率は1930、31年に大きく下がっている。もちろん、1つの原因は経済不況だが、都市対抗野球の影響も考えねばならない。六大学の選手たちが卒業後も野球を続ける環境が内地でも整いはじめていたからである。1930年秋に満俱監督の中沢は「今後は好い選手は大抵東京にとられてしまふでせふ」と危機感を抱いていたが¹²⁰、それが杞憂でなかったことを物語っている。

実満両チームの華やかな活動を支えていたのは後援会である。実業の後援会は1919年に、満俱の後援会は1920年に創設された。満俱後援会創設時の年会費は10円、会

¹²⁰「これからは野球選手東京に取られる」『満日』1930年10月29日。

表 3-8 実業選手と実満戦参加状況

名前	学歴	職歴	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	回数
安藤忍	麻布中学、明大	五葉商会、安藤商店	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		10
内田勝	明大	鈴木商店	○											1
石本秀一	広島商業	三井	○	○	○		○							4
中島謙	龍ヶ崎中学、明大	小寺油房、東華銭荘	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11
坂本一次	京都帝大	大連汽船	○	○										2
福山尋	広島商業	福昌華工	○	○	○	○	○	○	○	○	○			9
宮永実	法大			○										1
小島春造	広島商業	鈴木商店	○											1
川上武治	大連商業	大連汽船	○	※	○									2
湯浅禎夫	米子中学、明大*	鈴木商店	○											1
富岡壮三	明大	富士商会		○										1
酒井貞雄	大連商業	大連汽船		○										1
平田豊	長崎高商	大連汽船		○		○								2
清田正憲	大連商業	五葉商会、大連商業		○	○	○		○	○					5
長宗我部梓	大連商業	大連汽船		○										1
大柴秀男	早実	三井			○									1
今居利策	大連商業	高田商店		○	※									1
田中茂	麻布中学	三菱			○	○								2
吉田金弥	吉備商業	通信局			○	○		○						3
高橋誠	青島中学、明大*	通信局、国際運輸			○	○				○	○	※	○	5
出口修三	慶應普通部、慶大*	油谷商店			○									1
谷口(岩瀬) 五郎	釜山商業、早大	仁来銭荘、儲蓄公司				※	○	○	○	○	○	○	○	7
吉岡保	関大(神港商業)	市役所					○							1
安藤勝	青山学院	通信局、五葉商会				○		○	○			○	○	5
田部武雄	広陵中学、明大*	東華銭荘				○	○	○						3
横沢次男	法大	仁来銭荘				○								1
将積一明	関学	国際運輸					○	○	○					3
山本栄一郎	鳥根商業	宝塚運動協会、国際運輸					○	※	○	○				3
横道一郎	釜山商業、早大	国際運輸							○					1
田岡兵一	広陵中学	東裕銭荘							○					1
平田次郎	横浜商業、青山学院	東京電気									○	○		2
中川武行	松山商業	福昌華工							○	○	※	○	○	4
宮武英男	錦城中学	神戸鉄道局、国際運輸								○	○	○	○	4
池永忠義	関学										○			1
木下博喜	奉天中学	京城鉄道局、国際運輸									○	○	○	3
渡辺実	釜山商業	国際運輸									○	○	※	2
梶下晃	松山高商	福昌華工									○			1
源川栄一郎	新潟中学、早大	ツーリストビューロー、日清生命										○	○	2
立石栄	徳島商業	大毎、京城府庁、国際運輸										○	○	2
津田四郎	関西中学	東電、福昌華工									※	○	○	2
中川金三	下関中学、明大	大毎、三井生命										○	○	2
因藤正喜	大連商業	国際運輸											○	1
武居正清	広島商業	国際運輸、純昌銀号								○	※	○	○	3
藤浪光雄	釜山商業	国際運輸											○	1

※は兵役

*のちの進学先

表 3-9 満俱選手と実満戦参加状況

名前	出身	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	回数
田村道堅	山口高商	○	○	○	○	○	○						6
沼田平五郎	早稲田中学、荏原中学、法大	○	○	○	○	○	○						6
増田定治	満鉄育成	○	○	○	○	○							5
岸一郎	早稲田中学、早大	○	○	○	○								4
真田金城	八高	○	○	○	○								4
森田康太郎	京都一商	○	○	○									3
大野東一	早実	○	○										2
沖利一	京都一商	○	○										2
網干益雄	神戸商業	○	※	○	○								3
山本松男	龍ヶ崎中学、法大	○		○									2
清水広次	敦賀商業	○	※										1
大門勝	郡山中学、明大	○											1
人見止戈三	京都一商	○											1
片岡秀雄	満鉄電気作業所		○	○	※	※	○	○	○	○	○	○	8
伊藤兼行	法大、奉天満俱		○	○			○	○	○				5
岩田春男	法大		○		○	○							3
坂本一次	京都帝大			○	○	○							3
中沢不二雄	神戸中学、荏原中学、明大				○	○	○						3
疋田捨三	高輪中学、法大				○	※	○	○	○	○	○	○	7
尾家文郎	京都一商、満鉄、同志社大				○								1
木原慶次郎	豊国中学、明大					○	○	○	○	○			5
北川一士	関西中学、明大、大毎					○	○	○					3
酒井栄一	麻布中学、法大					○							1
西村豊	鳥取中学、神戸高商					○							1
宗正要	大連商業					○							1
緑川郁三	唐津中学、早大						○	○		○	○	○	5
伊藤実	鉄道教習？上海、四平街？						○						1
竹内愛一	京都一商、早大						○	※					1
酒井	平壤中学						○						1
児玉政雄	旅順中学、早大							○	○	○		○	4
井上正夫	小倉中学、早大							○	○	○			3
中井幸雄	坂出商業							○	○		○		3
竹中二郎	大垣中学、立大						※	○	○				2
二神武	明倫中学、立大、大毎							○	○				2
室井今朝吉	長崎商業、奉天満俱							○	○				2
南城尚夫	前橋中学、立大							○	※	○			2
石関信助	神戸一中、七高、京都帝大							○					1
上条千幸	松本商業								○		○		2
青山金太郎	育英商業、力士団、天勝、全大邸								○			○	2
花満佐太郎	京都一商								○		※		1
吉野幸策	大連商業、山口高商、京城電気									○	○	○	3
芥田武夫	姫路中学、早大								※	○	○		2
永沢武夫	郡山中学、明大									○	※	○	2
浜崎真二	広島商業、神戸商業、慶大									○	※	○	2
長沢新平	福島中学、國學院大学									○			1
高須兼三	岡崎中学、名古屋鉄道局										○	○	2
山口茂次	佐世保海軍工廠、宝塚										○	○	2
鈴木正武	五高、東京帝大										○		1
時辰辰夫	鹿児島商業、安東満俱										○		1
藤枝宏二郎	松山高商										○		1
梅本正次	大連商業											○	1
柴原勇	愛知商業											○	1
野田健吉	郡山中学、立大											○	1
山下實	神港商業、慶大											○	1
古味重雄	大連商業、松山高商											○	1
小池栄一	愛知商業											○	1
和田四郎	小樽中学、上海同文											○	1

※は兵役

員数は300人だったから、予算規模は3000円程度だろう¹²¹。両後援会とも毎年春にその年度の会員を募集する。たとえば、1926年春に実業後援会は年会費6円、予定数800人で会員を募集した¹²²。1927年の実業後援会の会費は普通会员が5円、定席会員が8円、特別会員が10円で、定席会員には三塁側の席、特別会員には本塁裏と三塁側の席が与えられた。希望者は五葉商会、宮谷商店、大連新聞運動部、遼東新聞運動部、山本運動具店、体育堂、大阪屋、裕泰洋行に申し込むことになっていた¹²³。一

表 3-10 満俱後援会収支

収入	
繰越	1,649.91
会費	19,612.50
利子	260.14
合計	21,522.55
支出	
八チーム招聘費	12,756.22
満俱用品費及運動場修理費補助金	959.40
スコアボード築造費補助金	339.08
会費券手数料	836.36
運動場取締費	820.50
選手饞別見舞旅費補助	770.00
印刷費	137.31
通信費雑費	185.00
立替金	400.00
翌年度繰越	4,318.68
合計	21,522.55

方、満俱後援会は特別会員（会費10円以上、ネット裏中央の席）、甲種会員（会費8円、中央から三塁側の席）、乙種会員（会費5円、一塁側の席）、丙種（会費3円、音楽堂付近と一塁側の席）に分かれ、特別会員は100名、甲種650名、乙種550名、丙種300名が定員で、抽籤制だった¹²⁴。満俱の場合、会費だけで1万円近くに達したはずである。1928年度の満俱後援会の収支（表3-10）を見ると、会費だけで2万円近くになっている¹²⁵。支出で最も多いのは外来チームの招聘費で、繰越金を除く支出の4分の3を占めている。1チーム平均1600円かかったことになる。次に多いのが用具と球場に関わる「補助金」である。実満ほどのチームになると用具費だけでも相当かかる。

実業が一年間に使ふボール代は昨年迄は七八百円であつたが、本年は試合が多かつたため（一試合一打^{ダース}を要する事がある）約千四百円を使つてゐる。バットが一年、昨年の二ケ年を通じて約九百円、ユニフォームが約八百円、靴代に約三百

¹²¹「満洲倶楽部後援会」『満日』1920年8月6日；「満洲倶楽部根本改造」『満日』1920年9月29日。

¹²²「実業野球後援会会員を募集す」『満日』1926年4月27日。

¹²³「実業野球団後援会会員募集」『満日』1927年4月27日。

¹²⁴「満俱後援会会員募集」『満日』1927年4月15日、1930年4月15日。

¹²⁵「満俱後援会」『協和』3号、1929年6月1日。

円を使つたと言ふ。……〔満俱は〕平均一ケ年ボール代二千円、ユニフォーム三百六十円、バット五六百円、靴五百円、其他帽子グラブ等色々な器具を入れると約四千元近い経費を要する¹²⁶。

これは1929年の記事だが、1931年の記事は次のようにいう。

満俱や実業団が使ふバットやボール、サテ、どの位あるのでせう？グラウンドの改修費、野球道具費、外来チーム招聘の費用、選手の傷や病気（野球による）の治療費、その他の雑費を加へるとどうしても二万五千元から三万円位は要るでせう。野球道具中で一番金高の嵩むのは何といてもボールとバットでせう。バット一本の値段は国産品で四円内外、アメリカ物のホワイトアツシユですと五、六円もしますから一シーズンの使用数三百本と見て約千五百円……ボールは規定の二号ボールの牛皮物が一打十九円二十銭位、手ざはりのいゝので一般に喜ばれる馬皮物は二十円四十銭から二十四円まで、で一シーズンに百打使用すると見て二千元以上を要する勘定です¹²⁷。

用具代が4000円とすると、後援会はその4分の1を補助していたことになる。残りは入場料収入などでまかなったと考えられる。後援会員は実満とも2000人程度だが、六大学チームとの対戦になれば、観客数は3万人に達することも珍しくなかったから、入場料は相当な額に達しただろう。実業側のふところ事情はあまりよくわからないが、後援会費と入場料では年額3000円の不足を来しているといい、おそらく寄附でその穴を埋めていたのだろう。

満俱の浜崎真二は来連当初、先輩から実満戦が「〔満洲における早慶戦〕と称されてゐる歴史的試合で勝負如何は勝てば一年中全満の覇者として夏の都市対抗戦には出場出来るし、又大連市中を闊歩して威張られるが、若し反対に負けると一年中実業に頭が上らないし公私共に不愉快でならないから、是が非でも勝たなくてはならない」と言われて、「度肝を抜かれ」た¹²⁸。『ベースボール』誌主筆で1931年の実満戦を批評するため来連した三宅大輔は、「両軍の選手諸君がコチ＼／に固くなつて居る」のに気づ

¹²⁶「用具から見た満洲運動界（二）」『満日』1929年10月30日。

¹²⁷「満俱や実業団が使ふバットやボール」『満日』1931年6月18日。

¹²⁸「実満戦を前にして（四）」『満日』1931年6月13日。

いた¹²⁹。歴戦の勇士にとっても実満戦は特別の存在だった。

実満の関係は、たんなる野球のライバルにとどまらなかった。両者の対立は選手の間というよりも、後援者の間でより強かった。古くは実満戦の再開を妨げていたのがそれぞれの後援会であったし、実満戦が再開されると、「遠征チームには負けても実業に負けるな、満俱を破つて呉れ」といった声が双方のファンから選手に投げかけられた¹³⁰。満俱と実業の背後には、満鉄系の『満日』とそれに対抗する『遼東新報』や『大連新聞』があり、さらにその背後には満鉄と市中という満洲社会の二大勢力が控えていた。実満戦はしばしば早慶戦にたとえられたが、満洲の野球界は学校のライバル関係を基礎とする内地の野球界とは大いに性質を異にしていた。

とはいえ、外来チームに応戦するために全大連チームをつくるべきだという主張は早くからなされていた。たとえば、1919年5月の『遼東新報』の記事は、「満俱と実業との粋を集めた所謂全大連軍」を組織し、「外敵との試合に当」たることを求めている¹³¹。満俱と実業が都市対抗野球を三連覇したあと優勝から遠ざかり、東京倶楽部や全大阪や全京城のようなピックアップチームが活躍するようになると、このような主張はますます説得力を持った。にもかかわらず、最後まで全大連チームが編成されなかったのは、満鉄対市中という大連社会、そして満洲の日本人社会の構造によるところが大きいだろう。一方で、この対立が大連野球界のレベル向上に寄与したこともまた認めねばなるまい。

第4話 野球IV（遠征）

満洲に野球チームが誕生してわずか半年後に米国東洋艦隊の野球チームを迎え撃つたことはすでに述べた。その2週間後には上海同文書院と若葉会の試合が行われている。満洲の野球はその当初から外来チームとの対戦を経験し、その刺激を受けて発展してきたといえるだろう。以下では内地野球チームの遠征について概観したい。

¹²⁹ 三宅大輔「実・満戦を観る」『満日』1931年6月14日。

¹³⁰ 「今年度の野球界と満洲倶楽部」『協和』3号、1927年6月1日。

¹³¹ 「今年の野球界」『遼東新報』1919年5月17日。

内地野球チームによる最初の満洲遠征は天狗倶楽部によるものだった。満洲に野球が勃興しつつあることは、長春在住の天狗倶楽部メンバー、獅子内謹一郎によって内地に伝えられていた。1914年11月付けの通信で獅子内は、「時に天狗軍が来春辺り満洲へ出掛けて来ると面白いがね、中学二流位のチームばかりだから銀天木葉天三四人に、金天が四五人も居れば負けないよ」と来満を勧誘していた¹³²。翌年6月には天狗倶楽部の高瀬養（増田商店）が満蒙視察のため来連、埠頭倶楽部対大連実業の野球を観戦、『満日』紙上に短評を寄せていた¹³³。

1916年9月、内垣実衛からの「愆愆」でついに天狗倶楽部一行が満洲にやってきた。メンバーは橋戸信、日下輝、飛田穂洲、押川清、西尾守一、赤堀秀雄、島田厚之助、弓館小鰐、鈴木堅三郎、針重敬喜、大村隆行、倉田白羊である。おりしも、撫順と長春から野球チームが大連に来ており、満俱、実業を交えて5チームによる試合が行われた。天狗は獅子内謹一郎を投手に迎えて満俱、実業と対戦したが、4対9、3対5で連敗した。満鉄庭球部との庭球戦も敗れている。その後、旅順工科学堂に勝利し、撫順、長春、ハルビンと北上した。撫順では散々に負かされたが、飛田は、水戸中学の先輩で「一高式野球なるものを広く天下に紹介した功労者」たる平野正朝に直接教えを仰ぎ、深い感銘を受けた¹³⁴。約20日間の遠征だったが、満鉄区域内では汽車賃と宿泊料が無料ないし半額だったため、飲み食い土産物をあわせて100円ほどしかかからなかった。満鉄が彼らを優遇したのは、彼らの筆を通して満洲を宣伝するためだった。内地の人に満洲を知ってもらうことで、多くの資本と優秀な人材を引きつけることができるからである。夏目漱石を呼んだのもそうした活動の一環だった。

翌年、早大野球部が来満した。大学チームによる満鮮遠征の魁だった。早大を招聘したのは満洲の早大校友会である。「単に野球遠征の目的に非ずして学生旅行団として満韓視察を主」とするとは大義名分であって¹³⁵、7月3日大連に到着してから京城での最後の試合まで15日間に8試合をこなしていることから、野球遠征が主目的であっ

¹³² 獅子内謹一郎「満洲だより」『野球界』4巻12号、1914年12月5日。

¹³³ 「埠頭実業野球戦細評」『満日』1915年6月17日；「埠頭実業野球戦短評（下）」『満日』1915年6月18日。

¹³⁴ 飛田穂州『野球人国記』69頁。

¹³⁵ 「早大野球団の満洲遠征」『東京朝日新聞』1917年6月19日。

たことは明らかである(表4-1)。この間の費用はすべて在満の校友が負担した¹³⁶。7月に卒業を控えていた主将加藤吉兵衛は遠征に参加しなかったが、3年後に来満し大連実業の主将をつとめることになる。

早大は前年にアメリカ遠征をしていた。その間、留守軍は法大、明大を破り、さらに関西に遠征したが、京都一商に敗れる波乱があった。このとき早大留守軍から金星を挙げたのが和田正三、尾家文郎のバッテリーであった。その

和田と尾家は、今度は満俱のバッテリーとして早大一軍にまみえることになった。

7月5日の満俱戦、早大のエース岸一郎は肩を痛めていたが、満俱を3安打無得点に抑えた。スコアは12対0で、早大が貫禄の違いを見せつけた。翌日の実業戦は昨年京都一商戦で黒星を喫した橋本隆造が先発した。橋本も実業を完封した。満俱との第2戦は伊藤十郎が先発、満俱は大差で敗れたが、3点をもぎ取り「奮戦」した。実業との第2戦、勝ち目は無いものの、早大から何点とるかに注目が集まった。満俱が零敗を免れたからには、実業も零敗するわけにはいかない。早大は岸が先発した。市岡忠男捕手が藤田御都を恐れて1点を献上したことはすでに記した。

早大が思わぬ苦戦を強いられたのは撫順戦である。遠征の後半で疲れが出ていたということもあるが、なんと言っても撫順は当時全満の覇者であった。それでも「当時満洲の野球界は未だ幼稚にして問題とならなかつた」というのが飛田穂洲の評価である¹³⁷。早大と入れ替わりで来連した同志社大学は実満と互角に戦ったように見えるが、満俱は第2戦で二軍メンバーを出している。この年には三高野球部も満俱の猪子一到の斡旋で来満を検討していたが(和田と尾家をリクルートしたときに話をしたのだから

表 4-1 早大遠征日程

3日	大連着
4日	大連見物
5日	満俱戦 12-0
6日	実業戦 17-0
7日	沙河口見物
8日	満俱戦 10-3
9日	実業戦 11-1
10日	旅順見物、旅順工科戦 8-1
11日	奉天へ移動
12日	奉天見物、夜行で長春へ
13日	長春見物、長春戦 8-0
14日	撫順へ移動
15日	撫順見物、撫順戦 4-3、夜行で安東へ
16日	夜行で京城へ
17日	龍山鉄道戦 10-0

¹³⁶「早大野球軍着連日程変更」『満日』1917年6月26日。

¹³⁷飛田穂洲編『早稲田大学野球部史』明善社、1925年、235頁。

う)、実現しなかった¹³⁸。

1918年6月2日、岸一郎が大連にやってきた。満鉄にいた先輩の井上芳雄から入社を懇請され、根負けしての入社だった。こうして岸は遠征チームの一員が満洲に来てプレーするという先例を開いた。関東州野球大会の開幕を控え、満鉄本社チームでの活躍が期待された岸は矢のような催促を受けていた。満鉄入社後は、退社時間の午後4時になると尾家に引っ張り出され、満鉄本社チームの練習に参加した。16日午前に行われた大連商業戦の7回より初登板し、午後の大連実業との優勝戦で満洲での初勝利を挙げた¹³⁹。

1918年最初の外来チームは法大だった。大連では実満と4戦して1勝3敗に終わるが、いずれも接戦だった。4番を打った岩田晴男はのちに満俱入りし、法大選手を次々と満洲に連れてくることになる。次に来征したのが明大である。『大連実業野球団二十年史』によると、明大出身で実業のエース大沢逸郎は試合の前夜になって、自分は先輩だから投げられんと言い出した。周囲の説得でようやく出場することになったが、明大打線は4回までに手も足も出なかった。実業が5回の守備につこうとしたとき、大沢投手がいなくなった。やむなく藤田がマウンドに立ち試合を続行した。大沢は4日後にようやく現れ、明大の選手が自分を先輩と思って遠慮して打たないから大連を離れるまで隠れていたのだという¹⁴⁰。ただ、この説明は当日の試合展開と噛み合わない。藤田がマウンドに立ったのは7回である。5回まで6対5で明大がリードしていたが、6回に実業は一挙6点を入れ、7回の時点で勝利を確実なものとしていた。大沢は1929年に明大留守軍を、1931年に日大軍をそれぞれ監督として率いて大連にやって来る。

1918年春、一高は早大を7対0、慶大を4対0となで切りにして、久々に東都に覇を唱えた。殊勲者は主将の内村祐之投手（内村鑑三の長男）で、慶大からはなんと17の三振を奪った。春シーズンを全勝で飾った一高が次に目指したのが大連だった。満俱の岸投手は満鉄入社前に一高と慶大の試合を観戦していた。その前年に見たときは「あれでよく投手が務まると思つた程下手」だった内村が、そのときは「見違へるばか

¹³⁸「三強野球団来」『満日』1917年5月10日。

¹³⁹岸一郎「野球王時代」『協和』97号、1933年5月1日。

¹⁴⁰宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』66頁。

りの大投手」となっていた。かたや「東都に於て強豪を物の見事に零敗せしめたる自他共に許す覇者」、かたや「遠征し來たる各チームを総舐めにして我こそ日本一と自負する者」と岸が語るように、満俱と一高の対戦は事実上日本一を決める試合であり、それぞれのチームで主将と投手を兼ねる岸と内村の戦いでもあった。試合当日の午前、岸は仕事が手に付かず、いかにして一高に勝てるかに思いを巡らした¹⁴¹。

満俱との一戦は予想通りの投手戦となった。一高が4、5回に1点を入れ、そのまま終盤に入るが、満俱は8、9回で1点を入れて追いつき、延長に入った。延長11回表、満俱は1点を取り、これが決勝点となった。プライドの高い一高は、同一チームとは1回しか試合をしない。今回も満俱、実業と1回ずつの対戦が予定されていただけだったが、満俱に敗れたのがよほど悔しかったのか、老鉄山こと中野武二監督は3回戦の実施を申し込んできた。満俱側は約束だからと断るが、中野は「いやそれを曲げて御願するんだ」と聞かない。中野は、もし負けたら坊主になり、予定していた北京、天津行きも中止するとまで言う。そこで満俱も挑戦に応じることになった。満俱に敗れた翌々日、一高は実業と対戦した。実業はエースの大沢が脚気で出場できず、藤田をマウンドに送ったが、0対10で大敗した。1日おいて、いよいよ満俱との2回戦が行われた。緊迫した投手戦となり、両軍無得点のまま延長戦に入った。10回表、二死で大門が二塁にいた。打者は4番の岸。大門は三塁に盗塁、中松捕手の送球はそれ、外野へ。大門はすかさず本塁を陥れた。一高最後の攻撃も無得点に終わり、満俱が勝ち越しを決めた。一高チームは約束通り、頭を丸めて天津、北京行きを中止し、大連で解散となった。「其男らしい態度、学生気分、プレー振りの高尚なりし事等流石と肯かれるものがあつた。特に内村君に至つては古今の名手、日本に野球始つて以来の名投手と考へる」とは岸の一高評である¹⁴²。

1919年8月、慶大野球部が来連した。3年前に来連した天狗倶楽部一行に慶大出身の日下輝がいた。在連の慶大出身者が日下を招いて開いた宴席で、日下は「来年夏休には是非慶大野球選手を掲げて満洲遠征を試みたい」という希望を述べた。大連側はこれを歓迎し、同窓会員が毎月1円積み立てて、旅費と滞在費に当てることを決議し

¹⁴¹岸一郎「野球王時代」『協和』97号、1933年5月1日。

¹⁴²岸一郎「野球王時代」『協和』97号、1933年5月1日。

ていた¹⁴³。その後、1917年、1918年と慶大の来征が伝えられたが実現せず、1919年によろやく来征が決まった。慶大は天狗や早大とは逆に朝鮮から出発し、安東、奉天、撫順を経て大連にやってきた。大連での初戦、慶大は2対3で満俱に敗れる。続く実業戦、マウンドに上がったのは石本秀一だった。石本は広島商業エースとして1917年に全国中等学校優勝野球大会に出場したが、関西学院高等部に敗れた。翌年春、石本は慶大を受験、そのまま慶大の練習に参加した。しかし、不合格となったため、関西学院に入学するが、まもなく広島に戻った。1919年、恋人との結婚を父に反対され、駆け落ち同然で大連にやってきた石本は、三井物産に職を得た。投手難に苦しむ大連実業に加わり、初めて出場したのがこの試合であった。球の投げすぎで肩を壊していた石本だったが、ひよろひよろとしたアウトドロップがかえって慶大の打者を悩ませ、3対1で初登板初勝利を挙げた。辛うじて零敗を免れた慶大軍は宿舎へ戻るとみな涙したという¹⁴⁴。石本の球に面食らった慶大軍だが、さすがに2回戦以降は順応し、石本を打ち崩している。

1920年に米子中学を卒業した湯浅禎夫は、大連の鈴木商店に就職、同年秋の満洲野球大会の鞍山戦に投手として出場し、満洲でのデビューを勝利で飾った。剛球投手として鳴らした湯浅だが、大連実業では3、4番手の投手で、主に外野手として出場することのほうが多かった。林田学によれば、湯浅の「投球は殆んど無茶苦茶で少しのコントロールもなく唯猛球一点張りで其のスピードの猛烈さによく打者の横腹や腕にデッドボールを喰はしてピッチャープレートから駆け出して帽子を取つて打者に謝つて居た」という¹⁴⁵。1921年の大毎との第1回戦、8回裏一死一、二塁の場面で湯浅はマウンドに立った。小野三千磨に四球を与え満塁、沢にタイムリーヒットを浴びて1点を献上したものの、井川、内海を連続三振にとり、1点でピンチを切り抜けた（試合は2対4で負けた）。大毎との第3回戦、7回裏からマウンドに上がった湯浅は、その回の大毎の攻撃を三者三振に抑え、8回裏も安打を浴びながら無失点で切り抜けた。秋の実満戦にはいずれも先発し、実業の覇権獲得に貢献した。実満戦優勝を置き土産に明

¹⁴³「野球戦後記」『満日』1916年9月19日。

¹⁴⁴西本恵『日本野球をつくった男：石本秀一伝』講談社、2018年、27-28頁。

¹⁴⁵「林田学氏思ひ出話より」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』114頁。

大に進学した湯浅は、退学となった渡辺大陸から明大エースの座を受け継ぎ、1923年には明大にリーグ初優勝をもたらす。同年、明大エースとして来連した湯浅は、実業戦の2、3回戦で先発し、古巣の実業から勝利を挙げる。このとき湯浅は大連ファンから猛烈に弥次られ、バットを持って観覧席に踏込むという一幕があった。明大を卒業した湯浅は大毎に入り、1926年の満鮮遠征に参加する。実業との初戦に登板した湯浅は、谷口五郎投手と投げ合い、1対0でまたもや古巣から勝利を挙げる。大連のファンは湯浅の成長ぶりに驚いた。

1921年8月、セミプロの大毎が青島、天津から大連に転戦してきた。満日社が実満との試合を主催することになったが、ギャラの問題で揉めた。学生チームの場合は旅費の支払いだけで済むが、セミプロとなるとそうともいかない。大毎側が求めたギャラは500円だったが、満日社側は渋った。大毎奉天特派員の名村寅雄は業を煮やして満日社長に別の人を呼んできて欲しいと申し入れた。満日社は林田学を名村のもとに送り協議させた結果、(おそらく500円で)話が纏まった。2人は記者仲間で、7月末には林田率いる大連記者団と名村率いる奉天記者団が野球試合をしているくらいだから、うまくいったのだろう¹⁴⁶。11年後に林田はこのときのことを「今から思ふと大毎チームに対する五百円のギャランティは馬鹿々々しい程安価なものだが当時は夫れが問題になった位だから面白い」と回想している¹⁴⁷。大連ではこの年の7月から外来チームの試合での入場料が解禁されていたが、これはひょっとしたら大毎の来征を念頭に置いていたのかもしれない。少なくとも、8月初めに奉天で入場料が解禁されたのは、明らかに大毎を迎えるためだった。大毎は奉天での試合後、奉天野球倶楽部に500円を寄附している。ひょっとしたら、これが林田と名村の取り決めだったのかもしれない。大毎はその後、1922、1923(震災のため途中で引き返す)、1924、1926年に満洲に遠征する。林田の回想から推測するに、1922年以降は大連側がそれなりのギャラを支払ったのだろう。セミプロ球団が利益もないのにたびたび満洲に来るはずがない。大毎は小野三千磨投手、森秀雄捕手をはじめ精鋭を集めただけあって強かった。実満との対戦成績は、実業がすべて負け越し、満俱は勝ち越し1回、引き分け1回、負け越し2

¹⁴⁶「記者団奉天遠征に捷つ」『満日』1921年8月1日。

¹⁴⁷林田学「実満戦開始期の回顧」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』110頁。

回であった。大毎からは出口修二が実業に、二神武と北川一士が満俱に加入することになる。1922年に大毎の一員として来連した浜崎真二も慶大を経て1929年に満俱入りする。

日本運動協会は、橋戸信、河野安通志、押川清ら天狗倶楽部の面々が中心となり1920年に創設された日本初のプロ野球団である。1921年夏に選手を公募、激しい競争を勝ち抜いて選ばれた14名の練習生のなかに、大連商業2年生の片岡勝が含まれていた。片岡は満俱捕手片岡秀雄の弟で、兄と同じく捕手をつとめた。片岡とバッテリーを組んだ山本栄一郎投手は、島根商業の出身、1925年シーズンから大連実業団の強打者として活躍することになる（のち巨人軍入りし2度のアメリカ遠征にも加わる）。飛田穂洲によれば、山本は「大正八年には、鳥取〔一中〕の西村豊、米子〔中学〕の湯浅禎夫君とともに山陰中学界の三大投手と称せられてゐた¹⁴⁸」。その全員が満洲でプレーすることになったのは興味深い。学生野球界を浄化すべく結成された日本運動協会は、野球だけでなく、学業にも力を入れ、模範的な選手の養成を目指し、最初の1年間選手は訓練に明け暮れた。試合に出ない協会軍に対して陰口がたたかれるのは致し方なかった。その協会が最初の対外試合に選んだのが満鮮遠征であった。押川監督自身が1916年に天狗倶楽部の一員として満洲に遠征しているし、1年前には大毎が天津や大連に遠征していたから、外地への遠征が採算の取れる事業として見込みがあると判断したに違いない。この戦略に対しても国内でやらないのは実力を隠すためだと批判される始末だった。しかし、1922年から1929年まで協会が毎年満鮮遠征したことを考えれば、この戦略は正しかったのだろう¹⁴⁹。

1922年6月21日、押川監督率いる協会軍は東京を出発し、23日に釜山で最初の試合に臨む。船酔いの影響もあってこの試合は4対5で惜敗するが、その後大邱、京城、仁川、平壤、長春、奉天、撫順を経て大連入りするまでの間、奉天に負けたほかは全勝し、10勝2敗の好成績を挙げた。途中、孫孝俊という朝鮮人選手を採用する。孫は天道教第3代教主で三・一独立運動の主導者であった孫秉熙（この年の5月19日に亡

¹⁴⁸ 飛田穂洲『野球人国記』290頁。

¹⁴⁹ 日本運動協会については、佐藤光房『もうひとつのプロ野球：山本栄一郎の数奇な生涯』朝日新聞社、1986年、協会と朝鮮の関係については、小野容照『帝国日本と朝鮮野球』を参照。

くなっている)を祖父にもち、天道教青年会チームを組織していた。孫は右翼を守り4番を打った。孫ものちに満洲でプレーすることになる。

日本運動協会は初戦の大連実業戦こそ快勝したものの、第2、3戦を連敗した。続く満倶戦、満俱の捕手は片岡秀雄、協会の捕手は片岡勝と、奇しくも兄弟対決になった。協会は初戦を落としたが、第2戦は勝利を収めた。決勝戦は雨で中止となり、12勝5敗で最初の遠征を終えた。

日本運動協会は関東大震災で解散を余儀なくされるが、翌年に宝塚運動協会として復活し、河野安通志監督のもと満鮮遠征を続ける。実満との対戦成績を見ると、実業には分が悪く、1928年に引き分けた以外は、すべて負け越している(1925年は実業との対戦がなかった)。一方、満俱には1925年まで勝ち越したが、1926年以降は負け越しが続いた。この間、宝塚運動協会そのものの成績は大きく変わらないので(1928年に勝率が若干下がった)、満俱が強くなったということであろう。

協会は満鮮遠征に力を入れたため、両地との関係が深かった。協会には孫孝俊のほかにも、咸龍華(池田)、鄭麟奎(西松)、金貞植(西村)、李鯨九と多くの朝鮮人選手がいた。このうち、金と鄭は徽文高等普通学校が全国中等学校優勝野球大会でベスト8入りしたときのメンバーだった。小野容照によれば、「朝鮮での宝塚運動協会の人気は、朝鮮人選手たちによって支えられていた¹⁵⁰⁾」。現地選手の採用は宣伝面で重要だったのであろう。満洲にゆかりのある選手には、満鉄見習学校(のちの満鉄育成学校)の田村正夫と野原五郎がいる。田村はのちに奉天満俱で、野原は全撫順や大連実業で活躍する。原口清松投手は南満工業が全国中等学校優勝野球大会に出場したときのエースである。広陵中学出身の香川勇勝は奉天満俱、青山学院出身の尾崎昇次郎は全撫順に転じた。1927年から協会のエースをつとめた山口茂次は協会解散後に大連満俱に加わった。山口の前のエース大貫賢も一時期満洲の各チームで助っ人をしていたらしい¹⁵¹⁾。協会軍の最後の試合は1929年7月15日の大連実業戦だった。協会軍の戦いは、満鮮に始まり、満鮮に終わったのである。

日本運動協会と並ぶ日本プロ野球団の草分け天勝野球団も1923年4月に満鮮を訪れ、

¹⁵⁰⁾ 小野容照『帝国日本と朝鮮野球』258頁。

¹⁵¹⁾ 佐藤光房『もうひとつのプロ野球』149頁。

圧倒的な成績を残している¹⁵²。天勝は奇術師の一座で、1921年2月に宣伝のために野球団を組織し、興行の先々で現地チームと対戦していた。1921年4月に来連したさいには、大連記者団に大敗しているから、大したチームではなかった。その後、有力大学出身の選手を次々と加えて強力なチームになった。このような宣伝方法は当時としては珍しいものではない。1920年春から夏にかけて、村田栄子一座は満洲各地で公演をしつつ、野球の試合をしてまわった。村田は大連で関東州野球大会を観戦に訪れ、花輪を贈呈している¹⁵³。1922年には未来座、1926年には五月信子の近代座、1927年には五九郎の一座が来満し、各地の二、三流チームと試合をしている¹⁵⁴。天勝野球団は関東大震災で解散を余儀なくされるが、一部の選手は別のチームに移って活動を続ける。たとえば、1924年に永岡一（慶大出身）が奉天実業団に、中沢不二雄（明大出身）が大連満俱に加わった。力士出身のエース青山金太郎は1928年に大連満俱入りし、主戦投手として活躍することになる。

1920年代の短命に終わったプロ、セミプロ球団にとって、満洲は興行面だけでなく、選手の供給源と再就職先としても重要な存在であった。野球選手の移動を見ていくと、内地と満鮮（さらに中国大陸）を包含する人的ネットワークが浮かび上がる。遠征はこのネットワークの現れでもあり、また遠征を通じてこのネットワークが強化されたともいえる。このネットワークのなかで満洲はハブの役割を果たし、多くの優秀な人材を引きつけていた¹⁵⁵。

外来チームがやってくるのは、実満戦終了後の7月初めから9月初めくらいまでであった。このわずか2カ月の間に、多いときで8チームが来征する。実満それぞれと3回戦をするだけで1週間を要するから、大連側としては応接に暇がないということになる。さらに、1927年以降は都市対抗野球が加わり、スケジュールはいっそうタイトになった。たとえば1927年に満俱は都市対抗野球から凱旋した翌日に慶大と戦わね

¹⁵²天勝野球団については、東田一朔『プロ野球誕生前史：球史の空白をうめる』東海大学出版会、1989年を参照。

¹⁵³「スパイクの煙」『満日』1920年5月27日。

¹⁵⁴「野球幕開き」『満日』1922年3月12日；「天狗ぞろひの近代座野球団記者団と試合」『満日』1926年4月18日；「五九郎チームアカシヤに敗る」『満日』1927年9月21日。

¹⁵⁵高嶋航・金誠編『帝国日本と越境するアスリート』プロローグ。

ばならなかった。とくに外来チームが多かった1929年に満俱の中沢監督は「選手諸君のために、また大連球界のためにゲームがもつと少くあつてくれる事を切望する、勿論総ての外来チームが先方の費用持ちで来襲するのなら致し方ない」と述べている¹⁵⁶。

中沢は翌年の年初に、「招聘チームの限度は七チーム」と断言している¹⁵⁷。

1920年代半ばから大連側は費用を出すかわりに、来連するチームを選択するようになっていた。1924年春には満日社の岡田営業局長と上野靖囑託が内地に行き、早大、慶大、立大、大毎と交渉している。慶大は前年に朝鮮、天津を経て8月末に来連し、9月2日に実業と対戦していた。

彼の東京に大震災の起つた当日〔正しくは翌日〕のこと、恰度慶応の選手が来征して実業団と戈を交へて居たときのこと、インニングが四回か五回かまで進んで両軍極度に緊張して居る時、突如として数万枚の満日号外が見物席にも選手席にも配布せられて大震災が報道せられたので、観衆一同も俄然色を失つたが、慶応選手は皆冷水三斗位の感は無かつたらしかつた、それにも拘らず彼等は試合を続行して結果は惨々の敗戦となつた。彼等は多分心は郷里の空に飛んで居るであらう、父兄の安否を気遣ふ念で彼等の頭は昏迷して居るであらう、彼等の眼には阿鼻叫喚の現状が髣髴してボールもベースも見えないであらうと思ひつゝ、私は坐ろに征士の痛々しい心根を汲みつゝ泣きながら其試合を見た¹⁵⁸。

慶大は一戦を交えただけで帰国してしまった。1924年の来連が期待された慶大だが、結局上海、青島に遠征、満洲には来なかった。

1927年春、満俱は前主将沼田平五郎を内地に派遣し、関東、関西の各チームと遠征の打ち合わせをした。1931年春には、実業、満俱、各後援会の首脳が協議して招聘チームを絞り込んでいる。中沢は招聘すべきチームとして、六大学リーグ1、2位のチーム、外国チーム1つ、関西の最強チーム1つ、高商、専門学校の最強チーム2つ、特色のあるチーム1つを挙げている。大連側に選択権があることは、日大のケースが物語っている。つとに来連を希望していた日大は、1931年にようやく「本年は実力充実せり」

¹⁵⁶「外来チームとの対抗野球戦後記」『満日』1929年9月5日。

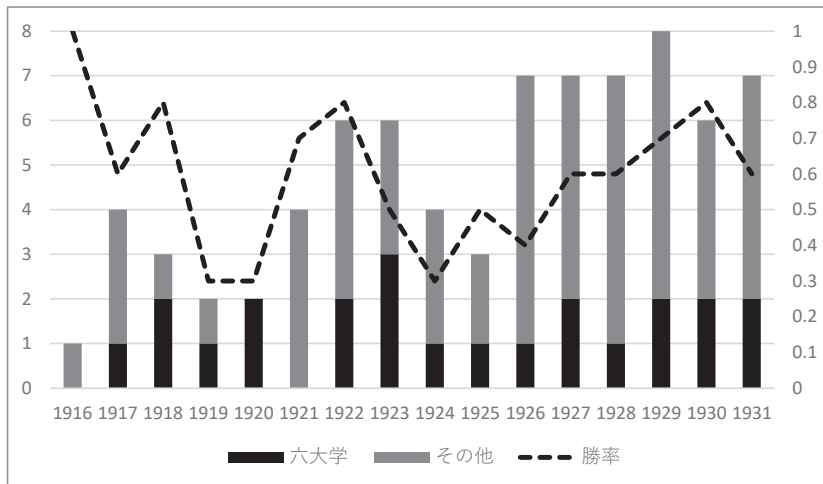
¹⁵⁷中沢不二雄「新春球話 回顧と希望」『満日』1930年1月13日。

¹⁵⁸中川久明「野球見物十五年の思出」『満日』1930年1月1日。

と認められ招聘された¹⁵⁹。一方で、勝手に来るチームを拒むことはできず、「もう出発したからよろしく頼む」と連絡してくるケースもあったと中沢は言っている¹⁶⁰。また、大連側がせっかく綿密にスケジュールを立てたにもかかわらず、遠征軍の勝手な行動に振り回されることもあった。1929年8月に来征した早大は途中で計画を変更し、満俱との3回戦を18、19、21日から15、16、17日に改めるよう求めた。3日連続の試合は大連ではこれまでなかったことで、さらに15日といえば都市対抗野球から戻った翌日に当たる。中沢監督は「鮮満支遠征の主たる招聘者たる大連側に対する礼でもなく、遠征の主要目的たる大連チームを遇する道でもない」と憤慨し、粘り強く交渉した結果、17日から3連戦と決まった¹⁶¹。両軍の対決は死闘と呼ぶにふさわしく、満俱は1勝1敗で迎えた第3回戦を9対8で勝利し、早大戦で初めての勝ち越しを決めた。

表4-2は大連に来て実業、満俱と対戦したチームの数、および実満チームの外来チームに対する勝率を示したものである（実満と対戦しなかった外来チームはカウントしていない）。外来チームは1917年に4チームを記録したものの、その後漸減した。1921年から来征チームが増えたのは、財政的な基盤が固まったからであろう。具体的には、実業後援会（1919年）、満俱後援会（1920年）の成立、入場料の徴収（1921年）

表 4-2 来征チーム数と実満チームの勝率



¹⁵⁹「外来チーム先陣はアラメダ」『満日』1931年6月7日。

¹⁶⁰「満日スポーツ座談会（三）」『満日』1928年3月4日。

¹⁶¹中沢不二雄「昭和四年度シーズン総評」『協和』17号、1930年1月1日。

である。それ以前は、各学校の在満校友会がチームを招聘し、あるいは各学校から在満校友会に遠征の希望を伝え、在満校友会が旅費を提供していた。このほか新聞社も応分の負担をすることで試合の主催者となっていた。

実満チームの勝率が5割を切るのは1919～20年、1924、26年である。全体的には実満チームは外来チームに対して優勢で、満俱が勝率0.629、実業が0.579となっている。表4-3から個別の状況を見ると、慶大には実満とも一度も勝ち越したことがなく、3回来征した早大にも1929年に満俱が1回勝ち越したただけである。大毎は4回来征して満俱が勝ち越し1回、引き分け1回と分が悪い。実満ともに負け越したのは、慶大が3回、早大、明大、大毎が各2回、天勝と九州帝大が各1回となっている。

表 4-3 実満の外来チーム対戦成績

年月	外来チーム	実	満	実業一遠征軍	満俱一遠征軍	満洲関係者
1916.9	天狗倶楽部	○	○	⑰ 5-3	⑮ 9-4	
1917.6	東亜同文書院	△	○	⑰ 6-6	⑰ 2-1	
1917.7	早大	×	×	⑥ 0-17, ⑨ 1-11	⑤ 0-12, ⑧ 3-10	岸 M
1917.7-8	同志社大	△	△	⑳ 15-10, ㉒ 6-8	㉑ 5-3, ㉓ 5-9	
1917.9	関学	○	○	⑦ 6-6, ⑨ 11-5	⑧ 7-4	
1918.6	法大	△	○	㉔ 1-2, ㉖ 8-7	㉕ 2-1, ㉗ 6-5	岩田 M、宮永 B
1918.7	明大	○	○	③ 13-8	② 3-3, ④ 7-5	安藤 B
1918.8	一高	×	○	㉑ 0-10	⑱ 3-2, ㉓ 1-0	
1919.7	大相撲	—	○		㉓ 9-0	
1919.8	慶大	×	×	⑰ 3-1, ㉒ 4-7, ㉖ 3-12	⑫ 3-2, ㉒ 1-6, ㉔ 3-4	
1920.8	法大	○	×	⑯ 7-5	⑨ 3-3, ⑪ 0-2, ⑭ 1-1	酒井 M、疋田 M、山本 M
1920.8-9	明大	×	×	㉒ 6-7, ㉖ 3-0, ① 1-6	⑳ 2-7	内田 B、木原 M
1921.7	関学	○	○	㉑ 11-5, ㉒ 4-0	㉕ 11-1	
1921.8	大毎	×	×	⑱ 2-4, ⑳ 2-1, ㉒ 0-4	⑪ 4-8, ⑭ 1-1, ⑯ 0-3	出口 B
1921.9	神戸高商	○	○	② 16-1	⑧ 2-1, ⑥ 4-0	
1921.9	京都一商	○	—	⑦ 7-5		竹内 M
1922.7	日本運動協会	○	△	⑨ 1-3, ⑪ 7-3, ⑭ 6-2	⑯ 3-0, ⑰ 2-3	尾崎、山本 B
1922.7	山鉄軍	—	○		⑨ 9-7, ⑩ 17-0	
1922.8	立大	○	○	⑦ 3-2, ⑫ 6-1	⑭ 3-2, ⑯ 10-0	竹中 M、二神 M
1922.8	法大	○	△	㉕ 12-3, ㉗ 6-11, ㉘ 8-4	㉒ 2-2, ㉔ 3-0, ㉖ 4-6	酒井 M、疋田 M
1922.8	山口高商	○	○	⑳ 15-0	㉑ 8-0	
1922.9	大毎	×	○	⑥ 2-5, ⑦ 3-9	⑨ 4-1, ⑪ 5-1	北川 M、浜崎 M
1923.4	天勝団	×	×	⑮ 3-8	㉒ 3-9	青山 M、永岡、中沢 M
1923.7	日本運動協会	○	×	⑤ 6-3, ⑦ 12-0	② 5-8, ③ 5-5, ④ 2-10	尾崎、山本 B
1923.7	京城鉄道	—	○		⑩ 11-0, ⑫ 1-4, ⑬ 8-3	
1923.8	東京帝大	○	△	③ 13-3, ⑤ 6-1	⑧ 3-2, ⑩ 2-4	
1923.8	明大	×	○	⑭ 3-2, ⑯ 2-3, ⑰ 5-2	⑰ 3-5, ㉑ 1-0, ㉒ 3-2	湯浅 B
1923.8	慶大	—	—	② ? - ? 震災で中止		浜崎 M
1924.8	京都帝大	△	○	⑤ 4-3, ⑦ 5-7	⑩ 4-1, ⑫ 13-4	石関 M
1924.8	早大	×	×	⑪ 6-7, ⑬ 3-11	⑮ 1-5, ⑰ 5-12	井上 M、竹内 M、氷室 M、水原
1924.8	宝塚運動協会	○	×	㉒ 1-8, ㉔ 6-4, ㉕ 12-0	㉗ 8-1, ㉑ 2-7, ㉓ 0-1	尾崎、山本 B

1924.9	大毎	×	△	⑤ 1-0, ⑧ 1-4, ⑨ 3-5	⑪ 1-1, ⑬ 2-3, ⑭ 5-2	北川 M
1925.7	宝塚運動協会	—	×		⑪ 4-0, ⑬ 2-4, ⑮ 2-7	尾崎、野原 B
1925.8	立大	○	×	⑬ 8-1, ⑮ 1-0	⑰ 3-1, ⑲ 1-2, ⑳ 1-3	南条 M、野田 M
1925.8	関学	△	○	㉑ 7-2, ㉒ 2-4	㉔ 13-3, ㉕ 1-4, ㉖ 6-1	
1926.6	朝鮮鉄道局	—	○		㉔ 7-6, ㉗ 8-1	木下 B
1926.7	大毎	×	×	⑱ 0-1, ⑲ 3-9	㉑ 2-8, ㉒ 2-7	
1926.7-8	スタンフォード大	×	△	㉓ 3-6, ① 1-6	㉔ 7-10, ㉕ 6-3	
1926.8	宝塚運動協会	○	○	⑧ 2-1, ⑩ 2-1	③ 2-1, ⑤ 1-1, ⑥ 2-1	尾崎、野原 B、田村
1926.8	同志社大	×	○	⑬ 2-5	⑭ 8-3, ⑯ 6-2	
1926.8	明大	×	×	⑱ 0-3, ⑳ 7-1, ㉑ 1-6	㉔ 2-7, ㉕ 0-8, ㉖ 0-1	高橋 B、中川 B、永沢 M
1926.9	北京マリン	—	×		⑪ 1-3, ⑫ 6-1, ⑬ 5-7	
1927.6-7	フレスノ	○	×	㉕ 9-2, ㉖ 14-7, ㉗ 1-7, ⑩ 9-11	② 4-16, ③ 7-2, ⑤ 2-9	
1927.7	九州帝大	—	○		⑪ 6-1	
1927.7	法大	×	△	⑮ 2-3, ㉒ 1-7, ㉓ 6-1	⑱ 4-7, ⑲ 5-4	
1927.7	関学	○	—	㉔ 2-3, ㉕ 6-2, ㉖ 10-7		
1927.8	慶大	×	×	⑥ 2-6, ⑦ 2-5	⑱ 4-7, ⑲ 3-4	浜崎 M
1927.8	宝塚運動協会	○	○	㉑ 2-4, ㉒ 4-3, ㉓ 5-4	㉔ 9-5, ㉕ 1-0	尾崎、野原 B、山口 M
1927.9	平壤鉄道	—	△		⑪ 9-9	吉田 M
1928.6	松山高商	×	○	㉘ 5-6	㉙ 6-2	梶下 B、藤枝 M、古味 M
1928.7	九州帝大	×	×	⑦ 0-17	⑥ 2-4	
1928.7	南カリフォルニア大	○	○	⑪ 4-2, ⑯ 5-2	⑩ 7-5, ⑭ 1-3, ⑰ 7-6	
1928.7	宝塚運動協会	△	○	⑳ 3-4, ㉓ 5-2	㉔ 9-4, ㉕ 2-0	尾崎、野原 B
1928.7-8	立大	○	×	⑰ 4-0, ⑱ 8-1	㉑ 7-0, ① 5-6, ③ 3-6	
1928.8	横浜高商	○	○	㉔ 1-3, ㉕ 8-7, ㉖ 6-0	⑦ 6-5, ⑧ 5-6, ⑪ 7-0	杉谷 M、中島 B
1928.8-9	同志社大	×	△	⑳ 3-14, ② 2-5	㉑ 4-0, ① 4-5	副島 B
1929.6	明大 (留守軍)	×	○	㉒ 5-6, ㉓ 2-3	㉔ 6-5, ㉕ 3-2	大沢監督 B
1929.6-7	國學院大	○	○	⑳ 15-4, ③ 1-3, ⑤ 5-3	㉑ 4-2, ② 5-3	
1929.7	宝塚運動協会	○	○	⑩ 3-6, ⑫ 4-1, ⑮ 1-0	⑨ 4-3, ⑬ 2-3, ⑩ 8-3	尾崎、野原 B、山口 M
1929.7	関大	○	○	㉓ 3-1, ㉔ 4-1	⑲ 2-1, ⑳ 16-2	
1929.8	早大	×	○	⑫ 1-12, ⑬ 2-7	⑰ 4-5, ⑱ 13-3, ⑲ 9-8	水原
1929.8	松山高商	△	△	㉒ 4-2, ㉓ 0-3	㉕ 5-6, ㉖ 1-0	古味 M
1929.8	神戸商大	×	○	㉗ 2-5	㉘ 4-3	
1929.8-9	横浜高商	○	×	㉑ 6-2, ㉒ 9-3	① 5-7	杉谷 M、中島 B、藤川 M
1930.7	八幡製鉄	○	○	⑤ 3-4, ⑥ 8-4, ⑦ 2-1	⑩ 2-1, ⑪ 5-4	
1930.7	法大	○	○	⑫ 3-8, ⑬ 7-6, ⑭ 4-4, ㉑ 3-1	⑰ 8-1, ⑱ 1-1, ⑲ 16-5	
1930.7	慶大	×	×	㉒ 2-3, ㉓ 3-11	㉔ 1-11, ㉕ 1-9	山下 M
1930.8	名古屋高商	○	△	㉔ 3-0, ㉕ 4-4, ㉖ 4-3	㉘ 4-0, ㉙ 1-3	
1930.8-9	長崎高商	△	○	㉑ 3-3	② 5-1, ③ 8-3	鯨島 M
1930.9	龍山鉄道	△	○	⑧ 3-3	⑤ 3-0, ⑥ 3-2	
1931.6-7	アラメダ	×	○	㉒ 6-10, ㉓ 2-5, ② 9-11	㉔ 0-2, ㉕ 9-6, ③ 1-0	
1931.7	日大	○	×	⑱ 2-1, ⑳ 4-1, ㉑ 3-5	⑪ 1-2, ⑬ 3-5, ⑭ 10-0	大沢監督 B
1931.8	明大 (予科)	○	—	⑩ 7-3, ⑪ 0-4, ⑫ 4-0		
1931.8	東京帝大	○	×	⑮ 8-0, ⑯ 8-3, ⑰ 3-2	⑲ 2-3, ⑳ 3-5	
1931.8	台北交通団	△	○	㉑ 12-3, ㉒ 3-4	㉔ 12-5, ㉕ 6-3	
1931.8	松山高商	△	○	㉕ 4-3, ㉖ 0-5	㉗ 5-0, ㉘ 5-0	小松 M
1931.9	横浜高商	○	×	⑤ 2-1, ⑧ 3-3, ⑪ 2-2	④ 2-3, ⑦ 4-5, ⑩ 5-4	荒木 M、藤川 M

丸数字は日にち

B 実業、M 満俱

○勝ち越し、△引き分け、×負け越し

野球の満鮮遠征が盛んになった原因は主に2つある。1つは満鮮野球界の実力の向上で、もう1つは満鮮ツーリズムの隆盛である。

まず第1の点について見ておこう。満俱の中沢不二雄は1924年に約10年前の学生時代について、「我が明治大学の選手時代大正元年より五年に至る間内地の球界では『満鮮遠征も好いが遊覧が主になる虞あり却て技術が荒くなるといけなから遠征は中止して夏練習を励もう』と言ふ様な見解にあつた」と回想している¹⁶²。当時は、満鮮遠征をしても技術面であまりメリットがないと考えられていたのである。満鮮野球界に対するこのようなイメージは、岸一郎が満俱に加わり、内地チームを次々と倒したことで大きく変わる。大連の実業、満俱に勝つことが内地の一流チームの目標になった。

満鮮遠征をするチームのほとんどは、大連から奉天、長春、撫順を回って朝鮮に入るか、逆コースをとって大連にやってくる。遠征チームが上記以外の都市にあまり立ち寄らなかったのは、時間や経費の問題以上に、それらの都市には対戦するに値するチームが存在しなかったからである。

第2話で見たように、Aクラスの下、Bクラスの上に位置する安東は、遠征チームとの試合という面でも微妙な立場にあった。安東は満洲から朝鮮、あるいは朝鮮から満洲に行くさいに必ず通る場所であった。旅行者は安東で出入国の審査を受け、時計の調整をする（満洲は日本より1時間遅い）。しかし、同地に滞在して試合をするチームは少なかった。1919年に慶大は安東と対戦したが、5回で16対0という大差がついた。1922年に大毎が来たさいには、「安東球界の振はざる為め試合に非ず単にコーチのみを受ける」予定だったが¹⁶³、結局試合が行われ、1対15と無残な敗北を喫した。1923年5月、天勝は18対2で安東を下した。1925年には安東満俱、安東実業が宝塚運動協会と対戦し、それぞれ0対14、2対10で惨敗している。しかし、1925年に創設された安東満俱が折田有信監督のもとで力をつけ、後援会も組織されると、安東で試合をするチームも増えた。1928年には松山高商、九州帝大、宝塚運動協会、立大、同志社大、京城鉄道が安東満俱と対戦、松山高商を除いて全敗だったが、接戦も多かった。

¹⁶² 中沢不二雄「十三年度に於ける満洲の野球界を顧みて将来に及ぶ」『満日』1925年1月1日。

¹⁶³ 「大毎軍来襲」『大連新聞』1922年9月10日。

旅順は多くの遠征チームが観光に訪れたが、試合をすることはあまりなかった。1931年に旅順に新野球団が結成されると、「外来チームでも大に歓迎出来る事で実現するに至ると旅順も愈々本格的の仲間入りが出来る」とその将来が期待された¹⁶⁴。外来チームを招くことは、そのチームのみならず、その都市のステータスにも関わることであった。強いチームを持つには、それなりの人脈と資金が必要だったからである。

第2の満鮮ツーリズムの隆盛についても少し触れておこう。1910年代を通して、日本と大陸を結ぶ船舶ネットワークが形成され、植民地を扱った旅行案内書が次々と刊行され、旅行会社が事業を拡大していった¹⁶⁵。こうしてもたらされた満鮮ツーリズムの隆盛の一側面が野球界の満鮮遠征であり、各種の視察団であった。視察団の数は、1926年で254団体、9200名、1928年で251団体、10670名となっており、年々増加傾向にあった¹⁶⁶。野球の場合は実満両チームが対応できる範囲に限られたが、スポーツ界全体を眺めれば、とりわけ1920年代後半以降、より多様なスポーツの遠征がますます頻繁に行われるようになっていた。

第5話 野球V（中等学校）

満洲で最初の中学校、関東都督府中学校（1918年に旅順中学校、1924年に旅順第一中学校と改称）が開校したのは1909年5月だが、中等教育機関はそれ以前から存在していた¹⁶⁷。1907年9月に設立された見習夜学校である（1921年に見習学校、1924年に育成学校となり全日制に移行）。この学校は満鉄の従業員を養成することが目的で、学

¹⁶⁴「旅順に新野球団」『満日』1931年7月11日。

¹⁶⁵米家泰作「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究：鮮満旅行記にみるツーリズム空間」『京都大学文学部研究紀要』53号、2014年；荒山正彦「『旅程と費用概算』（1920～1940年）にみるツーリズム空間：樺太・台湾・朝鮮・満洲への旅程」『関西学院大学先端社会研究所紀要』8号、2012年。

¹⁶⁶「満洲の春を訪ねて渡来する視察団」『満日』1927年3月8日；「昨年に比べて千百余名植えた」『満日』1928年12月6日。

¹⁶⁷拙稿「満洲・台湾と甲子園」白川哲夫・谷川穰編『「甲子園」の眺め方：歴史としての高校野球』小ざ子社、2018年で満洲と台湾の中等野球について論じた。ここでは、前稿で掲載できなかった図表を用い、かつできるだけ異なる資料を用いて満洲国建国以前の状況を紹介する。前稿も合わせて参照されたい。

生は昼間は満鉄で働き、夜間に授業を受けた。4年制で、全員が白亜寮に寄宿した。1908年春に若葉会という名の校友会を組織し、教師の平野正朝の指導のもとで野球を始めた。若葉会のメンバーのなかには、広津馨のように満俱の選手として活動するものもいた¹⁶⁸。

中等教育機関ではないが、旅順工科学堂では1910年6月に開校して2カ月後に靈陽会(校友会)が誕生した。靈陽会には球戯部(1916年に野球部と庭球部に分かれる)が設けられ、9月に若葉会と試合をしている。若葉会との第1回戦に敗れはしたものの、翌年の2回の対戦ではいずれも勝利を収めている¹⁶⁹。初代主将岡雄一郎(のち満鉄理事)は、1913年に卒業後、撫順の野球部で活躍を続けた。

満洲で最初に創設された官立学校、関東都督府中学校の初代校長勝浦鞆雄は、前任地の東京府立一中で野球の対外試合を禁止していた(勝浦の後任、川田正徹は1911年の『東京朝日新聞』による野球害毒キャンペーンに野球反対派の校長として登場する)。勝浦は関東都督府中学校でも野球の対外試合を禁止したといわれるが、1912年10月に関東都督府中学校チームが旅順第一、第二小学校職員チームと野球をした記録がある。しかし、その後は校内のみの活動となり、正式に野球部が設立するのは、1919年7月に伊藤正美教諭が赴任してからのことである。

南満洲工業学校は1912年の開校と同時に野球部が設置された¹⁷⁰。1914年7月に満鉄従事員養成所と対戦したのが最も古い記録である。翌年には満鉄本社を21対4で打ち負かし、さっそく大連の有力チームの仲間入りをした。

1910年創設の大連商業学校は、1916年の第1回関東州野球大会後に野球部が本格的活動を開始¹⁷¹、1916年7月8日の沙河口工場戦が初の対外試合となった(1対17で大敗)。翌年の関東州野球大会に出場した大連商業は初戦で埠頭と激突、川上武治投手が力投するも、2対3とあと一步及ばなかった。埠頭がこの大会で準優勝したことを考えると、

¹⁶⁸ 石井一男「満鉄育成学校抄史」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』6-7頁；同「野球部始末記」同138頁。

¹⁶⁹ 旅順工科大学興亜寮編『興亜寮史』旅順工科大学興亜寮、1940年、35-36、38、48頁。

¹⁷⁰ 南満洲工業専門学校編『創立三十年誌 満鉄南満洲工業専門学校』南満洲工業専門学校、1942年、216頁。

¹⁷¹ 「野球叢談」『満日』1916年7月4日に「新に組織されたものには青年会館と商業学校がある」と記す。

大いに健闘したといえよう。

大連商業は1919年7、8月に天津、北京遠征を実施した。この遠征は天津の日本体育会の招聘により実現したもので、オール天津軍と3回戦が予定されていた。初戦は13対0で商業が圧勝、スタンドからは入場料を返せとの声が飛んだ（大連ではまだ野球に入場料を取っていなかった（第8話参照））。翌日の第2回戦の直前、増田洋行の社員がやってきて、今日は勝ちを譲っていただきたいと懇願した。宮脇賢介教諭は「一行は学生ですからそんな商売人の様な駆引が出来ない」と婉曲に断ったものの、天津軍を怒らせたということで士気はあがらず、1対7で敗れた。第3回戦には芸妓が天津軍の応援に来て、「我が純粹無垢なる少年共をして頗る颯爽せしめた」。結果は1対2で商業が敗れた。帰連後、『満日』は「天津軍は二十人ばかりの芸妓を肌着腰巻き一貫にして応援大に努めしの天晴れ古今珍無類の新応援振りを發揮させ醜態を極めた」「高潔にしてそこに一点の邪念の入るを許さぬ運動精神から見れば妥協して態と敗けるなどは断じて避けたい、殊に学校チームとしての権威の上からしてもかくあつて欲しい」と商業を批判した。この記事に激怒したのが天津側で、事実無根だと大連商業と『満日』を激しく非難した。翌月、宮脇教諭の反論が『満日』に掲載され、天津側の非を訴えた¹⁷²。

大連商業は大連実業団にコーチを受け、南満工業は満俱にコーチを受けていた。この両チームが初めて対戦したのは1917年10月である。実満戦が中断していた時期で、この試合は「第二実業満俱戦」とみなされ、注目を集めた¹⁷³。両校とも全生徒が応援に駆けつけた。結果は7対2で商業が大勝、敗れた工業は応援団に囲まれ涙を流しながらグラウンドを後にした。翌年6月、南満工業は大連商業に試合を申し込むが実現しなかった。前回の試合での応援に原因があったらしい。1919年2月、『満日』記者は両校の試合が「満実の試合に次ぎ天下のフワンを熱狂せしむる」もので、満洲野球界向上のために対校試合の実現に尽力したいと述べている¹⁷⁴。1920年4月になって、遼東新報社の長沢千代造の斡旋で両チームの対戦が実現を見た。7月15日の第1回戦は1

¹⁷²「野球無駄話」『満日』1919年8月27日；「憂ふべき野球界の不祥事（一）、（二）」『満日』1919年9月23-24日。

¹⁷³「野球掉尾戦」『満日』1917年10月27日。

¹⁷⁴「来れり、野球季」『満日』1919年2月25日。

対0で大連商業に軍配が上がった。

1920年まで満洲では学校同士の野球試合はあまり見られなかった。たまたま関東州野球大会で学校チーム同士が対戦すると、双方の応援団が繰り出して、大いに盛り上がった。南満工業主将の前田栄三郎捕手は、3年間の野球生活で一番愉快だったのは1919年の関東州野球大会で旅順中学に快勝したあと大連実業団を11対12まで追い詰めたこと（実業はこの大会で優勝した）、1920年の関東州中等学校野球大会（後述）に旅順中学を破って優勝したことを挙げ、残念で悲痛に耐えなかったこととして、大連商業に対する3連敗を挙げている。ことに第3回戦では病み上がりの川上投手が1回を投げただけでマウンドを降り、チャンスだったにもかかわらず、どうしても勝たねばならないという気持ちがかえってプレッシャーとなってしまったという¹⁷⁵。一方、川上投手は、尋常小学校から8年間の野球生活で一番残念だったのが1919年の関東州野球大会で旅順工科学堂に3対9で敗れたこと、逆に嬉しかったのが1920年7月に南満工業との対戦で勝ったことだと述べている¹⁷⁶。学校チームがいかに他の学校チームをライバル視していたかが窺える。遼東新報社が中等野球の対抗戦に関心を抱いたのも、このような学校チーム同士の対抗意識をよく認識していたからだろう。

1920年夏、旅順工科学堂が関東州中等学校野球大会の開催を決定した。「関東州野球大会と共に球界の権威たらしめ学生の運動精神を涵養する」ことがその目的であった¹⁷⁷。旅順中学、南満工業、若葉会、大連商業が参加を表明し、10月10、24、31日に試合が挙行される予定だった。ところが、大連商業は24日の南満工業との試合を直前になって棄権した。その経緯は必ずしも明らかではないが、遼東新報社が後援していた大連商業と南満工業の対校試合が関係するようである。主催者である旅順工科学堂の説明によれば、大会前に各チーム主将と新聞社（満日社と遼東新報社に呼びかけたが、満日社しか参加せず）が参加した会議で、大連商業と南満工業の対校試合との関係が問題になったが、これは今回の大会とは関係がないことを確認し、遼東新報社も後日、

¹⁷⁵工業学校主将前田捕手談「実業団を苦しめたる、商業学校に敗れたる」『満日』1920年12月19日。

¹⁷⁶大連商業学校川上投手談「靈陽団に惨敗した事、南満工業に再勝したる」『満日』1920年11月28日。

¹⁷⁷「関東州内中等学校野球大会」『満日』1920年9月6日。

関東州中等学校野球大会と重複することから対校試合を中止すると発表した。19日になって、南満工業の代表がやって来て、試合を大連でやらせてほしいと頼み込んだ。主催者は、前述の会議のさいに旅順開催は確認済みであることを述べて、この要請を断った。南満工業は承諾したが、大連商業はあれこれ理由をつけて反対したため、棄権してもらうことになった。大連商業のエース川上が急病で出場不能となったという説もあり、エース不在で負けるのが嫌で大連商業がごねたのかもしれない¹⁷⁸。不戦勝となった南満工業は、決勝戦で旅順中学を破り、優勝した。その1週間後、遼東新報社後援の大連商業と南満工業の第2回戦が開かれ、5対4で大連商業が勝った。関東州中等学校野球大会の優勝校がわずか1週間後に敗れたのだから、大会の権威は台無しである。

1921年7月、遼東新報社主催、旅順工科学堂後援の第7回全国中等学校優勝野球大会満洲地区予選大会が開催された（朝鮮でもこの年初めて地区予選が実施された）。遼東新報社と旅順工科学堂は前年秋に気まづい関係になっていたが、中等野球に深く関わってきた両者の協力なしに満洲予選は開催できなかった。主催者の大阪朝日新聞社からどのような形で予選開催の要請があったかはわからないが、満日社と大連新聞社が満洲予選を熱心に報道しなかったことから、両社が快く思っていなかったことは間違いない（『遼東新報』は大々的に報道しただろうが、この時期の『遼東新報』は残っていない）。

第1回満洲予選の参加校は大連商業、南満工業、旅順中学のわずか3校である。内地の地区予選には平均13.8校が参加していたから、これはかなり少ない。この時点で満洲の中等学校には上記3校のほか、大連中学、奉天中学（1919年設立）、長春商業（1920年設立）があった。このうち、大連中学は野球の対外試合を禁止しており、奉天中学と長春商業は創設してなお日が浅く、予選に出場するのはそれぞれ1924、26年のことである。このほか、満鉄若葉会があったが、現役だけではチームが編成できなかった（若葉会が中等学校とみなせるかどうかについては議論があった）。したがって、満洲の当

¹⁷⁸「大連商業校棄権」『満日』1920年10月24日；旅順工科学堂野球部内中村匡彦「宮脇氏の棄権理由を読みて」『満日』1920年11月14日。

時の状況からすれば、3校は「多かった」と評価できる¹⁷⁹。

まず南満工業と旅順中学が対戦した。昨秋の関東州中等学校野球大会決勝戦と同一カードだが、今回は旅順中学が勝った。大連商業も南満工業に大勝し、旅順中学との3回戦で優勝を決めることになった。旅順中学は5月に開催された関東州野球大会で準優勝しており、児玉政雄投手を中心に高い戦力を誇っていた。対する大連商業は川上武治が卒業したものの、9人の先発選手のうち5人が将来の実満選手（今居利策、内藤統、酒井貞雄、川井田一久は実業、宗正要は満俱）である。投手力で旅順中学、総合力で大連商業が優っていた。1回戦は旅順中学が延長戦を制し、2回戦は大連商業が大勝した。3回戦は井上金次郎と児玉政雄による投手戦となり、1対0で大連商業が辛勝し、鳴尾球場への切符を手にした。

大連商業一行は大阪の宿舎に着くや、「引率者幹部は藻抜きの殺、悪童どもは繁華街へ飛び出した」。もちろん、昼の活動も充実していた。初出場の大連商業は龍ヶ崎中学、岡山一中を破り準決勝に進んだのだ。準決勝ではエース竹内愛一を擁する京都一商が14対4で大連商業に大勝したが¹⁸⁰、代償は大きかった。竹内がクロスプレーで足首を痛め、降板を余儀なくされたのである。続く決勝も竹内は登板できず、和歌山中学に大敗した。

大連商業の戦い振りについて、朝日新聞社の植村陸郎は「殖民地チームでは大連商業が強くもあるし、凡てに於て優れて居た。選手許りでなく、応援団の態度なども頗る見上げたものであつた」と高い評価を与えている¹⁸¹。大連商業はチーム打率0.239(全参加校中5位)、守備率0.915(同5位)と投打のバランスが取れたチームで、とくに守備率はベスト4に残ったチームのなかで最も良かった。

京都一商は大連と浅からぬ縁を有する。1917年に満俱の猪子一到主将が選手をリクルートするため地元京都に戻り、京都一商の和田正三と尾家文郎のバッテリーを大連

¹⁷⁹ 人口当たりの出場校を考えてみても同じことが言える。満洲の内地人人口は18.5万人だから、6万1667人当たり1校が参加した計算になる。内地は平均で27万353人当たり1校の参加である。

¹⁸⁰ 灘谷寿一「老朋友再見（大商野球部回想談）」『大商：大連商業学校同総会会報』43、44号、1986年11、12月。

¹⁸¹ 植村陸郎「大会所感」『運動界』2巻10号、1921年10月。

に連れてきた。二人は満俱選手として活躍したが、和田は1919年に亡くなり、尾家は同年に同志社大学に進んだ。尾家は1921年夏の全国中等学校優勝野球大会に京都一商監督として参加、準決勝で大連商業を打ち負かした。同年秋、京都一商は尾家文郎と人見忍の引率で来連した。内地の中等学校による最初の満洲遠征である。竹内は依然傷が癒えず、マウンドに立つことができなかった。社会人チームとの対戦には、人見止戈三（人見忍の兄）、森田康太郎、沖利一ら満俱で活躍する京都一商OBが加勢した。中等学校とは旅順中学との対戦が唯一のもので、3対0で京都一商が勝った。旅順中学エースの児玉政雄はのちに早大に進学、竹内の後輩となる。早大では竹内の影に隠れて出番がほとんどなかった児玉だが、帰連後は大連満俱のエースとして第1回都市対抗野球優勝の立役者となる。

第1回満洲予選で大連商業と覇を競った旅順中学だが、1922年度は主力選手が卒業して大幅に戦力ダウンした。折田有信（三高初代校長折田彦市の子、もと三高投手）のコーチのもと猛練習を積んだが決勝に進めなかった。大連商業と南満工業の決勝戦は3対1で南満工業リードのまま9回裏を迎えた。大連商業は1点を入れ、なお三塁に走者を置いていた。センターフライの間に三塁走者が本塁を衝いたが、折田審判はアウトを宣告した。この判定は波紋を呼ぶ。ある市民は投書で大連商業の山崎校長が「未だに不平満々」だったことに対して、「元来野球試合は何がために挙行するのか根本の使命を忘却し審判の言に服せず野次に助長され徒に生徒をして試合終了後三時間もグラウンドにて反抗的示威運動を為さしめ学生にあるまじき行動を取つた事は満洲運動界の一大事」だと非難した。伊勢町の谷崎写真店には、このクロスプレーの写真が飾られていた。大連商業ファンの市民は「折田氏はその写真を見られしか、あれが誤審にあらざるか」「折田氏を満洲の野球界より葬れ否日本の野球界より葬れ」と折田を責めた¹⁸²。そもそも折田は全国中等学校優勝野球大会を構想した人物の一人であり、その第1回大会の審判をつとめるなど、斯界の権威者といってもよい存在だが、大連商業ファンは容赦しなかった。満鉄社員の折田が満俱系の南満工業に肩入れし、実業系の大連商業の優勝を阻んだと受け取られた可能性もあろう。

この試合を応援席から見ていた大連商業の辻駿太郎は、1940年代に折田のもとで働

¹⁸²「商業対工業野球戦紛議」『大連新聞』1922年7月5日。

いていた。あるとき折田が「辻君、君はわしを怨みに思うとるじゃろう」と話しかけた。辻がきょとんとしていると、「あれはアウトじゃよ」と付け加えた。辻は「もう遠く過ぎ去ったことです」と答えたが、折田自身にとっても後味の悪い試合だったに違いない¹⁸³。辻と同期の難波仁は、1988年に発表された辻の文章を読み、反論を書いた。谷崎写真店の写真は決定的な証拠で、その後主催者と実満選手が協議を重ねたが、誰もアウトかセーフかを明言しなかった。「その発言をした人は刺されるから、誰も敢えてその愚を犯さなかった」からである。難波は、折田が辻に「あれはアウトじゃよ」と語ったのを知り、「矢張りあの判定はセーフ」が本当だと思った。そして「折田さんを気の毒な人だったのではなかったかと思う様になった」と記す¹⁸⁴。

時計の針をもとに戻そう。ファンならともかく、校長までが反対運動に関わったとなれば、やはり問題である。7月末には大連商業OBらが「山崎現校長着任以来校紀は益頹廢して教育問題は吾不関焉〔われかんせずえん〕にて只体育の一部たる野球にのみ没頭し此の神聖なる体育野球の精神をも没却し過般中等学校リーグ戦にて其の醜たるを發揮して社会に於ても教育者たらざるを深く思はしめ非難の声は將に絶頂に達せんとしつつあり」として、山崎校長排斥運動に乗り出した¹⁸⁵。山崎の着任は1918年7月だが、翌年には天津遠征、さらに1920年には関東州中等学校野球大会で、野球部は世間を騒がせていた。OBが立ち上がる程だから、よほど大連社会に好くない印象を与えていたと思われる。後述するように、大連の他の中学は野球の対外試合を頑なに拒んだが、その一因はここにあるかもしれない。ただ、大連商業の甲子園での活躍は、このようなイメージを大きく改善したであろう。

1923年、第3回満洲予選の直前に広陵中学が遠征してきた。この遠征は広陵中学OBで満鉄の松富保明が無賃パスを提供したことから実現した¹⁸⁶。広陵中学は南満工業に敗れ、大連商業に勝った。遠征後の地区予選で広陵中学は優勝、全国中等学校優勝

¹⁸³ 辻駿太郎「中等野球満洲予選にまつわる思い出」『大商：大連商業学校同総会会報』48号、1988年4月。

¹⁸⁴ 難波仁「中等野球満洲予選にまつわる思い出補足」『大商：大連商業学校同総会会報』50号、1988年11月。

¹⁸⁵ 「大連商業の暗雲」『大連新聞』1922年7月28日。

¹⁸⁶ 西本恵『日本野球をつくった男』33頁。

野球大会への初出場を果たしたが、2回戦の和歌山中学戦で大敗した（和歌山中学は準優勝で三連覇を逃す）。満洲予選のほうは、大連商業、南満工業、奉天中学が参加し、大連商業が優勝した¹⁸⁷。本大会で大連商業は朝鮮人チーム徽文高等普通学校と対戦、4対9で敗れた。徽文の監督は朴錫胤だった。朴は1917年に折田と内村祐之が投げ合った一高三高戦で三高の右翼を守っていた選手である。このとき内村は敗戦投手になったが、翌年は三高に大勝、さらに早慶を完封して、意気揚々と満洲遠征に出かけたのだった（第4話参照）。

第4回満洲予選（1924年）は大連商業、南満工業、奉天中学が参加（長春商業は棄権）、大連商業が難なく優勝して、本大会に出場した（今回より甲子園球場で開催）。愛知一中、市岡中学を破り、準決勝で広島商業と対戦した。相手の監督は、前年まで大連商業の選手も指導を受けていた石本秀一だった¹⁸⁸。6対6で延長戦にもつれ込み、12回裏にサヨナラ負けした（広島商業は優勝）。この年、大連商業は新たに創設された明治神宮競技大会にも参加、強豪和歌山中学を下したものの、松本商業に逆転負けした。

第5回満洲予選（1925年）は、南満工業が専門学校に昇格したため参加できず、奉天中学は実力不足、長春商業は学期試験と重なるとの理由で不参加となり、予選を開催できないという異常事態になった。遼東新報社は大連商業を推薦、同校は予選なしで本大会に出場した。今回も準決勝に進出するが、宮武三郎投手を擁する高松商業に大敗した。高松商業は決勝で早稲田実業を破り優勝する。このため、甲子園では大連商業に勝ったチームが優勝するという噂が生まれた。

第6回満洲予選（1926年）は、長春商業、青島中学が初参加、長春商業を破った青島中学と大連商業の間で決勝戦が行われ、大連商業が勝った。円城寺満と桜井修のバッテリーを擁する大連商業は本大会で浪華商業、敦賀商業、京城中学、和歌山中学を撃破、静岡中学との決勝に臨んだ。同点で迎えた9回表に1点を取られて惜敗したが、準優勝を果たして凱旋した大連商業を市民は熱烈に歓迎した。しかし、野球部育ての親だった山崎校長はすでにこの年6月に校長を引退していた。

¹⁸⁷ 朴錫胤については、小野容照『帝国日本と朝鮮野球』、高嶋航・金誠編『帝国日本と越境するアスリート』を参照。

¹⁸⁸ 西本恵『日本野球をつくった男』28頁。

その後も、第9回満洲予選（1929年）を除いて、大連商業が満洲代表として参加を続けるが、本大会では苦戦を強いられ、1930年の台北一中戦で挙げた勝利が結果的に満洲勢による最後の勝利となった。

大連商業を破って第9回満洲予選を制したのは青島中学（青島日本中学校）である。1917年に創設された青島中学では、ほどなくして野球部が結成され、1926年に初めて満洲予選に参加した。満洲予選優勝の原動力となったのは小平美国投手である。河野安通志が「将来恐る可き投手」と折り紙をつけ、宝塚運動協会入りすると噂された¹⁸⁹。しかし、本大会では市岡中学に0対11と大敗を喫した。

1920年代後半の満洲勢の不振に対して、満洲の中等野球関係者は手をこまねいていたわけではない。1928年10月には奉天の満洲医大が州外中等学校野球リーグ戦を開催した（奉天中学、安東中学、撫順中学が参加し、奉天中学が優勝）。おそらくこの大会が刺激となり、安東中学と撫順中学が翌年の満洲予選に初めて参加する。1930年6月には国境中等学校野球連盟主催、大阪朝日新聞社安東通信部後援で第1回国境中等学校野球大会が開かれた（新義州中学、新義州商業、新義州高普、安東中学が参加、安東中学が優勝）。1930年9月には内地から松山商業と柳井中学が来連し、大連商業も加わって、「内満選抜中等学校野球大会」が開かれた（平安中学も参加予定だったが、来連できなくなった）。内地の中等学校を招聘する計画は数年前からあったとのことで、満洲中等学校野球界のレベルアップを図るべく実施されたのだろう。

こうした取り組みに水を差したのが1931年7月に奉天で開かれた全国体育主事会議であった。満洲予選開幕を間近に控えて開かれたこの会議では、中等学校の運動競技に関する諸問題が話し合われ、新聞社や雑誌社が主催する競技会への選手の出場を止めるよう全国に通達することを文部省に求めた¹⁹⁰。

ところで、1931年の時点で満洲には予選に参加していない中学校が5校あった。旅順中学、大連一中、大連二中、長春商業、鞍山中学である。このうち旅順中学と長春商業はそれぞれ2回参加したことがある。旅順中学は1923年に児玉政雄ら主力がごっそり抜けて、いったん解散した。まもなく新チームが結成され、翌年から全旅順野球

¹⁸⁹「満洲予選参加チーム物語」『満日』1929年7月18日。

¹⁹⁰「中等校野球満洲予選会（上）」『満日』1931年7月24日。

大会に参加した。初陣の旅順中学は要港部修理工場、重砲大隊を破るが、関東庁に大敗した。重砲大隊戦では、藤井専随校長が応援に駆けつけているから¹⁹¹、藤井校長は野球に否定的ではなかったはずである(実際、のち愛知一中校長のときは対校試合OKだった)。にもかかわらず、対校試合の禁止を解除しなかったのは、関東州内の官立学校校長の間で、野球の対校試合禁止が申し合わされていたからである。それを主導したと思われるのが大連一中の服部精四郎である。

服部は創設から10年以上同校の校長をつとめ、各種スポーツを奨励したが、野球だけは禁止していた。のちに校内での野球は解禁したが、対校試合は許さなかった。服部校長のもとで長らく教頭をつとめ、大連二中の創設にともない同校の初代校長に就任した丸山英一も、やはり野球の対校試合を禁止した。

長春商業は1926、27年に参加したが、経費がネックとなり、その後の参加を取りやめた。鞍山中学は創設から10年間校長をつとめた矢沢邦彦が野球嫌いで、野球部の設置を認めなかった。

校長が野球を禁止した(少なくとも表向きの)理由は経費である。たとえば服部校長は「野球部一つの予算で、他の運動部全部を賄える程なので、思い切って創設を認めなかった」と述べている¹⁹²。表5-1は青島中学、奉天中学、旅順中学の運動部費の一覧である(蹴球のうち*がついているのはラグビー)。1934年度の青島中学の場合、各運動部の所属人数が判明するので、1人当たりの部費も算出してみた。野球部が対校試合を実施していた青島中学と奉天中学は野球部費が多いが、ほぼ校内活動に限定されていた旅順中学はさほど多くない。予選に参加しようとする、一度試合に出れば済むというのではなく、何度も練習試合を行い、ときには遠征にも出なければならない。となると、途端に経費がかかることになる。1934年の青島中学の例から窺えるように、1人当たりの部費を見ても野球部の多さが目立つ。

表5-2は運動部費に占める野球部費の割合を示している。その割合が最も高いのは青島中学で、1922年度に36.4%、1934年度に44.5%となっており、野球部費が他の運動部費の合計よりも多いという服部校長の言葉は、決して根拠がなかったわけではな

¹⁹¹「全旅順野球」『大連新聞』1924年6月13日。

¹⁹² 富田龍彦「大連一中の思い出」昭久会編『昭久会 会報』43号、1994年。

表 5-1 中学校の運動部費

青島中学					奉天中学			旅順中学			
1922 年		1934 年			1928 年			1932 年		1933 年	
野球部	901.04	野球部	943.25	17	55.5	競技部	519.7	蹴球部*	336.35	蹴球部*	524.14
短艇部	381.77	蹴球部	258.56	8	32.3	野球部	430.5	庭球部	293.34	庭球部	265.44
庭球部	352.21	競技部	229.8	13	17.7	蹴球部*	417	マラソン部	230.17	競技部	244.41
武道部	272.14	庭球部	187.35	39	4.8	スケート部	384.75	競技部	157.89	マラソン部	180.32
徒歩部	186.07	排籃球部	171.8	14	12.3	庭球部	322.5	バスケット部	149.25	バスケット部	173.8
弓術部	135	水泳部	105.48	24	4.4	剣道部	254	野球部	123.1	剣道部	135.85
水泳部	128.76	弓道部	102.5	11	9.3	柔道部	229	剣道部	113.95	柔道部	119.47
蹴球部	115.92	柔道部	49.98	17	2.9	水泳部	200	柔道部	100.04	水泳部	65.93
		卓球部	48	48	1	バスケット部	93.7	排球部	97.32	排球部	57.44
		剣道部	20.81	30	0.7	卓球部	83.2	水泳部	70.74	氷上部	33.2
				所属人数	一人平均(円)			弓術部	68.77	相撲部	21.4
								氷上部	34.26		
								相撲部	11.45		

*はラグビー

表 5-2 運動部費に占める野球部費の割合

学校名	年度	校友会 費総額 (円)	体育関 係費 (円)	運動 部費 (円)	野球 部費 (円)	運動部 費平均 (円)	運動 部数	運動部費に 占める野球 部費の割合 (%)	出典
青島中学	1922	3993.86	2472.91	2472.91	901.04	309.11	8	36.4	『青島日本中学校校史』77 頁
奉天中学	1928	3815.35	2934.35	2934.35	430.05	293.44	10	14.7	『楡の蔭』8号、353-354 頁
旅順中学	1932	2547.04	1902.64	1786.63	123.1	137.43	13	6.9	『桜桂会誌同朋会報』二十五周年記念号、309-310 頁
旅順中学	1933	2728.8	1949.04	1821.4	0	165.58	11	0	同上
青島中学	1934	3941.2	2117.53	2117.53	943.25	211.75	10	44.5	『青島日本中学校校史』77 頁

い。大連商業は 1935 年に長尾宗次校長の命で野球部が解散された。OB らが野球部復活運動を起し、問題は練習場と費用にあるとして、「野球部費年約二千円」の工面に奔走したが、復活はならなかった¹⁹³。大連商業の校友会費の詳細はわからないが、表 5-1 と 5-2 の例と比べると、2000 円というのはかなり高額である。ちなみに、1932 年の内地中等学校校友会に関する文部省の調査によれば、野球部の平均部費は男子中等学校で 489 円、実業学校で 446 円だった¹⁹⁴。

ただ、経費はあくまで表向きの理由だと思われる。野球部復活運動が失敗に終わっ

¹⁹³「大商野球部の復活期成同盟会」『満日』1935 年 7 月 1 日。

¹⁹⁴ 文部大臣官房体育課『中等学校ニ於ケル校友会運動部ニ関スル調査』一成社、1933 年。

たのは、廃止の原因が「練習場と費用」ではなかったからである。前述した通り、大連商業野球部はいくつか不祥事件を起こしている。校長たちが野球によい印象を抱かなかったのも、ゆえなしとしない。満洲におけるスポーツの中心だった大連、旅順の各学校が野球の対校試合を禁止したことは、満洲の中等野球の発展に決定的な影響を及ぼし、1926年の準優勝を最後に、甲子園での活躍は見られなくなる。社会人野球の隆盛とは対照的に、満洲の中等野球はその後不振から脱することはなかったのである。

第6話 野球 VI (少年野球)

1908年10月に鉄嶺小学校で開かれた運動会の昼食時間中、「ローンテニス、ベースボール、自転車競争」が試みられた¹⁹⁵。満洲における少年野球の最も早い記録と言いたいところだが、昼食時間というから、児童が昼食を摂っている間に大人がしたものであろう。

少年であることが確実な事例としては、1909年10月の若葉会秋季野球大会で大連小学校の生徒が紅白戦を行ったのが最も早い。対校戦の最初の事例は、管見の限り、1913年10月の撫順小学校対遼陽小学校の野球戦であるが、これに先立ち遼陽小学校は大石橋小学校を撃破していたというから、実際にはもっと早くから行われていたのだろう。

1913年といえは軟式野球ボールの登場前である。1914年の天野満書堂（大連）の広告には、野球関係の書籍とともに、青M、赤Mボールが挙げられているので、これを使用したのだろう¹⁹⁶。

1915年10月に遼陽、撫順、大石橋の小学生チームが野球試合を挙行し、いずれも1勝1敗という熱戦を繰り広げた。遼陽小学校のエースは川上武治だった。川上は翌年春に大連商業に入学、華麗なフォームと横手投げから繰り出される伸びる球でライバルの南満工業、旅順中学の打線を封じた。卒業後は大連実業の投手となる。一年志願兵として松江連隊に入隊するが、除隊後にはもはや往年の球威は見られなかった。

¹⁹⁵「小学校秋季運動会」『満日』1908年10月13日。

¹⁹⁶『満日』1914年4月11日。

1925年からは全長春でプレーした。

撫順小学校には前田栄三郎がいた。「大正四年撫順の高等小学校に転校してからと云ふものは好きだったので選手の中に加はつて練習を続け」たが、「小学校時代は大した試合もしませんでした」といっているのが、今回の試合には出ていないかもしれない¹⁹⁷。前田は南満工業に進学、野球部主将をつとめる。

今回の試合に刺激されたのか、長春小学校でも野球チームを組織することとなった。道具を買い揃えたものの、シーズンオフになってしまったので、翌春から活動することになった¹⁹⁸。

1916年6月、満日社主催で関東州野球大会が開かれると、開催地の大連では市内のあちこちでキャッチボールに興じる少年の姿を見かけるようになる。翌月までに浜町に2つの少年野球チームが組織された¹⁹⁹。

1916年10月の小学生徒野球会には遼陽、撫順、大石橋、瓦房店の4小学校が参加した。エース川上を失った遼陽小学校は撫順小学校に1対16と大敗している。翌年、瓦房店小学校と大石橋小学校が対戦し、児玉政雄を擁する瓦房店小学校が大勝した。児玉は1918年に旅順中学に進学、その翌年に旅順中学に野球部ができると、2年生ながらエースをつとめる。1921年の関東州野球大会では社会人や工業学校チームを次々と破って決勝に進出、三井物産を相手に善戦した。この年、全国中等学校優勝野球大会第1回満洲地区予選が開かれるが、優勝がかかる大連商業との試合に0対1で惜敗した。早大では竹内愛一の陰に隠れて活躍できなかったことは先述したが、二人は1926年春にこぞって満鉄入りする。もちろん、エースは竹内である。しかし、竹内は1年で満洲を去り、翌年には児玉が満洲倶楽部のエースをつとめる。この年、東京日日新聞は第1回都市対抗野球を開催、児玉は満洲代表満洲倶楽部のエースとして出場し、優勝投手に輝いた。児玉は1929年の第3回大会にも優勝投手となる。

ところで、児玉の通っていた瓦房店小学校には藤田御都という教師がいた。彼は体操の時間に生徒に野球をやらせた。その後勤めた大連第三小学校でも放課後ほぼ毎日

¹⁹⁷ 工業学校主将前田捕手談「実業団を苦しめたる、商業学校に敗れたる」『満日』1920年12月19日。

¹⁹⁸ 「優勝旗到着」『満日』1915年11月22日。

¹⁹⁹ 「野球叢談」『満日』1916年7月4日。

クラス対抗試合をさせた。いわゆる「野球キチ先生」だった²⁰⁰。1918年に三井物産に入り、大連実業の選手となった。藤田は熊本県師範学校の学生だったころから、野球と庭球の選手として知られていた。このとき同校には東京高等師範学校でテニス選手として活躍した安藤基平が教師として在籍しており、テニスを熱心に指導していた。その安藤も藤田のあとを追うように満洲へやって来る²⁰¹。

野球熱にとらわれたのは日本人の少年だけではなかった。1917年10月に長春で小学校と公学堂（中国人向け初等教育機関）の連合野球試合が行われている。『満日』は「斯る児童の親善は将来大国民としての日支親善に資する所大なれば自今時々挙行すべし」とその将来に大きな期待を寄せた²⁰²。

長春小学校では「大正七八年になると兵隊ゴツコも下火となり野球は正式の道具を揃へ公主嶺と対校試合さへ行つた、その当時は修学旅行に出るといつても必ず野球道具を持参といつた熱心さであつた」という²⁰³。実力も侮りがたいものがあり、地元の実業団チームに3戦3勝、いずれも大差での勝利であった。

1919年、東神ゴムが軟式野球ボールの製造販売を始めた。『運動年鑑』（1920年6月）の山本商店（本店京都、支店大連）の広告には少年野球用護謨球ブランブルボールなるものが掲載されているので、満洲でも1920年には軟式野球ボールが販売されていたと思われる。内地では軟式野球ボールの販売を契機に少年野球が急速に普及し、1920年には大日本少年野球協会が組織され、鳴尾球場で第1回全国少年野球大会が開かれている。

1920年の年末から翌年1月にかけて、満日社は少年野球規則を新聞紙上に連載するとともに、満洲少年野球大会の開催を公表した。「満洲少年野球大会挙行を慶ぶ」という一文を寄せたのは撫順小学校の平岡数馬校長だった。「協同、責任、規律、沈着、機敏、快活、進取等の精神を修養するに最も適して居る」として野球の教育的効用を高く評

²⁰⁰ 灘谷寿一「老朋友再見」。(大商野球部回想談)『大商：大連商業学校同総会会報』43号、1986年11月。

²⁰¹ 拙稿「満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）：すれちがう「親善」」『京都大学文学部研究紀要』57号、2018年3月。

²⁰² 「野球掉尾戦」『満日』1917年10月27日。

²⁰³ 「満鉄附属地卅年史 室町小学校沿革その五」『新京日日新聞』1937年11月28日。

備する平岡は、前任の大石橋小学校、瓦房店小学校でも野球を奨励していた²⁰⁴。1920年秋には自らチームを引率して、安東、本溪湖、遼陽の各小学校と遼陽公学堂と対戦、小学校には勝利したが、公学堂（中国人初等学校）には5対8で敗れている。

平岡のような小学校長はほかにもいた。営口小学校の前田彦祐校長は自校の生徒チームの主将をつとめたし²⁰⁵、遼陽小学校の滝川嘉一郎校長は運動奨励の第一歩として同校の教師でスポンヂ野球団を組織し、スポンヂ野球の宣伝を行った。1年間にボールの経費だけでも200円かかり、これに反対する保護者もいたが、瀧川は「二百円にて六百の児童の体格が異状の発達をなし此の遊戯によつて感受される不撓不屈の精神、共同一致良く相連携し以て大捷を博するの真意を悟らしむる」効果が得られると反駁した²⁰⁶。

満洲少年野球大会には故古郡良介の運動奨励金500円が活用された。これは、元三井物産大連支店長の古郡が1917年に亡くなったさい、遺族から満日社と遼東新報社に大連運動界の向上発展のために使って欲しいと寄附された1000円の一部である²⁰⁷。大会開催に先立ち、大日本少年野球協会名誉幹事の相伴重雄が来連し、講演や実地指導を行った。1921年6月に開かれた第1回満洲少年野球大会には大連のほぼすべての小学校が参加し、紅白に分かれて勝敗を競った。

1922年の第2回大会、尋常組ではトーナメントが採用され、高等組では大連高等小学校と沙河口高等小学校が3回戦で勝敗を決することになった。各小学校では社会人野球チームの名選手をコーチとして招き、猛練習を続けた。10チームが参加し、大連高等小学校と大連第三小学校が6日間にわたる熱戦を制した。

1923年の第3回大会では、コーチの招聘は弊害が多いとして禁止された。9チームが参加し、大連第一小学校が優勝した。1924年6月の第4回大会は、大々的に報道された前回までとは一転して、新聞での扱いが小さくなる。この背景には、競争の過熱を快く思わない学校当局の思惑があったと推測される。翌年、主催者が大連奨学会に

²⁰⁴平岡数馬「満洲少年野球大会挙行を慶ぶ」『満日』1921年1月30日。

²⁰⁵「営口見聞」『大連新聞』1924年6月11日。

²⁰⁶「小学校の運動奨励」『満日』1924年4月27日。

²⁰⁷「運動奨励に金一千元」『満日』1917年3月20日；「運動奨励に香奠返代の一千元」『満日』1917年6月10日；「古郡運動奨励金」『満日』1921年6月15日。

変わると、「極端な競争心を避ける」ため、1回戦のみの実施とすることになった。しかしそれでは「余り張合が無さすぎる」ということで、従来の形式に戻された²⁰⁸。第5回大会に優勝した常盤小学校では、学校の講堂で祝賀会が開かれ、選手たちは学校、保護者会、近所の商店からたくさんの賞品を受け取り、人力車に賞品の山を積んで家路についたという²⁰⁹。

1927年、大連奨学会は従来の少年野球大会に代えて、市内各小学校対抗女子ドッチボールを挙行政した。この措置は批判を受けたらしく、翌年に少年野球大会が復活するが、一回切りに終わった。

1924年を最後に少年野球から手を引いていた満日社は、関東庁当局や学校方面との折衝のすえ、1930年7月に第1回全満少年野球大会を開催した。もともと関東州内と州外で予選を開き、それぞれの優勝校同士で決勝を行う予定だったが、州外予選は実現しなかった。大連市内の小学校6校が参加、優勝した朝日小学校が東京で開催された大日本少年野球大会に出場した。しかし、第2回大会はついに開催されなかった。1931年春に満鉄附属地の小学校で対校競技の可否が問題となったことがその背景にあると思われる²¹⁰。

大連の満洲少年野球大会に相当するイベントは州外でも開かれていた。1922年7月に奉天で開かれた第1回全満少年野球大会がそれである。優勝した奉天高等小学校では、前年4月に赴任した中村止戈男教諭が「徒らになすことなく教室に暴れて過」ごす男子生徒をして「活気あらしめ、頑強なる体軀を造らしむる」ために少年野球団を組織し、毎日練習に明け暮れていた。大会に優勝すると、今度は大阪天王寺公園で開かれた大日本少年野球協会主催、大阪時事新報社後援の第3回全国少年野球大会に満洲代表として出場、2回戦まで進出した²¹¹。

1923年の第2回全満少年野球大会には20チームが参加、決勝戦では奉天中学校と奉天高等小学校が対戦した。0対1とリードされた奉天小学校は9回の裏に野本千代

²⁰⁸『大連新聞』1925年5月13日、6月5日。

²⁰⁹秦源治『わが国球界をリードした大連野球界』84頁。

²¹⁰「善いか悪いか小学校の対抗競技」『満日』1931年3月6日；「競技会の名称を廃して体育会と改称する」『満日』1931年5月24日。

²¹¹ちどり「少年野球の神」『読書会雑誌』10巻2号、1923年2月。

寿の逆転ホームランで劇的な勝利を飾った。野本はのち奉天中学に進学するが、この一件が原因となって、入学後すぐに野球部に入れてもらえなかったという²¹²。なお、奉天小学校では、校内でリーグ戦を開き、さらに品行、学業成績、家庭の事情を考慮して選手を決めていたという。今回も中村教諭の引率で大阪の大会に出場することになった。遠征費用は約700円と見積もられたが、主催者から300円の補助があり、残る約400円を奉天小学校父兄会、同窓会、奉天毎日新聞社の寄附でまかなった。

1925年の第4回大会は、高等組で沙河口高等小学校、尋常組で奉天第二小学校が優勝した。しかし、大阪の全国少年野球大会に出場したのは、高等組準優勝の奉天高等小学校だった。理由は不明である。尋常組に優勝した奉天第二小学校は、日本学童野球連盟主催、大阪毎日新聞社後援の第1回日本学童野球選手権大会に出場した。この大会への参加を斡旋したのは、遼陽に駐屯中の歩兵第三十九連隊に所属する市川洋造大尉だった（市川は同大会の委員をつとめていた）。

1926年には第5回大会に優勝した安東第一小学校が大和美吉野運動場で開かれた日本学童野球連盟主催の全国小学校野球大会に出場した。1000円と見積もられた経費が問題になったが、自らプレートに立つこともあった満鉄安東地方事務所長太田雅夫の「安東より全満洲を代表すべき健児を全国大会に出場せしむる事は啻に安東の誇りであるばかりでなく一方児童の見学を広め且つ体育奨励上にも最も有益なれば進んで之を送るべし」との一言で、事なきを得た。満鉄にとっても「満洲を紹介する」があったのだ²¹³。1927年に全満少年野球大会は全満小学校スポンジ野球大会と改称され、全国大会への派遣はなくなった。

以上、大連と奉天で開催された少年野球大会を中心に見てきたが、撫順少年野球大会、北関東学童野球大会（金州）、国境少年野球大会（安東）など各地で少年野球大会が開催されていた。また、撫順小学校が遠征して鞍山小学校と戦ったり、中学校や社会人チームと対戦したりすることもあった。1923年に記者団を25対1で打ち負かした営口小学校は、翌年に営口駅と対戦、駅チームは「小敵と見て決して侮るな」と気を

²¹²野本千代寿「昭和初期の野球部」満洲奉天第一中学校同総会『楡の実』母校創立60周年記念号、19-20頁。

²¹³「全国野球大会にB組出場と決定」『満日』1926年7月20日；「B組の大会出場と市民の後援熱」『満日』1926年7月21日。

引き締めて小学生との対戦に臨んだが、背の低い小学生相手に四球続出し、18対2で大敗している。

第7話 野球 VII (スポンヂ野球)

1919年に神戸の東神ゴムが少年向けのゴム製野球ボールを開発すると、瞬く間に「少年野球」が広まった。ほどなくして青年たちもこの新しいボールを使って野球をするようになり、1921年にはそうした青年のための野球大会が神戸、大阪、東京、名古屋などで開かれた。彼らが使ったのは、学校ボール1号（高等科生徒用）であった。1922年、東神ゴムが青年向けにゴム製野球ボールを開発、学校ボール特号として売り出した。関東大震災後、とりわけ1924年からこの学校ボール特号を用いた野球大会が盛んになった。これらの大会は、青年野球大会、実業団野球大会、OB野球大会、軟球野球大会などと呼ばれたが、青年による「少年野球」を指す言葉はなかった。

「軟式野球」の名付け親を自負する横井春野（『野球界』主幹）は命名のいきさつについて、1925年に日比谷公園で大人がゴム製ボールを使用する野球大会を催したとき、皮製ボールを使用する野球と区別する必要に迫られ、テニスの軟式、硬式にヒントをえて「ゴム製ボールを使つて十六歳以上のものが行ふ野球」を「軟式野球」と命名したと語る²¹⁴。しかし、「軟式野球」という言葉が広く使われるようになるのは、1929年に神戸で日本軟式野球協会が結成されて以降のことである。

1924年春に東京帝大を卒業し満鉄に入社した神守源一郎は満洲における軟式野球の起源について後年次のように語っている。

これは自然発生的で誰がやつたといふことはない。しかし満鉄がこれを特に奨励してやつたといふことは事実で軟式野球大会の歴史は日本よりも遥かに古く、今のやうな立派なボールのない時代において既に満鉄では課を単位にしてやらせてゐる。初めは子供の野球だといつての、しられてゐた²¹⁵。

満洲でゴム製野球ボールを使った青年の野球大会が確認できるのは1923年以降であ

²¹⁴横井春野『軟式野球術』野球界社、1930年、3頁。

²¹⁵神守源一郎「満鉄と満洲の体育③」『満日』1940年10月6日。

る。軟式野球大会の歴史が日本より古いと語った神守は、満洲最眞にすぎないのだろうか。

関東大震災以前の軟式野球大会はほとんどマスコミに取り上げられず、その存在を知るものは多くなかった。したがって神守も来満前にその存在を知ることはなかっただろう。神守の初任地である長春では、神守が赴任する前年から軟式野球のリーグ戦が開かれていた（後述）。神守の認識は、彼の実体験に基づくものと見てよいだろう。

満洲でも 1929 年以降は「軟式野球」という言葉が使われるようになるが、それ以前はもっぱら「スポンヂ野球」、あるいはたんに「スポンヂ」と呼ばれた（「軟球野球」の呼称も用いられた）。スポンヂとは、東神ゴムが少年野球用ボールを開発するより前に出回っていたゴム製ボールを指す言葉だったが、1920 年代には軟式野球用ボールを意味した。

意外なことに、満洲におけるスポンヂ野球の流行は長春、営口、開原など州外の都市から始まった。まずスポンヂ野球初年の各地の様子を見てみよう。

1923 年の営口は「野球を語らぬものは営口市民ではない」というほど野球熱が高まり、数多くのチームが結成された²¹⁶。そんななか、6 月 22 日に「営口始まつて以来の珍試合」が行われた。なにが珍しかったかという、「慶応何年生れ或は明治三年とかでボールを手にした事さへ無いメンバー」という記者団側の陣容もさることながら、相手が営口小学校の生徒で、大のおとなが少年野球で彼らと対戦したからである。この試合は少年野球団を組織する前提として組まれたもので、結果は 25 対 1 で小学生が圧勝した²¹⁷。勢いにのる小学生チームは、7 月に大石橋小学校と対戦する。営口で最初の少年野球戦ということで大いに注目を集めたが、営口小学校は惨敗した。

小学生相手に思わぬ敗戦を喫した記者たちは、翌年営口でスポンヂリーグ戦が開催されると、これを後援した。スポンヂの導入により野球の底辺はいっそう広がった。各商店の主人らも野球チームを結成し、毎朝 5 時から小学校のグラウンドを借りて練習を始めた。田口運動具店の主人もメンバーの一人だった²¹⁸。

²¹⁶「野球試合豪雨で流れる」『満日』1923 年 8 月 1 日。

²¹⁷「野球試合」『大連新聞』1923 年 6 月 24 日。

²¹⁸「営口見聞」『大連新聞』1924 年 8 月 2 日。

長春のスポンヂ野球の元祖は、実業、北満両新聞社のメンバーを中核とし、警務署員や領事館員が加わったセーフチー倶楽部である。「セーフチー」とは、球が軟らかいので絶対安全だという意味でつけられた名称である²¹⁹。1923年7月1日、セーフチー倶楽部の最初の紅白戦が行われたが、このときには他に相手がなかった。ところが、競技の安全性が確認されるや、雨後の筍のようにチームが誕生し、7月16日にセーフチー倶楽部は満鉄病院と初の対外試合を行った。結果は、4対5でセーフチーが敗れた。8月31日から、長春スポンヂ協会の主催、長春野球クラブと北満、実業両新聞社の後援という形で早くもリーグ戦が挙行され、セーフチー、吉長鉄路、抜天、共栄起業、地方事務所、必勝団、小学校教員団、吉野町サクラ、満鉄病院、憲兵隊ハダカ、警務署の11チームが参加した（硬球選手は参加できなかった）。憲兵隊長小山彌の始球式により試合が開始されたが、翌日の関東大震災発生を受けて、リーグ戦はいったん延期される。しかし、ほどなく再開され、セーフチー倶楽部が初代王座に輝いた。『満日』はこのリーグ戦を「スポンヂボール界に於ける満洲リーグ戦」の嚆矢と位置づけている。

しかし、長春に先んじること5日、瓦房店満鉄野球部主催の（スポンヂ）野球大会が開かれていた。

当地の様な所で野球を正式にやろうとしてもスポンヂの様な訳に誰でもやれると云ふ訳には行かぬ、ソナ訳で従来は只機関区の一チームがあつただけで夫も左様に期待の出来る様なものでなかつたが而し結局野球部の費用の如き機関区軍の為に独専的に使はれて居た様な訳で何れかと云ふと或一部分にのみ限られて一般に野球に対する理解と興味とに缺けて居る様であつた……今回野球部幹事長浅井〔庄作〕助役の斡旋に依り愈スポンヂ大会をやることになつたのである²²⁰。

この記事からは、明確にスポンヂが野球の底辺を広げたことが読み取れる。実際、この大会には機関区だけでなく、地方事務所、守備隊、実業団、駅、列車区、学校・病院の7チームが参加した。2回戦の守備隊と列車区の試合は、日没ドロンゲームとなっ

²¹⁹「病院対記者団の軟球試合」『満日』1923年7月19日。

²²⁰「瓦房片々」『大連新聞』1923年8月23日。

たが、感情の行き違いから「暴言の交換」もあったという²²¹。試合そのものは十数点差で守備隊がリードしていたというが、守備隊は試合放棄を申し出た。9月には開原でもスポンヂ大会が開かれている。

スポンヂ野球の2年目以降の状況については、長春を例に見ておこう。1924年の夏季リーグ戦には20チームがエントリーした。スポンヂ盛況の原因は「硬球野球不振の結果」と言われた²²²。実際、長春の硬球野球は1927年まで長期のスランプに陥っていた。ところが、このスポンヂ熱もあつという間に冷め、1925年は7月まで試合がまったく行われなかった。このままでは駄目だということになり、長春スポンヂ協会総裁に憲兵隊長瀧野秀吉を迎え、7月19日よりリーグ戦を実施することになった。ルールについての協議では、スパイクは使用せず、デッドボールはボールにカウントし、7回制とすることなどが決まった。参加は7チーム、憲兵隊チームの捕手をつとめる瀧野総裁が始球式を行った。

1927年9月には渡辺運動具店主催の秋季野球大会が開催され、同大会が終了してから1週間後に長春スポンヂ協会の秋季リーグ戦が開かれた。参加チームは前者が6、後者が11。優勝は前者がセーフチー、後者が鉄道であった。1928年5月、済南事件の勃発により鉄嶺から歩兵第二連隊、平壤から歩兵第七十七連隊が長春に移駐してきた。同年の秋季リーグには歩兵第七十七連隊の大隊チームが参加した。

1930年の春季リーグでは、準決勝のCD対鉄火戦で悶着が生じ、スポンヂ協会長がその場で辞任、協会は一時解散、リーグ戦も中止されるという事態に陥った。秋季リーグは無事開かれたものの、決勝のCD対鉄火戦でまたもや悶着が生じ、優勝旗は協会が預かることになった。

1931年からは春、夏、秋にそれぞれリーグ戦が開かれることになった。万宝山事件が一段落してから開催された夏季リーグは参加16チームと盛況だったが、準決勝の歩兵第四連隊と鉄火の試合で、鉄火が審判の判定に文句をつけ、3度目となる紛擾が起こった。3度とも鉄火（長春駅貨物係チーム）がからんでいる。1000名あまりいた観衆がグラウンドに殺到し、警察と憲兵が出動して混乱を食い止めた。軍隊側は整然と引き

²²¹「病院学校対駅軍」『大連新聞』1923年9月5日。

²²²「スポンヂ野球の盛況夏季リーグ戦始まる」『満日』1924年6月10日。

揚げ、観衆から万歳を浴びた。秋季リーグは開かれなかったようだが、満洲事変のためか、この騒動のためかはわからない。

次に、満洲野球界の中心地大連はどうだったのか。管見の限り、1924年6月14日の埠頭対大連汽船の試合が大連で最初のスポンチ野球戦である。この試合は『満蒙年鑑』に採録されているが²²³、『満日』や『大連新聞』では報じられなかった。それ以前にも大連でスポンチ野球が行われていたかもしれないが、多事多端な大連スポーツ界にあって、報道するだけの価値を認められていなかったのだろう。

大連でスポンチ野球の大会が開かれるのは、1925年9月のことで、体育堂が主催した。参加は52チームに上り、南山倶楽部が優勝した。この大会に関して、『満日』にはスポンチ野球の発達を阻害するので満俱選手は出場すべきではないとの投書が掲載された²²⁴。翌年の大会では高等小学校以上の学生チームと一般チームに分かれた。こうして、スポンチ野球と硬式野球、スポンチ野球と少年野球の棲み分けが固まっていった。1930年の第6回大会には出場チームが66に上ったが、その多くは職場チームだった。これほど多くのチームが参加する大会はほかにはなかった。

1930年10月、奉天体育協会の主催で全日本軟球野球大会満洲予選大会が開かれた。軟式野球では最初の全満規模の大会であり、その名が示唆するように東京で開かれる日本軟式野球連盟主催、第1回全国軟式野球大会の満洲代表を決めることが目的だった。参加チームは、長春、鉄嶺、撫順、奉天実業、奉天満俱、本溪湖、遼陽だった。奉天以外のいずれの都市にとっても、軟式野球の代表チームを選ぶのは初めてのことだった。鉄嶺では鉄嶺運動協会が代表の選抜派遣に当たり、10月初旬に開催されたスポンチ野球大会の優勝チームである駅軍に他チームの優秀選手を加えて全鉄嶺軍を組織した。予選大会に優勝したのは奉天満俱だったが、翌月に開かれた本大会に満洲代表の姿はなかった。

内地では競技名称こそ「軟式野球」に統一されたものの、それに対応する競技団体は日本軟式野球協会（神戸）、大日本軟式野球協会（東京）、日本軟式野球連盟（大阪）、日本軟式野球連盟（東京）があり、それぞれが全国大会を開いていた。1931年、東京

²²³ 満蒙文化協会編『満蒙年鑑』大正十四年度、満蒙文化協会、1925年、769頁。

²²⁴ 「満俱選手に警告」『満日』1925年9月12日。

の大日本軟式野球協会が満洲での支部設置を求めてきた。大連の軟式野球関係者は同協会大連支部を設立し、同時に旅順、營口、鞍山、撫順、安東、長春にも支部を設け、各支部で1次予選、大連で2次予選を開いて、東京の全国大会に満洲代表を派遣することを決定した。支部長は大連市長の田中千吉、常務理事に遠山源蔵が就任した²²⁵。遠山は全大連スポンヂ野球大会を主催してきた体育堂の主人である。体育堂にとってのメリットは明らかだった。体育堂が販売する三十八匁軟式ボールは大会の公式球として、大連のみならず、全満の予選での使用が見込まれていた。運動具店と競技団体の関係は内地も同じで、だからこそ統一が進まなかった²²⁶。満洲ではのちに大連の玉沢運動具店が体育堂に対抗して軟式野球大会を創設し、極東軟式野球協会の公式球であるラッキーボールを採用する。

1931年7月から8月にかけて、満洲各地で1次予選が開かれた。旅順ではこれまで小森運動具店主催で開かれてきた全旅順スポンヂ野球大会が、日本軟式野球協会旅順支部主催の旅順予選会として開かれた。大連でも体育堂主催の全大連スポンヂ野球大会が、日本軟式野球協会満洲支部主催の大連予選会として開かれ、前回よりやや少ない63チームが参加した。しかし、大連、旅順以外では主催者の変更はなかった。支部設立が間に合わなかったようである。2次予選は9月ごろに予定されていたようだが、満洲事変の勃発で開催されることはなかった。

第8話 野球 VIII (大連の球場)

1900年代の大連にはまだ空き地がたくさんあったが、野球をする場所は少なかった。1909年の新聞記事によれば、市内の4つの公園(北公園、常盤公園(のち松公園)、東公園、西公園)のうち、公園らしい公園は北公園だけだったことがわかる。

大連に四つの公園があつても公園らしい設備の整つて居るのは北公園ばかり、東公園は有名無実で公園どころか草茫々の荒地、松公園には観音堂が出来て浅草式

²²⁵「スポンヂ野球の統一を図る」『満日』1931年7月9日。

²²⁶田中亮太郎「大正・昭和期における軟式野球発達過程について」『大阪芸術大学紀要芸術』17号、1994年。

を擬ても一個人の庭にも劣るあの狭さでは公園の資格は素よりゼロ、虎を飼ふ程の西公園は広いことも広い樹も茂つては居るが夜は大人も迷児になりさうな真暗闇、月が有つても木下闇の物凄さは自然主義の鬼が出張りさうな処である……〔北公園は〕通行止めのスケーチングコートと鉄網張りのテニスコートで幾分か狭くされても運動の器械は十分に備はつて、四阿も二つ三つベンチは到る処に設けてある²²⁷。

ちょうどこの記事が掲載された日に、西公園に自転車グラウンド開場式をかねて、満洲自転車大会が挙行された。主催者は大輪倶楽部で当時 100 名ほどの会員がいたという²²⁸。

公園でできないとするなら、野球はどこで行われたのか。西公園のさらに西に伏見台と呼ばれる高台があり、中央試験所の建物がぼつんとたっていた。その前の広場の木柵で囲まれた空間が「ベースボール」のグラウンドだった²²⁹。このグラウンドは、1910 年秋の第 1 回満鉄運動会のためにさらに整備がなされ、「東洋一」と称された²³⁰。グラウンドを管理していたのは満鉄運動会野球部で、同部の幹事に申し込めばだれもが使用できた²³¹。しかし、1913 年には中央試験所の建物が立つことになり、グラウンドは閉鎖された。

満鉄は伏見台に新たなグラウンドを設ける計画を立てていたが、関東庁から公園計画に基づき、ぜひ公園内に設置してほしいとの要望が寄せられた。両者協議のうえ、満鉄が西公園にグラウンドを設置し、その使用权を保持したまま、関東庁に寄附することになった。満鉄は 4 万円あまりを投じて、1914 年春に新グラウンドを設置した²³²。「奇麗だとは世評であつたがまだまだ案外具合の悪い所が多い」とは『満日』の評価である。楕円形をしているので、野球には向かないし、石ころまじりの土をローラーで圧しただけだから、スパイクをはいてプレーすると石が出てきて、危ないうえにイレ

²²⁷「鶴の棲む北公園」『満日』1909 年 7 月 4 日。

²²⁸「満洲自転車大会」『満日』1919 年 6 月 29 日。

²²⁹「昨今の伏見台」『満日』1909 年 10 月 25 日。

²³⁰「満鉄の運動会」『満日』1910 年 10 月 10 日。

²³¹「伏見台の野球」『満日』1911 年 6 月 20 日。

²³²「もんだいと成つた野球場移転問題」『大連新聞』1926 年 12 月 1 日。

ギュラーも多かった。排水も悪く、割れた茶碗などを使ってくみ出していた²³³。とはいえ、大連随一のグラウンドであることには違いなかった。満俱の猪子一到主将はネットを2本の竹棒にまきつけ、そこにグローブやらミットやらを縛り付けて練習に通ったという²³⁴。一方、大連実業は第三小学校（のちの常盤小学校）をホームグラウンドにしていたが、1915年に東広場重要物産取引所の裏にグラウンドを新設した²³⁵。

1916年、西公園満鉄グラウンドで関東州野球大会が開かれた。林田学によれば、関東州野球大会も最初のころは観客が500～600人にすぎず、主催者である満日社員が市内を歩いてベースボールがあるから見に行ってくださいと勧誘しなければならなかった。ところが1918年ごろより満日社が入場券や招待券（いずれも無料）を発行しはじめると、人々は争って券を入手しグラウンドに押しかけるようになった²³⁶。

関東州野球大会創設の前後より野球熱が高まり、次々と野球チームが結成された。これらのチームが試合に使ったのはたいてい西公園の満鉄グラウンドか東広場の実業グラウンドであった。このほか、埠頭事務所が第二波止場東の広大な埋立地にグラウンド（寺児溝グラウンドもしくは埠頭グラウンドと呼ばれた）やテニスコートを設置していたし、電気作業所、満鉄用度課、業業組合なども独自のグラウンドを持っていた。1918年4月の「大連と運動設備」と題する新聞記事には、「近来野球や庭球が盛んになつて市内十数ヶ所の運動場は毎日練習に本試合に健児の汗を見ぬ事はない」と書かれている。この記事は内地や欧米の事例を引きながら、大連には満鉄が経営する運動場があるものの、「あんなものでは小運動会や野球グラウンドとして用ひられる丈けで市の運動場としては殆どなつてゐない」と批判し、大連市が「完全な小児大人の運動場を設備」するよう要望した²³⁷。

都市の発展と運動熱の勃興によって、大連市民は運動設備の不足を感じるようになっていた。いくつかのグラウンドは都市開発で立ち退きをよぎなくされた（たとえば、寺児溝グラウンドは1921年を最後にその存在を確認できない）。大連実業も東広場の

²³³「運動界」『満日』1914年5月13日。

²³⁴林田学「実満戦開始期の回顧」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』106頁。

²³⁵「BC対満日野球戦」『満日』1915年10月17日。

²³⁶林田学「実満戦開始期の回顧」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』106頁。

²³⁷「大連の運動設備」『満日』1918年4月19日。

グラウンドから追い立てられた。実業首脳陣は西公園の射的場の下にグラウンドを建設したいと大連民政署に申請したが、その地はすでにYMCAがグラウンド建設のため民政署と貸し下げの交渉を始めていた。大内丑之助署長は両者の協調を促したが、実業は西公園を断念し、1918年に朝日町に新グラウンドを建設した²³⁸。ところが1年あまりでまた立ち退きを迫られ、西公園でのグラウンド建設を申請した（YMCAはすでに建設を断念していたようである）。新グラウンドは1919年10月に完成し、実業はついに自らのホームグラウンドを持つことになった²³⁹。

1920年12月10日夜に来連した下村宏台湾総督府総務長官は、翌朝ヤマトホテルで朝食をとりながら、「油房を三つも四つも見せないで是非西公園のグラウンドを見せて呉れ給へ、昨夜当地の雑誌新聞を読んで運動熱の高調して居るのに感心した、実は台北でグラウンドを作つたが少し小さいように思ふ」と語った。この話を聞いて『満日』記者は下村のような人が公人として満洲に来れば運動が大いに興るだろうと感じた²⁴⁰。下村が西公園のグラウンドを見てどのように思ったかはわからない。

1922年春、満俱はグラウンドの改修を申請する。3万円を投じて、石ころ混じりの土を掘り下げ、その土を盛って12段からなる観客席をつくるほか、ネット裏を拡張し、座席番号をつけることなどが計画されていた。同年秋より工事を始め、翌1923年5月に竣成した。

ここで、入場料の問題に触れておこう。日本の野球試合で入場料を徴収したのは1907年にハワイからセントルイスチームが招聘されたときに始まる。大連では入場券（整理券、招待券）が配布されることはあっても、入場料をとることはなかった。1920年に来連した加藤吉兵衛（元早大選手）は大連の野球熱に驚きながらも、入場料を徴収していないことを不思議に感じた。外来チームの招聘には「少くとも四千円位の費用」を必要とするが、大連では「一部熱心なる好球家又は商店会社等」からの寄附に頼っていた。入場券の配布にも問題があった²⁴¹。それはけっして公平に配られているとはい

²³⁸「野球場の新設」『満日』1919年6月19日；「実業野球団新グラウンド」『遼東新報』1919年6月25日。

²³⁹「グラウンド開きと実業紅白試合」『満日』1919年10月11日；「盛況なりしグラウンド開き」『満日』1919年10月16日。

²⁴⁰覆面記者「運動忘年怪焰」『満日』1920年12月26日。

²⁴¹加藤吉兵衛「入場料徴収に就て」『満日』1920年9月4日。

えず、売買が行われているという噂も立っていた。

外来チーム戦での入場料徴収に踏み切ったのは大連実業であった。この年春に赴任した大連民政署長田中喜介は内地の複数の県で内務部長を歴任した人物で、つねづね入場料徴収を面白くないと思っていたから、入場料を取らない大連を好ましく感じていた。それなのに、赴任早々入場料を取るとはけしからんと、実業の関係者を呼びつけた。そこで、実業の側では、大部分は無料で開放すること（徐々に無料エリアは小さくなる）、毎回民政署に収支報告を出すこと（最初のうちしか守られなかった）を条件に、許可を求めた。1921年7月、ついに大連民政署は関東州外のチームとの対戦に限って入場料徴収を解禁した²⁴²。満日社の林田学は野球を興行物視するのは偏見だと述べて、民政署の決定を歓迎した²⁴³。7月21日の関西学院戦からさっそく入場料が徴収された。値段は2円、1円の2種類で、かなり高額であった。翌月には奉天野球後援会も入場料の徴収を決定、1923年4月には撫順野球倶楽部も入場料の徴収を決めた。大連の満倶グラウンドが入場料徴収に踏み切るのは1926年のことである²⁴⁴。ただし、実業グラウンドも満倶グラウンドも外野は無料であった。

大連市街が西へ西へと拡張するにつれ、西公園はもはや大連市の西端ではなくなった。1926年4月、西公園は関東庁から大連市に移管され、中央公園と改称された。同年秋、実業、満倶両グラウンドの移転話が突如として持ち上がった。そもそも公園の移管条件に関東庁が立てた改造計画を実施することが定められていたが、大連市はその後の状況の変化を考慮して改造計画を再検討し、満倶グラウンドを屋外集会場に、実業グラウンドを遊歩地に改造する計画に変更した。大連市役所社会課長は、関東庁が満倶グラウンドを公園に誘致したのは当時寂れていた公園の繁栄策であって、この際郊外に移転して理想的なグラウンドをつくるのがよいと述べた。この案は11月29日の市会で検討されたが議論百出し委員附託となった。実業と満倶はもちろん大反対だった。実業はグラウンド建設のために多額の負債を抱えていたし、満倶も現在のグラウンドを拡張したいと考えていたものの、退社後数分で行けるようなグラウンドは

²⁴²「野球入場料徴収許可」『満日』1921年7月16日。

²⁴³林田素繩「問題視されて居る野球入場料徴収、球界発展の為に結構な事、興行物視するは偏見だ」『満日』1921年7月17日。

²⁴⁴好球K生「野球の入場料」『満日』1926年7月25日。

満鉄社員のみならず市民にとっても必要であると考えていた。結局移転は保留となり、満俱グラウンドの一部拡張が認可された²⁴⁵。拡張工事は1928年春に完成した。一方、公園改造のほうは1928年から10年計画で実施されることになったが、満洲事変で中止され、翌年に改めて7年計画で実施された。もちろん、実満両グラウンドが移転されることはなかった。

内地から満洲を訪れた野球選手は女性の観客がいることに驚くことが多かった。1918年に大連実業に入団した安藤忍は、「私が大連へ来て一番驚いたのは野球熱の盛んなことです。殊に婦人に迄其の趣味が普及してゐる事は内地にも余り見られない現象です」と1920年に述べている²⁴⁶。1922年に初めて来満した日本運動協会の原山芳三郎も「流石に満洲は野球熱が高い……驚いたのは女学校の生徒までも教師引率の下に見に来た事である」と、長春での出来事を書きとめている²⁴⁷。このように、女性観客の存在は満洲の野球熱の高さと結びつけられていた。

いつから女性は球場に姿を見せるようになったのか。1914年以来、実業団の選手を世話してきた福島ヌイは、初期の状況について、「見物の人もそうなかったのどす、精々百人位、女なんて一人もいやらしまへん」、「私なぞ気狂ひ扱ひにされた」と述べている²⁴⁸。

しかし、長春では事情が違った。

グラウンドには毎日夕方になると、岩永駅長の家族、山内領事夫妻、工藤正金銀行支店長夫妻、松原鮮銀支店長（現在の鮮銀総裁）を始め市中の紳士淑女達が練習見物に来て、娯楽機関のなかつた長春では、グラウンドがまるで社交場のやうになつてしまつた²⁴⁹。

1915年に満洲野球大会が開かれたさい、各地から数多くの応援団が駆け付けたことは先述したが、長春の応援団には岩永裕吉夫人、内垣実衛夫人をはじめ「多数の夫人

²⁴⁵「大連中央公園二大グラウンド移転問題の批判」『満日』1926年11月2日；「大連中央公園二大グラウンド移転問題」1926年11月3日；「もんだいと成つた野球場移転問題」『大連新聞』1926年12月1日；「公園計画と野球場」『大連新聞』、1927年5月6日。

²⁴⁶安藤二墨手「野球の科学的見解」『満日』1920年8月31日。

²⁴⁷原山芳三郎「運動協会軍滿鮮遠征通信」『運動界』12巻12号、1922年9月。

²⁴⁸「福島氏の御母さんの大気焰」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』32頁。

²⁴⁹野田俊作「長春野球事始め」『満日』1941年1月14日。

連中」が加わっており、彼女たちのために天幕を張って特別席が設置されるほどだった²⁵⁰。

翌1916年から始まった関東州野球大会では、毎年のように女性の観客がいることが報道されている。1917年には、「野球狂の二婦人」、すなわち満鉄の中川久明夫人と山田〔潤二?〕夫人²⁵¹、1918年には「野球を理解してゐる」婦人²⁵²、1919年には「ネットの横の石段に早朝より終日立ち尽して居た二人の女性、時に身体を震はし時に地団太を踏み或は黄色い声を挙げて姫御前のあられもなく怒鳴り給ふ」と、さまざまな女性がいた²⁵³。このような報道がされるのは、女性の観客がまだ珍しかったからである。1920年代に入ると、女性の観客はありふれた光景となっていた。

先述した福島ヌイは、大連実業の合宿所の近くに住んでいた関係で、留守番や世話を引き受けるようになった。実業の選手で「おばさん」の世話にならなかったものはいない。湯浅禎夫も小遣いがなくなって「おばさん」に泣きついた口だった²⁵⁴。1932年に福島は「今の選手は贅沢どす昔の選手はグラウンドの水まき、ローラー引き、ライン引き等も皆選手がありましてそら苦勞したもんどす」と回想している。満洲では中国人の労働力が安価で得られたので（いわゆる苦力）、白線引きからボール拾い、はては打者のバットの片付けまで、中国人にさせた。このことも、内地から来た選手を驚かせた。福島自身もご飯の支度や洗濯などに「支那人を沢山つかつてみましたから土木係といふやうな役で地ならしをしたり、グラウンドの設備をしたりして」いたのである。そんな福島も体を悪くしてからは球場に顔を出すことができなくなり、長男が買ってくれたラジオに耳を傾けるが、ラジオでは「ほんまにつまりません」と愚痴をこぼしている²⁵⁵。

最後に「野球場の主」についても触れておこう。大連で運動会や競技会の設備を引き受けていたのが、はやぶさ組だった。そのはやぶさ組に土井丈太郎という人がいて、

²⁵⁰ 田中幸英「大正初期の頃」『満日』1941年1月29日。

²⁵¹ 「野球スケッチ」『満日』1917年6月5日。

²⁵² 「本社主催第三回野球大会」『満日』1918年6月3日。

²⁵³ 「野球大会小品」『満日』1919年6月3日。

²⁵⁴ 「御小使値下げ」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』109頁。

²⁵⁵ 「古い選手やファンが親しみの『おばさん』」『満日』1931年6月21日；「福島氏の御母さんの大気焔」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』32頁。

グラウンドの整備に尽力してきた。実満の選手から「おやじ」と呼ばれて親しまれていた。1921年に遼東新報社の記者長沢千代造から示唆を得て、土井は野球場で椅子と座蒲団のレンタルを始めた。これが大いに当たった²⁵⁶。土井はみずからいよ組を立ち上げ、スケート場の整備にも手を出すなど、スポーツ界との関わりを深めていった。5日間で15万人の観客を集めた1928年の日仏競技では、メインスタンドの座蒲団代だけで8000円の収入があったというから、たかが座蒲団といっても甘く見てはいけない²⁵⁷。

土井は大連スポーツ界の「かくれた功労者」であった²⁵⁸。

²⁵⁶「グラウンドの主 いよ組の土井君」宮崎愿一ほか編『大連実業野球団二十年史』151頁。

²⁵⁷中日文化協会編『満蒙年鑑』昭和四年度、497頁。

²⁵⁸「安楽椅子」『満日』1932年11月19日。